Folio vol.9

2005.05

Folio vol.9

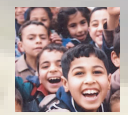
Out Of.....

Folio vol.9

Out Of…

Feature out of ……

アンケート 「あなたが今 out of したいものは？」



インタビュー 旅に出よう～EYE世界一周旅行記～

詩
- 宿命の様に旅人を愛す — ニィナチカ
- 組曲「旅の夢」 — 縫坂疎琅

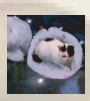
小説
- 臨界点の青と — ハシモト
- 誕生日 — 寒竹泉美
- drifter — 茶石文緒
- サン・マンドニの白い砂 — 岡沢秋
- みんなのうた — オカヤマ
- 過ぎゆく夏 — 村上妙
- グランドフィナーレ — 歪
- データーベースラブリー — サイキカツミ
- A Dreaming Traveler — 岩井とおる
- 去る物語 — 朝倉海人

写真

ROMI's

PIYO's

KAORI's


THE ADVENTURES OF FLOWER CATS — YUKI

絵

PECO 明け方

Key out of the world

ネオンナイツ

two

エッセイ
- 「potudo-ru」 — いざまん

連載
- "いろは"の先のCSS — 徳保隆夫
- メッセージをどうぞ — 茶石文緒
- 不愉快なテクスト — 加納景
- おいしい水 — サイキカツミ

編集後記

photo : kaori inbe

out of= 離れる、逃れる、逸脱する、抜け出す

【♂編】
▲ 1. 貧乏 2. 怠惰な自分 3. 鬱。
▲ 太ってく自分 !!!!!
▲ 熱
▲ ぬるま湯。やっぱり僕のいる世界はまだまだ温い・・。
▲ 理想に囚われる心。
▲ out of her clothes たまに間違って out of his clothes になるときも・・・
▲ 昼間眠い
▲ 研究室
▲ 不安
▲ タバコ
▲ デブから逃げ出したい。いや、自分のことね。
▲ ちゃんとした恋人がいない状態
▲ でぶってきた腹
▲ 会社
▲ 日常
▲ 慢性副鼻腔炎 (蓄膿)
▲ 論文が仕上がらない日々
▲ 経済活動
▲ 俗世

「あなたが今 out of したいものは？」

【♀編】
▲ 現状 !
▲ 道 ...?
▲ 花粉
▲ 金欠病、酒
▲ ネット中毒
▲ 弱い視力。裸の眼で世界をみたい。。(ただ単にコンタクト疲れる)
▲ 部屋です。ひきこもりから脱したいです。
▲ 偏食
▲ " 働かないと生きていけない " という現実。
▲ 果てしない物欲
▲ 昔は沢山あったんだけど、今は、ないかなぁ ..... 。何かから out of してしまうことよりも、いまいる場所、いまあるものを変化させること ... いまここにいる自分が変わることを考えてしまう。
▲ プレッシャー
▲ 時間の概念

What is Out Of.....

■「Out Of……」って何だろうか。まず今回の企画で一番悩んだものがこの質問だ。というのは、Out Of……というのは言葉ではなく概念だからだ。
■「Out Of 〜（何何）〜」の何何の部分。out-of-the-way ── a. へんぴな ; 風変りな ; 珍しい . / out-of-body ── a.（魂や精神が）肉体離脱の , 体外遊離の . / out-of-date ── a. 時代遅れの ; 現在では使われない . / out-of-door ── a. = outdoor./out-of-town ── a. 市［町］の中心から離れた ; 他の町［市］の（いずれも goo 辞書）
■ これらから見られる「Out Of……」はものの外れる起点、場所、存在、それらからの逸脱を示すのではないか。そう。逸脱。
■ サブタイトルとして【 Go out of daily life with your favorite words and arts, And you can come across the new world. If you want to go out of...】という一文を載せた。
■ もしかするとそれは、旅かもしれない。もしかするとそれは孤独かも知れない。もしかするとそれは発見かも知れないのだ。この言葉の概念は、そう out of... して一歩、踏み出そうということだ。そう。望みさえすれば、何かがある。きっと。

photo : katsumi saiki

旅に出よう

～EYE 世界一周旅行記～

Interview for KENJI YOSHIMURA

（聞き手 : ぱそ子）

26 歳の春、彼は仕事を辞め、いつか行ってみたいとずっと心の奥に描いていた世界一周の旅にでかけた。
初めての一人旅、そして一眼レフを使ったのもこの旅が初めてだった。
彼が旅に持っていったものは、優しく柔軟で鋭敏な感性。彼は旅先で撮るべきものに出会い、言葉にすべき想いを持って帰って来た。

■吉村健二
大阪府枚方市出身、1976 年 2 月 2 日生れ。2002 年春、職を辞し世界へ飛び出す。旅の記憶を EYE ～世界一周旅行として公開中

Question

——思い立って仕事をやめて世界一周の旅に出ることを決めたその決意、今まで一眼レフなどいじったことがなかったのにあれだけ胸を打つ素敵な写真を撮っていること、サイトを立ち上げ日本の人にもっと元気になってほしいという今の思い……どれをとっても吉村さんへの興味は尽きませんが、今回、EYE で一番衝撃を受けたのは「笑顔」でした。

——眺めているだけで、世界中に友達ができたような気分になって胸が熱くなる笑顔の写真たち。仲良くなるまでカメラは見せない、というのは撮影上のテクニックですが、言葉も通じない、年齢も文化も違う、滞在時間も長くない、そんな条件の中で、あんなに素敵な「笑顔」を引き出すなんてすごい。というわけで、とっても素朴な疑問、

■ Q1 ■

——どうやったらあの写真みたいにいろんな人と仲良くなれるのですか？仲良くなるには何が大切なんだろう。(……って、しまった！　小学生みたいな質問になってしまった!!)

Answer

どうやったら仲良く……

そうですね、今思い出すとあの時、ただ本当に楽しかったんだと思います。もともと、色んな人に出会いたい。色んな文化を知ってみたい。この目でみてみたい。そう思って飛び出したから、出会う人との会話が楽しくて楽しくて。

もちろん英語はそれほど話せたわけではなかったけど、相手も、必死で僕のこと興味をもって話しかけてくる。そしたら、応えようって気持ちになるし、自分のこと伝えたいって思うし。

相手に合わせるのがもともと性格的にうまいせいなのか、順応性があるからなのか、楽しく話しかけてくれたら、こっちもそれにあわせて楽しくなってしまうんですよ。

もちろん悪い人もいるだろうけど、そんな人も話していれば楽しいし。お金をぼるってことは、その人が悪い人だとも言えない。HP でも書いたけど、それは、大切な家族を養うための手段であったりするわけで。死ぬ可能性がない限り、僕はそんな人達とも遊んでました。

イスラム世界では誰とでも握手します

旅先で写真を撮る時は、特に何も考えていませんでした。状況はだいたい、2 パターン。ひとつは、直感的に、あーいいなー、この子の顔。いい味だしてるよなー、このおじさん、って感じで声かけて、話して写真撮りたいけど、このタイミングでだすのも悪いなぁーって思って、コミュニケーションとってから撮れる空気を感じとれたら、カメラを鞄から取り出してました。

もうひとつは、旅先で仲良くなった友達と一緒の時に、記念撮影気分、「おーい撮るよー!」といった感じで撮っていました。

だいたい手を振りながら、「こんにちはー！（現地の言葉で）、またね ~!!」というようなノリです。よく考えたら、今挨拶したばかりなのに、すぐにさよならーって、日本でやったらおかしいですよね。でも海外だと、そんなさり気ない一言が大きなコミュニケーションでした。

特にイスラム教だと、誰とでも握手しますしね。

さて、僕がすぐに仲良くなれる理由。

それは父の影響が大きいのかもしれません。

父は、地元地域密着で町の電気屋さんを営んでいるのですが、昔から、一緒にどこへ行っても、いつでも誰とでも話しかけている。それは地元だけでなく、どこへ行っても、スーパーでも、コンビニでも、めし屋でも、土産屋でも、店先でも、旅館でも、とにかく、誰とでも気がついたら仲良くなっている。そして、父はもちろん陽気に話しているのだけど、相手もすっごく楽しそうにしている。それが、羨ましく、またそんな父が誇りで、憧れだったからかもしれません。だから僕も、どこへ行っても、誰とでも話せるようになったのだと思います。

興味を持つ、好きになる、思いやる

人と仲良くなるには。

これは、僕は 2 つのことを心がけています。

ひとつは相手のことに興味を持つ。

そして好きになる。そして思いやる。ことだと思います。

好きになるということは、損得ではありません。

ただ、この人の話おもしろい。この人の考えおもしろい。この人いい表情してるなという感覚だけです。

そして嫌なことは忘れてあげて、いいことだけ思い出して接してあげれば、自然と自分も笑顔になるし、相手も心を開いてくれます。決め手は、「どんな時も忘れない、思いやりの気持ち」かな？

さて、二つ目はというと、楽しんでいる自分を好きになってあげる、かな。

いつも、「自分は楽しんでるぞー!」って思うように努力すること。楽しむことって、放っておいて出てくるものでないと僕は思っている。自分でつくらないと、絶対楽しいことなんて、見つからない。だから努力しないといけないと思うんです。そして、その努力したことを公表する。「おれは楽しんでるぞー!」って。思いやりをもって、嫌味なく。そうしたら、勝手に相手も楽しくなって、意気投合したりするもんだと思うんです。

「あー、この人、楽しそうに生きている。面白い人だ」って。

SUDAN

LAOS

PAKISTAN

そして、その人も心を開いて、楽しくなろうと、話して、動いて、必死に努力する。お互い笑顔になれば、相乗効果で親密になってきます。あとは、それに加えて、「笑顔」と、「挨拶」があれば、完璧でしょう（笑）
そんな感じです。長くなりました……。

Question

▼海外旅行といえば、世界の名所を訪れる旅が一般的ですが、吉村さんの旅行は、「世界の人の心を訪れる旅」だったんだなあとサイトから感じました。EYE の中で、わたしが一番好きなコンテンツは Impression なんです。その国の人々の心を訪れた感想が数行でまとめてあるコンテンツ。あれを見ていると、普段日本で暮らしていて考えもしなかった「当たり前」が、ちょっと待てよ？って考えさせられたり、視野が広げられたりします。各国に添えられている言葉は、その国の場所だけじゃなく、心も訪れた吉村さんだからこそ、出てくる言葉だなあと感じました。で、質問。

■ Q2 ■
あの中に「日本」を加えるとどうなるんだろう？吉村さんから見た日本の Impression をお聞かせ下さい。また、Introduction には、「もっと日本を元気にしたい」と書いてありますよね。吉村さんの写真見てたら、確かに日本って元気がないなあということを何となく感じるのですが、一体どんなふうに元気がなくてどんなふうになったらもっと元気になるんだろう、とふと疑問に思いました。よかったらそのへんもぜひ聞いてみたいです。

Answer

日本の Impression。この質問にはたいへん困りました。
なぜかというと、帰国後僕がすぐに書いた日記を読むと、日本についてネガティブなことしか書いてなかったからです。（本当に恥ずかしいぐらい）
でも、「今の日本はだめだからもう嫌だ。他の国に移り住もう」といったような、諦めのネガティブではないんです。「だめだから、がんばらねば！こうしてやるんだ！」って気持ちの裏返しだったのです。

自分が悩んでいることが、今の日本

Impression はその国その国で、いいとこ悪いとこ千差万別なんだけれど、その中でも、いいとこ見習ってみようというのが、もともと作成した動機でした。
でも、今回の「日本」の場合はほんとネガティブなことしかなく、困りました。何だろう。
世間で耳に入るようなことに納得して、それを表現するのは、「EYE」とは違う。ネガティブなことを表現するのも「EYE」ではない。じゃあ何なんだろう。
ずっと考えて、ふと思ったのが、今までの人生、自分が悩んでいることが、今の日本じゃないのかな。もがきながらも、よくしていこうと必死になっている自分。そして、僕と同じ境遇で、共感してくれる人が大勢いる状態が、今の日本なんだ。ということでした。
Impression は僕の魂の一部。
どの国も、僕の生き方や思いが込められています。
日本はこんな感じになりました。

≪ Impression 日本≫
こうしたほうがいい。ああしなきゃだめだ。
どうしてみな自分の価値観で人を判断するのだろう。
どんな生き方だっていいのに。
どんな人生だっていいのに。
この国の人はみんな悩んでいる。

世界の人々がみる国 JAPAN：次ページ

さて、日本が元気ないのは、なぜだろう。なぜあんな表情がでないのだろう。僕は、とにかくみんな悩んでいるんだと思います。そして、もちろん僕も悩んでいる者の中の一人に入ります。今の日本は、誰もが悩み、不安でいる。「このままでいいのだろうか」そんな状況で、彼らのような表情をだすことは無理なのかもしれない。

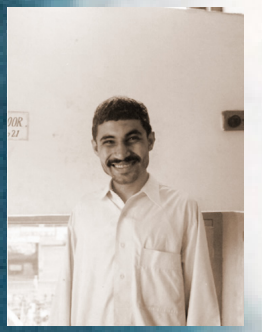
どういうふうになったら元気になるんだろう。

僕がいつも心掛けていること、それは、『ひとりひとりが自分を好きになること』それが一番大切なことだと思います。自分を好きになれたら、自然と力も出る。元気になる。楽しくなる。
そして、その楽しさはまわりに伝播する。そうなれば、日本中のひとたちが元気になるのだと思うんです。自分を好きになること。これは本当に難しいことです。でも、できることは少しずつしかできない。将来が不安で悩むんだったら、一日一日を大切に生きていきたい。
また、自分が好きになれない、自信がないんだったら、自分の周りの友達を好きになってあげればいい。家族を好きになってあげればいい。そしたら周りの人たちも、自分のことを好きになってくれる。そしてあとは、彼らを信じてあげればいい。自分を信じれなくても、友達や家族ぐらいは信じてあげたい。
僕はそうやって人生の中でどんどん、「人」＝「仲間」を好きになっていった。
だから、「元気になること」っていうのは「たくさんの人を好きになること」だと思うんです。
今の時代、誰もが悩み苦しんでいます。
でも苦しんだ分は、必ず大きな力をたくわえ、強く飛び立ちます。その時、ひとりひとりが、人間らしく、そのひとらしく楽しく生きて、日本がどんどん元気になることを、僕はいつも願います。F

ETIOPIA

【EYE】http://www.eye-world.jp/

世界の人々がみる国 JAPAN



日本とパキスタンはいい関係だよ。

君たちが道路等を整備してくれるから
こうやって毎年山登りができるんだ。

僕は日本人が大好きだよ。
日本人はいつも一緒に遊んでくれるんだ。
ヨーロッパ人やアメリカ人の人はなぜか僕と
目をあわしてくれないしね。

ジャパニーズ！ おしんは今どうしてる？
元気か？ どこに住んでいる？

彼らは日本を知っている。
映画、俳優、サッカー選手 etc
しかし僕はこの国について何も知らない。

車は毎年買い換えてるよ。
日本車はやっぱりいいね。

「ジャッキーチェン！ ジャッキーチェン!」
中東の多くの子供たちは僕に向かってこう叫ぶ。
東洋のイメージは「カンフー」だ。
彼らにとっての「東洋」は、「中国」も「日本」も一緒。
それは僕が「ヨルダン」と「シリア」の区別が
つかなかったことと同じ。
僕は毎日へなちょこカンフーを教えるのに大忙しだ。

日本人は慎重にカーペットを選ぶよね。
そうやっていつも先のことを考えているから。
素晴らしい技術と開発力が生まれたんだね。
それに比ベイラン人は駄目だな。
目先のことしか考えないから買っても
すぐに後悔するんだよ。

その国で出会った人の印象で
その国が好きか嫌いかが決まる。
そして僕の態度で日本の印象が決まる。

とにかくアニメはすごいね！
意図された人間社会、地球環境への提言、
何よりも素晴らしいね。
僕にとっては日本は想像が膨らんでいく
未知の国だよ。

宿の主人は壁の下の部分を指差して説明した。
『WATANABE JAPAN』
ワタナベは 10 年前この地に遊びに来た。
そしてこの村に一つの学校を作ってくれた。
そしてお金を出すだけでなく彼は
ここへ来て業者達を指導し学校を建てた。
今では 3 つの学校がここにあるのだよ。
彼には本当に感謝しているよ。

中東は自国の利権政策に走る
アメリカでなく、
19 世紀植民地化を奮って進めた
ヨーロッパでもなく、
アジアの中で経済的成長を成し遂げた
中立の国「日本」にやはり手を
貸してもらいたいわね。
日本人は優れた民族だよ。
多くの文化 SONY... 松下 ... 技術もすごいけど、
でもおれは日本人のこころが好きだね！
自分の家族や日本社会だけでなく、
地球全体の調和を図ろうと考えているからな。

アジアを旅して感じた日本。
彼らは皆日本をリーダーと思っている。
中東を旅して感じた日本。
彼らは皆中立的立場の日本を頼りにしている。
アフリカを旅して感じた日本。
彼らは戦後成功を遂げた日本に期待している。

日本は世界の憧れだ。

JAPAN is SAMURAI

EYE

YUKI presents.『 THE ADVENTURES OF FLOWER CATS 』

THE ADVENTURES OF FLOWER CATS

花から生まれた小さな猫たち。

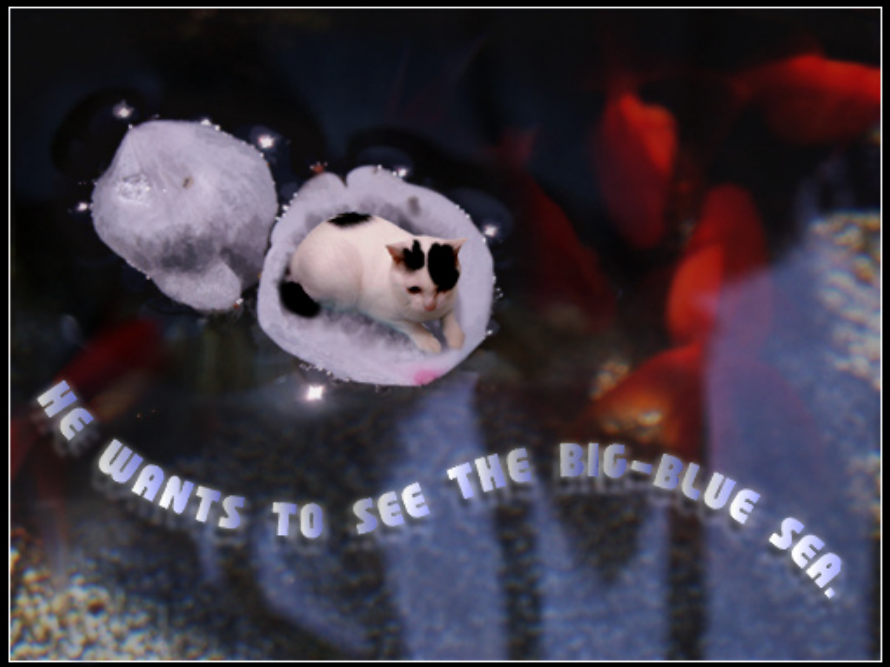
好きな場所へ旅をして、
鮮やかな世界に出会うのです。

花猫は花の中から生まれます。

世界が僕たちを呼んでいる。

世界に会いに行かなくちゃ。

虹待ち。



海を目指して。

もちろん冒険には危険がつきものなんだけど、

勇敢な彼らは恐れないのです。

…世界に会いに行かなくちゃ。

僕を食べるの？

THE ADVENTURES OF FLOWER CATS

花から生まれた小さな猫たち。

Photo & Design : YUKI
Word : YUKI & IZUMI

写真の無断転載・転用禁止。

Illastration by PECO 「明け方」

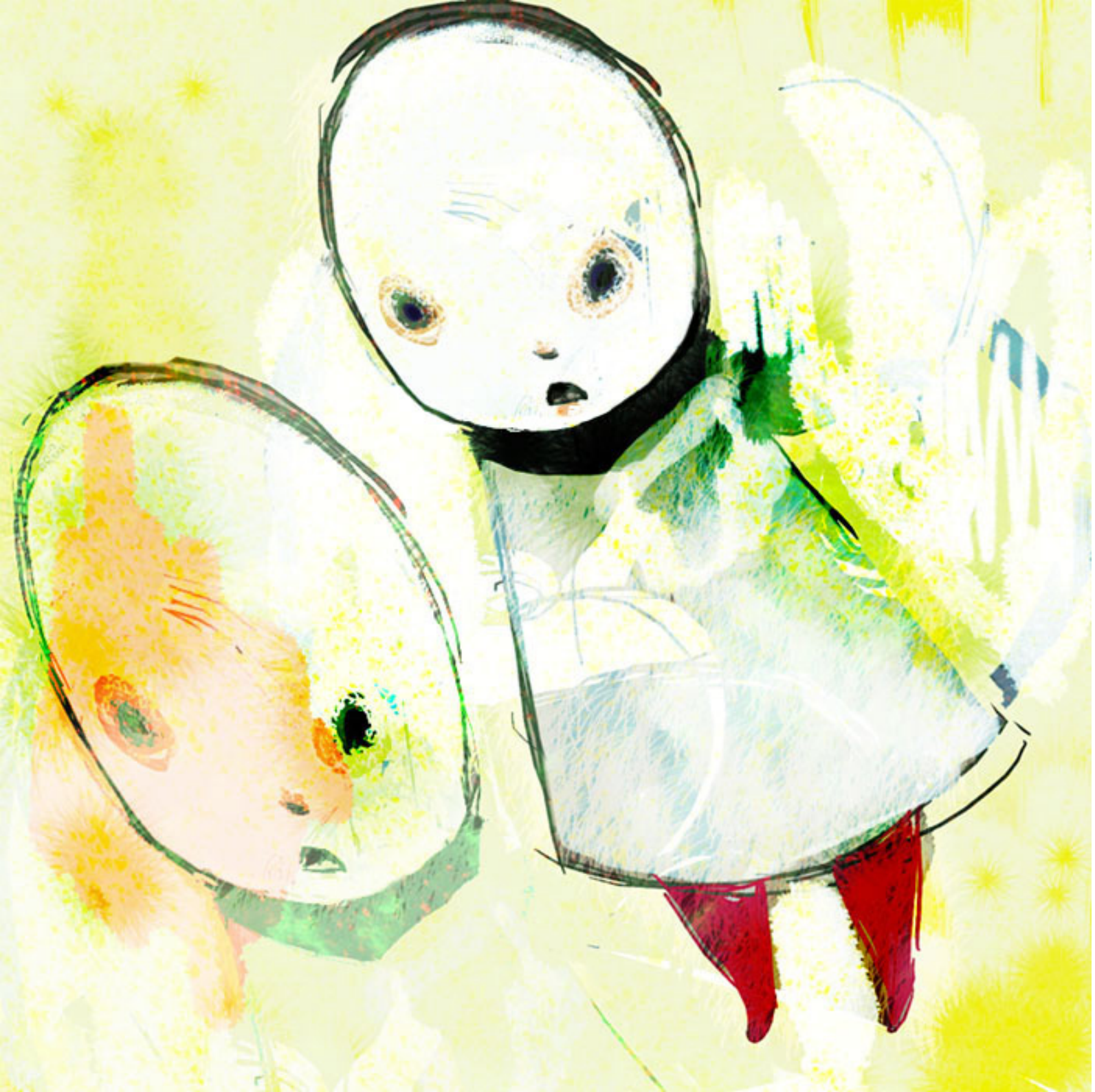
Folio vol.9

Out Of……

Out Of……

今回の「Out Of……」という題材は絵師にとってどのように解釈されただろう。逸脱、剥奪、脱出、逃避、回避、あるものから外へ向かう、それらの力は、時にドラマチックであり、時に夢幻の誘いを持っている。PECO さんの「明け方」、デス さんの「ネオンナイツ」、アニュウリズム さんの「two」、Key さんの「out of the world」。それぞれの持ち味を十分に堪能して頂きたい。

Illastration by デス 「ネオンナイツ」



Illastration by アニュウリズム「two」

Illastration by Key「out of the world」

Folio vol.9

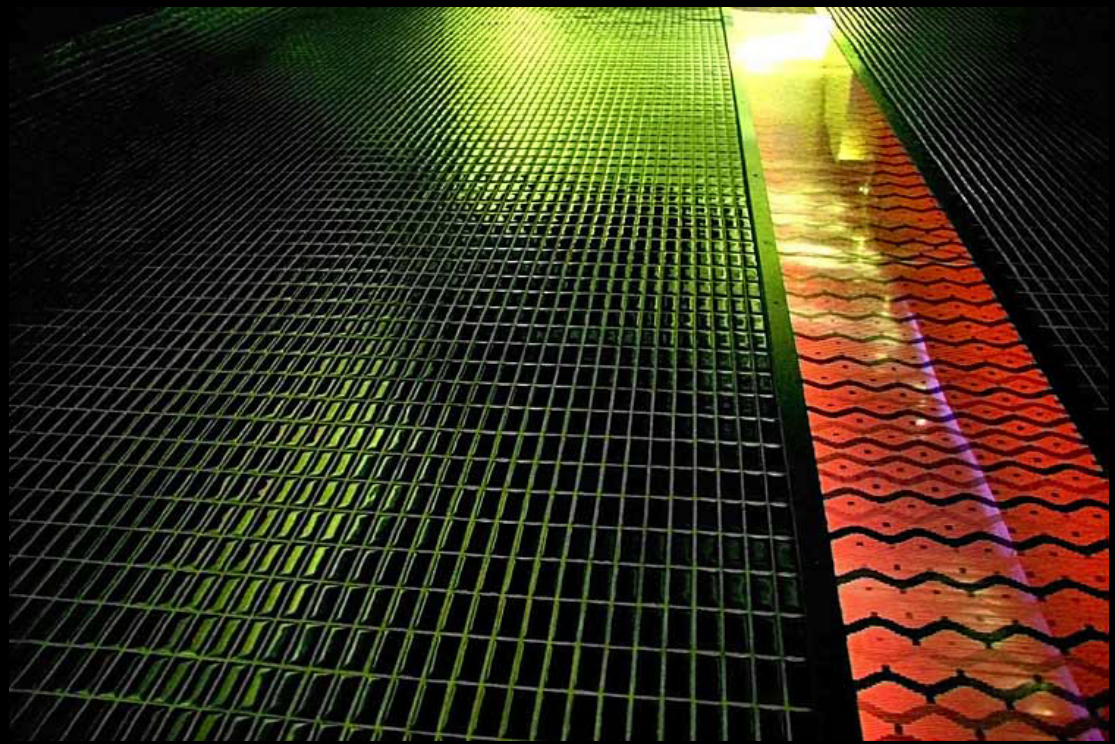
Out Of.....

写真は対象と非対象が存在しなければ成り立たない。すなわちそれは関係性を持ち、そしてそこには距離が存在する。見るものと見られるもの。距離を縮める行為。距離を離す行為。視線は旅で、時を留める感覚は瞬間にある。写真に於いて「Out Of.....」はコミュニケーションに変わる。

Out Of.....

ROMI

PIYO



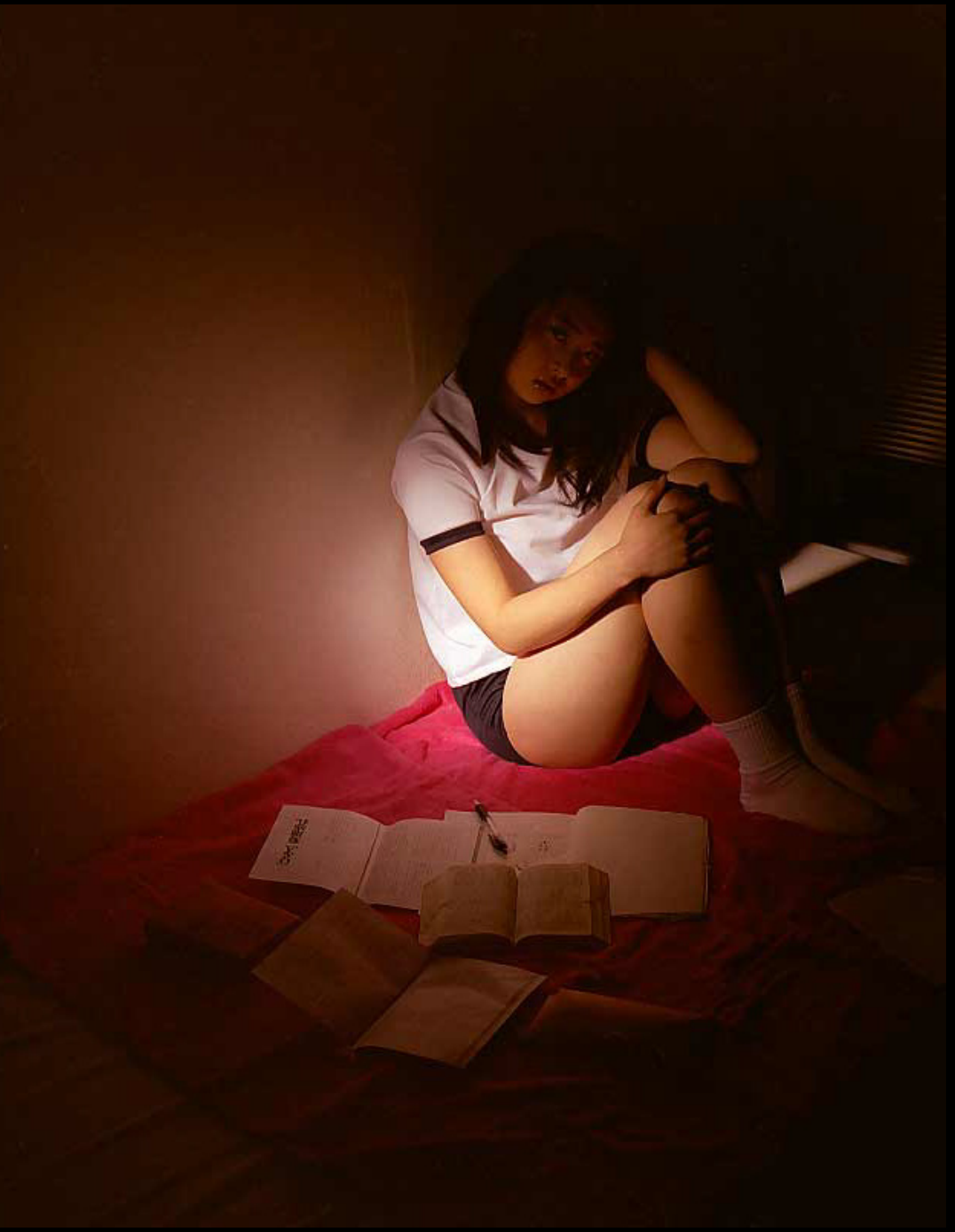
例えば、こんな人達

インベカヲリ★

新宿東口店
SMBC

サンパーク三平本館
三井住友銀行
P

歩行者優先



私は何が、したいんだ

Folio vol.9

Out Of……

旅に出よう

今回の小説を依頼する際に、「Out Of……」という題材とともに「旅」という副主題をつけた。「旅」の解釈は様々である。旅行、心の旅、記憶、追憶など 様々な形で「旅」は行われる。人がこの世に存在する限り距離が存在し、旅もまた存在する。各人の「Out Of……」と「旅」の物語を楽しんで頂けたらと思う。

photo : katsumi saiki

臨界点の青と

ハシモト

車内販売に来た売り子の声に起こされて時計を見れば、目的地まではまだ二時間近く。目的地まであと二時間ということは、乗り込んでから一時間しか経過していないということだ。それはなんだか理不尽なことであるような気がした。

眠気覚ましにコーヒーを買って少し飲むと、苦味が喉の奥へ落ちていった。いっそのことビールでも飲もうかと思ったけれど、制服を着ていないとはいえ、朝から女子高生が新幹線でビールを飲む光景はちょっといくらなんでもシュールすぎるような気がしたので自粛した。

思い出せば出すほど、青司はいやなやつだったという印象ばかりが蘇ってくる。こみあげてくるものを静めるために、わたしは拳を強くにぎった。

青司というとんでもなく詐欺っぽい名をつけた彼の両親を殴りつけてやりたいと思ったことは数知れないけれど、さすがに今はそんな気分にはなれない。まだ騎士と書いてナイトと読ませる名前をつけるような、頭のネジが五本くらい多いか少ないか分からない親に比べればまともだと自分に言い聞かせて、怒りをこらえた。

青司は基本的に、いや、仮に応用したとしても、究極に自分勝手な人間だった。父の転勤でわたしが東京に引っ越してくるまえ、つまり隣同士に住んでいたころは、まだいたいけな中学生だったわたしを登校中に拉致して、毎日がつまんねーからという非常にエクセレントな理由によってそのまま県外に逃亡したこともあった。

よく晴れた初夏の日だった。ちょうど今日のような。

いたいけな中学生だったところのわたしは、当時は本当に真面目で、黒いつやつやした髪を肩のところで切りそろえていた。同年代の子には多少なりファッションに気を使っているところがあったことに対して、わたしはほとんどそういうことには無頓着だった。そうして当然のように、ものすごく成績が良かった。

そういう絵に描いたような優等生だったわたしにとって、学校をさぼることは取り返しのつかないくらい悪いことのように思えたのだ。

電車の中で心細さのあまりにさめざめと泣いたわたしに向かって、青司は困りきった顔で、

「かわいい子には旅をさせろって言うだろ」

と言った。わたしはなぜだかその言葉がすごくうれしくて、笑ってしまったものだった。

「な、旅にでよう」と青司は脳みそを母親の胎内に忘れてきてしまったとしか思われないくらい、能天気な表情と声で言った。「日常からの脱臼だ」

「脱却」と泣き声のまま、わたしは言った。「あ、そうか」と恥ずかしそうに青司は頭をかいた。でもわたしは青司がわざと間違えたことを知っていた。なにしろ青司はおそろしく不器用な人間だったのだ。

結局、そのままわたしたちは一日中県外で遊んだ。制服だったから繁華街には出ることができないということで、電車を二時間くらい乗り継いで海に行った。

車窓から海が見えた途端、青司のテンションはいきなり最高まで上がった。唐突に、それはもう本当に卑怯なんじゃないかってくらいに突然に、青司はスーパーハイテンション状態になった。その隣で、わたしも実は海という自然の持つ原因不明の魅力にすごくわくわくしていたのだけど、ここでわくわくしているところを見せてしまっては負けだという、意味のよくわからない感情に支配されて、「海？　ふーんそれで？」といったリアクションしか取らなかった。そんなマンボウよりも愛想の悪いわたしの態度にもめげず、青司は持てる全てのボキャブラリーを尽くして海を賞賛した。もっとも、青司のボキャブラリーは数学教師のユーモアセンスと競うくらいに乏しかったから、小学生の感想みたいになってしまっていて、それがまたちょっとおもしろかった。けれども、そんなことじゃあ女の子はくどけないよとわたしは思った。優等生なのは見た目だけで、わたしは実は結構いろいろと考える女の子だったのだ。他の多くの優等生がそうであったように。

「うおー、海だ！」と青司は両手をあげて言った。

「声が大きい。海くらいで騒がないでよ」つとめて冷静にわたしは言った。少しでも大人なところのある人間が見たらそれは一目で強がりとわかる、ジャニーズのタレントのような演技だったのだけど、青司の目はそれを見抜けなかったらしく、

「だって海だぜ」

という機知に富んだ返答をしてわたしを呆れさせた。青司にとって海とはそういうものだった。つまり青司にとっての海とは、それだけで世界全ての真理を説明するができるような、オールマイティなアイテムだったのだ。海があれば戦争はなくなり、テロはなくなり、いじめはなくなり、テストの赤点はなくなり、夕食はステーキになるとでも言いたげな目を、青司はしていた。

わたしは、それをちょっといいなと思った。

「海なんてどこにでもあるよ。日本は島国なんだから」冷静なことがかっこいいと、大人だと、そう思いこんでいたわたしは、窓枠に頬杖をついたまま半目で言った。

青司は海を見ていた視線を一瞬だけわたしによこして、

「お前はまだまだガキだな」と笑った。

「どっちが」とわたしはまた半目で言った。本当はどっちも子供なんだということに気付いていた。

「いやー、しかし、海だな」と青司は言った。

「海を目指してきたんだから当たり前でしょ。海を目指して山に来るはずないじゃない」わたしは生まれてはじめて肩をすくめるという行為をそのときにした。それ以来もう二度とやっていない。

「ばかだなあ」と青司は笑顔でつぶやいた。「とにかく、海なんだ」

電車が駅についたので、わたしたちはホームに降りた。潮の香りがした。

「知ってるか」と青司が言った。

「知りたくない」と返答したわたしの声を、青司は鮮やかなまでに無視した。

「青司の青は、海の青なんだ」

「知るわけないでしょ」とわたしは言った。言ったあとで無性におかしくなって、大声で笑った。そこは確かに海だった。

浜辺に行くと、少し風が強かった。青司はどたばたという効果音がつかないのが不思議なくらい不器用に砂浜を走っていった。やっぱり両手をあげていて、ひょっとしたら元気玉でも作るつもりなのかなとわたしを悩ませた。

空は信じられないくらい晴れていて、正午を回ったばかりの日差しは燦々と耀いていた。陽光を反射してきらきらと煌く海は、他の一切の形容を受け付けないくらいにきれいだった。

「うーみーだー！」

青司はやけにはしゃいでいた。その理由を、わたしは知らなかった。

靴と靴下を脱いで裸足になった青司は、波打ちぎわでばしゃばしゃ遊んでいた。わたしは今日は制服じゃなくて白いワンピースを着てきて、麦わら帽子をかぶってきて、ついでに黒髪も背中くらいまでは伸ばしておくべきだったと思った。もちろん、それはわたし流の笑えない冗談だった。

「うみー！　うみー！」

はしゃぐ青司のそばに歩み寄って、波がかからないくらいのところで立ち止まった。青司の巻きあげるしぶきが、宝石みたいに光った。

「俺の海ー！」

「それは勘違い」

「堅いこと言うな！」

青司は一時間くらいそうして遊んだあとに、ふうと浜辺に腰を落ち着けた。わたしはスカートを汚すのがいやだったから、その場に立ったまま海を眺めていた。

「水着を持ってくるべきだった」と心底悔しそうに青司は言った。

「海水浴にはまだ早いわよ」

「一番乗りが好きなんだ」そして、と青司はつけくわえた。

「海はもっと好きだ」

「それは良かったね」とわたしは言った。けっこうどうでも良かった。

「ついでに、お前の水着姿も少しだけ見てみたかった」

「死んでもいやよ」とわたしは言った。もちろん、本気なわけがなかった。

「それは残念だ」と青司は笑顔で言った。「死ぬなら、海がいいな」

「溺死はやだな」

「何ならいい？」

「老衰」

「なんだかなあ」

ため息を吐いて肩を落とした青司がかわいくて、わたしはまた笑った。

その日は結局、夕方には家に帰った。海に沈んでいく夕日を少しだけ見たかったけど、優等生のわたしが非常識のわたしにわずかに勝ったのだ。わたしの中学から

も青司の高校からもわたしの両親からも青司の両親からも、青司はこてんぱんに叱られた。人間の尊厳というものを踏みにじることを目的とした説教というより罵倒の嵐に、青司はよく耐えていた。青司の目は、それでも見えない海を探していた。

青司とって、あの田舎町はきっと窮屈すぎたのだ。

コーヒーを飲み干して、窓の外を見た。初夏とはいえ、正午前の日差しはまだやわらかい。わたしは再び少しだけ目を閉じた。眠気はすぐにやってきたけれど、眠る気はすでになくなっていた。

女子高生らしく携帯電話をとりだして、メールを読んだり打ったり送ったりした。高校生になったのだ。東京の渋谷で「チョー」とか「マジ」とか使う女子高生になったのだ。

なのにどうして、制服を脱いで新幹線なんかに乗っているのだろう。

たぶん、青司のことが好きだったからだろうと思われた。でもそれは、本当に一切の虚飾なくいって、心の底からどうでもいいことだった。

また目を閉じた。眠ってしまおうと思った。服が少し窮屈だったけれど、眠れないことはないだろうと思って、目を閉じ続けた。

目を覚ますと、車窓の外には海が広がっていた。嘘だろ、とわたしは思った。あまりにもできすぎているような気がしたのだ。

あくびが出て少し目元が滲んだので、ハンカチで化粧を落さないように拭ったら、何を勘違いしたのか向いの席に座ったサラリーマンが気の毒そうな顔をした。

文庫本を取り出して、時間を潰したあとに時計を見ると、目的地まではあと十分ほどになっていた。そろそろ着くよと出迎えてくれる予定になっている友人にメールをして、髪形が乱れていないかを手鏡で確認した。

旅は終わろうとしている。日常からの脱却を終えて、わたしは日常へと戻ろうとしている。ホームに滑り込んでいく、この鉄の塊とともに。

車内アナウンスが聞こえたので、席を立ってホームに下りた。どこに隠れていたのかと思わせるような人の波を避けながら改札を抜けると、友人の姿が見えた。

長時間座っていたためについてしまった喪服のしわをなおして、わたしは友人に言った。

「で、式場は？」

（了）

Folio vol.9

Out Of……

誕生日

寒竹泉美

今日は彼女の三十歳の誕生日だ。

水曜日。午前八時三十分。いつもなら満員車両の人混みでもみくちゃにされたスーツを直しながら早足でオフィスを目指しているはずの彼女は今、部屋で一人、ソファーに座ってテレビが映し出す映像を眺めている。テレビからは、センセーショナルな殺人事件の起きた現場の中継が延々と報道され、欠伸を噛み殺したコメンテーターたちがひどいですねえと言いながら肯きあっていた。彼女も一緒に欠伸をしながら肯いている。

寝室で寝ていた猫がテレビの音に気がついて、彼女の前にのそのそと現れた。そして、四本の足を伸ばして伸びをすると、ソファーに座っている彼女の膝に飛び乗った。

彼女は今日、会社を休んだ。もちろん無断欠勤ではない。ちゃんと届けを出したし、上司と同僚も了承の上だ。

「この日はわたしの誕生日だから休みます」

と、二週間前の彼女は上司に告げた。

「三十歳の誕生日なんです」

誕生日だから会社を休む、それは一ヶ月前の彼女の頭に舞い下りた気紛れな思いつきだった。彼女はその思いつきをすぐに気に入った。あまりにくだらなかったからだった。深夜一人、オフィスでコンピューター作業と資料整理に追われているような時でも、この計画を実際に実行することを思い浮かべただけで、彼女の気分は弾むのだった。三十歳にもなって、誕生日だから会社を休みますだって。なんて、馬鹿馬鹿しいのかしらと、彼女の頬は勝手に緩んでいく。

計画決行まで残り二週間。彼女は、頭の中に様々な言い訳とそのパターンとバリエーションを用意して、上司のデスクに向かっている。この忙しい時期に、そんな馬鹿みたいな理由で会社を休めると思っているのか？と彼女の上司は声を荒げて言うだろう。すると、彼女は大真面目な顔で答えるつもりだ。――区切りというものが大切なんです、これからあと何十年もつきあっていかなきゃならないわたしの人生には、それがどうしても必要なんです。

彼女の上司は彼女の顔をまじまじと見た。それから無言のまま、彼女が何かを言うよりも先に、神妙な顔で何度も肯いた。

「分かった。ゆっくり休んでくれ」

次に彼女は同僚たちに誕生日に休むことを告げに行く。彼女の同僚たちは自分の仕事がそんな不条理な理由で増えるはめになることを不平に思うだろう、と彼女は考えていた。だが、彼らも神妙な顔で肯き、「分かった」と言っただけだった。彼女は、慌てて神妙な顔を作って彼らに合わせて一緒に肯く。彼女の頭の中にたくさん用意された言い訳は陽の目を見ることなくゴミ箱行きだった。

「君が休むんだったら、僕も合わせて休んだのに」

昨夜、ベッドの上で彼女の夫は言った。彼女は、枕もとのライトを消しながら、

「いくらなんでも妻の誕生日だから休みます、ってのはなしだと思うわ」

と言った。

「そんなことない、とても重要な理由だ」

なるほど。彼女の周りは彼女のユーモアを解さない人間ばかりだ。

というわけで、朝を迎えた彼女は、恨めしそうに靴を履き、名残惜しそうに彼女にキスをして会社に出かける夫を笑顔で見送った。それから、せっかく平日に仕事を休んで一人で過ごすのだから、今日しか出来ないことをしなくちゃ、と彼女は一人呟いて、思いついたことをリストアップしてみたのだった。

■管理会社の人間を迎えてドアの修理をしてもらう

彼女の仕事は、建築デザイナーだった。デザイナーと言ってもまあ、華やかな響きとはほど遠い、下請けの地味な作業ばかりが彼女の仕事だったが。ちょうど一年前、彼女は今の夫と結婚して新居に引っ越すことになった。この家を選んだのはもちろん家に対するこだわりが大いにある彼女だ。しかし、若い彼女たちには彼女の要望を

満足させるような部屋に住む財力はなかった。もちろん自分のデザインした家に住むなんて夢のまた夢だ。というわけで、彼女が選んだのは、なるべく安く何の工夫もない賃貸マンション（というよりはアパート）だった。下手に趣味の合わない意匠の凝らしたデザインが散りばめられているより、何の工夫もない野暮ったい壁に囲まれている方が彼女にはましだったのだ。

彼女はこの部屋に対して不満も満足も抱くことなく淡々と暮らしていたが、玄関のドアのたてつけが悪くなって力を込めて引っ張らないと閉まらなくなってしまってからは事情が変わった。デザインが悪いのはいいとして、ドアが閉まらないなんて論外だわ、と彼女は鼻息を荒くする。せめて家としての機能は真っ当してもらわなきゃ、それが賃料に対する最低限のマナーというものよ。

ドアの鍵が閉まりにくくなり、我慢の限界にきた彼女は、三日前、会社の昼休み中にマンションの管理会社に電話した。電話先の寝ぼけた声の男は、彼女から状況を二、三聞いて確認すると、この間の地震のせいでドア枠が曲がったかもしれませんねと結論づけた。彼女は一応その説に納得した。でも地震程度で、と文句の一つも言いたかった。

「じゃあ、修理にはいつお伺いしましょう。平日の十時から十八時までご都合のよろしい時間帯はありますか？」

と、男は言った。

「ありません」

と、彼女は言って電話を切りかけたが、「ありました」と言い直した。彼女は、三日後なら家にいると男に告げた。

「じゃあ、その日の午前中にお伺いします」

と、男は言って電話を切った。もちろん彼はその日が彼女の誕生日であることなど知る由もない。

■テレビを見る

大したことではないが重要だ。平日の午前中にテレビを見るという行為は、平日を休んでいるということを確認する象徴のようなものだ。オフィスであくせく働いている人間には得られない何かを彼女は今日手にする予定だ。

■区役所に行く

彼女の夫の会社に提出するために住民票を区役所に取りに行く。

「僕が昼休みに行くからいいよ」

と、彼女の夫は言ったのだが。これほど、仕事を休んだ平日にぴったりなイベントはないと主張した。

■マーケットで買物をする

彼女の帰りはいつも彼女の夫よりも遅い。料理も買物も彼女の夫の仕事だった。今日はマーケットで買物をし、夕飯を作って彼の帰りを待つのだ、と彼女は決めた。

彼女はボールペンを止めて、メモ帳を眺めた。せっかくの休みなのにスケジュールをいっぱいにしてしまうなんて、悪い癖だ。彼女はメモ帳をしげしげと眺めて、それから置いた。削りようがない。いいわ、さっそく取りかかればいいんだもの。彼女はソファーに座ってリモコンでテレビをつけたのだった。

（ようやくここで、冒頭のシーンに繋がった。）

喜怒哀楽を短時間のうちに詰め込んだ番組のテンポについていけず、彼女はいつの間にか画面の左上の時刻を示すデジタル数字を眺めていた。そのとき、玄関のチャイムが鳴った。彼女は立ち上がる。膝で眠りかけていた猫が半分ずり落ちながらカーペットの上に着地した。管理会社の人間が来たのだ。さっそく彼女は二つ目の予定にとりかかることになった。

さあ、なんて文句を言おうかしらと彼女は思いながらドアの鍵を開ける。ドアを開くと、作業服に身を包んだ男が立っていた。男は彼女に挨拶もせずに、開かれたドアの蝶番の真下に目を落としながら言った。

「ドアが閉まらないと聞きましたが」

「そうなんです、ほら」

と、彼女は男の前でドアを閉めた。完全には閉まらない。鍵を掛けようと思ったら力を込めて無理をして引っ張らないといけない。実演を終えてドアを開いた彼女は、再び男と対面する。男は彼女の目の前でしゃがむと、ドアの下に指を入れて、コインより一回り大きな白いプラスチックの塊を取り出した。男が彼女の目の前に、そのプラスチックの塊を突きつけた。

「これは何ですかね？」

彼女は首を傾げて見せたが、どう見てもそれはペットボトルの蓋にしか見えなかった。

「猫がこの蓋で遊ぶのよ」

と、笑った彼女の目の前でドアが閉まり再び開いた。いたってスムーズな開閉。

「今回はいいですが、今度こういうことがあったら料金を頂きますよ」

と、男は言って彼女に蓋を手渡して帰っていった。彼女は男を見送ってドアを閉めてみた。ドアは軽がると閉まり、鍵も小気味よい音をたててぴたりと閉まった。彼女は歪んで変形した蓋をゴミ箱に投げ捨てた。猫がその動きに反応して飛び上がり、勢い余って走り回る。

彼女はダイニングテーブルの上のメモ用紙に二本の線を引く。二つの予定が終了した。

彼女は時計をちらりと見る。次は区役所だ。この調子でいけば楽々予定をこなせそうだ。彼女は外で昼飯を食べることにして、家を出た。

ミスター・ドーナツに入るのは、初めてだった。ショーケースの中に色とりどりのドーナツが並んでいる。穴が空いていないなんてドーナツじゃないわ、と彼女は誰かに言ってみたくなるが、彼女は大人しく黙ったまま、トングを持ってケースの端から端までをもう二往復したところだ。空のトレーを持ってのろのろとレジに向かって進んでいる彼女の後ろに、子連れの若い母親がぴたりと接近し、彼女に圧力をかける。彼女は、母親に道を譲ると、トレーを持ってまた入口近くのショーケースまで戻っていった。みんなどうしてさっさと決められるのだろう。彼女以外の人間たちは、無駄のない動作で目当てのドーナツを的確に選び出し、いくつかを組み合わせてトレーに盛ると、確信に満ちた様子でレジスターに向かうのだ。これじゃ、出来そこないの居残り生徒のようだわ、と彼女は途方に暮れて、入口から入って来た女子学生に順番を譲る。それから女子学生のトレーを注意深く眺めながら、彼女も女子学生の選んだドーナツと同じドーナツをトレーに載せてようやくレジスターに辿り付いた。

「ご一緒にお飲み物もいかがですか」

と、店員が微笑んだ。彼女も微笑み返す。

「ええ、もちろん」

いつまでも微笑んでいる彼女に、店員が頭の上のメニューを指差して何かを訴えている。またしても選ばないといけないのだ。彼女はメニューを三回頭の中で復唱して、一番上に書かれていたブレンドコーヒーを選んだ。

区役所は人間たちで溢れている。彼女は、無愛想に並んだ書類を一つ一つ確かめながら、目的の書類をようやく見つけてテーブルに貼りつけてある記入例を見ながら記入をする。書類を提出すると、あちらでお呼びしますのでしばらくお待ち下さい、と眼鏡の事務員が言って、彼女は邪魔にならないよう隅に立って待つことにした。思ったより簡単だわ、と彼女は自分のスムーズな動きに満足する。

しばらくして、彼女のファミリーネームが呼ばれる。彼女はすくりと立ち上がる。もう結婚して一年経つのだ。新しい名前で呼ばれてもちゃんと反応できる。（彼女は職場では旧姓で呼ばれていた。）渡し口と書かれた窓口に歩いていきながら、自分と同じ行動をしている人間が自分のほかに三人いることに彼女は気がついた。結婚して新しく得たこの名前が、この国で三番目に多いという統計データを思い出して彼女は一人納得をする。そして同じ苗字の彼らに親近感を覚えながら彼女は微笑み、同志に道を譲る。

「お先にどうぞ」

今日の彼女には急ぐ理由がない。しかし、列の後ろへ移動し始めた彼女の背中を、彼女のフルネームが呼び戻した。振り向いたのは彼女一人だった。なるほど。確率的にそんなものだろう、と彼女は納得して書類を受け取り、お金を払って区役所を出た。

さあ、残りの予定はあと一つだわ、と彼女は軽やかに通りを歩いていく。温かくてほどよく湿った空気が彼女の全身を包み込む。道には、杖をついた老人と暇そうな商店の店主、それから小太りの買物帰りの主婦たち。彼女は大股でその中を歩いていく。四角い書類、四角いデスク、四角いオフィス、四角い建物、四角い経済システム。いつもの彼女はこの時間、四角さにぎゅうぎゅうと押し込められて四角形になっているのだ。まるで別世界だ、と彼女は思う。誰にでも笑いかけたい気分になっている。笑いかけられた人間は曖昧に微笑み返しながら、彼女のことをまるで別世界だと思っている。

スーパーマーケットの中は人でごったかえしていた。ビニール袋を抱えた主婦たちにおし戻されながら、彼女は自分が出口から入ってしまったことに気がついて引き返すと、もう一度やり直す。今度はプラスチックのカゴと野菜コーナーが彼女を出迎えた。そう、これが正しい道順だわ。彼女は正しい道順に沿って、「お買い得」というポスターや表示の貼られて人だかりの出来ている商品を漏れなくカゴに入れていった。何だか楽しい。店内の喧騒がまるで祭の日の屋台のように彼女の心を弾ませる。彼女はきょろきょろと辺りを見回し過ぎないように気を付けながら、みんなの動きに合わせてマーケットを一周し、山盛りになったカゴをレジスターに置いた。レジスターの女は、彼女から金を受け取りおつりを渡すとすぐに次の客に取りかかった。彼女は慌てて、周りを見

ながら山盛りのカゴをレジスターから離れた台に運ぶ。そう、自分のことは自分でする、園児でも習う合理的なシステムだわ、と呟きながら、カゴの隙間に無造作に突っ込まれた生白いビニール袋を取り出して広げた。横目で隣の買い物客を観察する。ビニール袋にものを詰めるには何らかの規則があるようだった。しばらく観察していたが、何より実践してみなきゃ分からないわと彼女は思い直し、ぎこちない手つきでビニール袋にものを詰めていった。配給された二つのビニール袋はすぐにいっぱいになったが、カゴの中にはまだ商品が残っていた。彼女は仕方なく、忙しそうなレジスター係の女にもう一枚袋を貰いにいく。女は、彼女の声が聞こえたのか聞こえないのか分からない無反応で、動作の切れ目にすっと袋を取り出し彼女に手渡した。やっぱり出来そこないの生徒みたいだわ、と彼女は申し訳なくなりながら三つ目のビニール袋に全ての商品を詰め終わって、マーケットを出た。

通りに出た彼女は、足元に袋を置いて倒れないように両足で押さえると、迷わず片手を上げてタクシーを止めた。このタクシー乗車で、彼女が手に入れた「お買い得」なんてあっという間に消し飛んだ計算になるが、彼女は気にしない。気にしないどころか、深夜仕事から帰るときに利用するタクシー料金を思い浮かべながら、昼間に行動するというのはなんて得なんだろうと感動しているのだった。

彼女の夫は、仕事から戻ってくると、まずドアがスムーズ開いたことに感動し、この感動を伝えようと妻の姿を探した。彼女はキッチンにいて、まな板の前で腕を組んで立ち尽くしていた。まな板の上には、細かく刻まれた食材が山積みになっていた。

「ごめんなさい、まだ夕食が出来てないの。でもあと少しで出来るから」

と、彼女は言って微笑んだ。

「何が出来るの？」

と、彼女の夫は聞いてみた。彼女は途方にくれたように首を傾げて彼を見た。

「さあ。それを今考えていたの」

彼女の夫は、鞄を置くと、手に持っていた小さな箱を彼女に渡して椅子に座らせた。

「あとはやるから座ってて」

彼はさっそく腕をまくって洗いものを始め、キッチンを整理し始めた。彼女は不満そうに椅子から立ち上がったが、

「誕生日なんだから座ってて」

と、彼が振り向いて彼女の手の箱を指差して、それケーキねと言ったので、彼女は一応納得してダイニングテーブルの椅子に座った。そうだ、今日はわたしの誕生日だったっけ。彼女は箱を開けてそっと中を覗きこむ。苺ショートとレアチーズケーキ。どちらも彼女の好物だった。

「半分ずつ食べようよ」

と、彼女は提案した。

「両方食べていいよ？」

と、彼は笑う。笑いながら鍋を取りだしコンロに置くと、次々とまな板の上の食材をさばいていく。彼女はメモ用紙のリストを取りだし、一番最後の項目に線を引いた。ちょっと予定と違うけど。今日の予定はこれで全てこなしたことにしよう、と彼女は全て線で項目が消されたリストを眺めて満足そうに肯いた。

「どうだった、君の誕生日は？」

と、ワイングラスに赤い液体を注ぎながら彼が言った。ダイニングテーブルの上には、色とりどりのサラダとビーフシチューとピザ風の具載せバケットが並べられていた。

「君の三十歳の誕生日に」

彼は彼女の答えを聞かずに笑いながらグラスを合わせた。チンという澄んだ音が部屋に響く。食事が始まる。

「何だか旅行に行って帰って来た気分よ」

と、彼女は言った。

「何それ。どこに行ってきたの？」

彼女は彼の質問に答えて今日行った場所を列挙する。フォークが皿に当たって甲高い音を立てる。シチューの湯気が柔らかに二人の間の空間を満たしていく。彼女はシチューの肉をフォークで突き刺し口に運びながら、冷蔵庫の中で静かに出番を待っている苺ショートとレアチーズケーキを思い浮かべる。それから、ワイングラスの細い足を注意深くつまむと、グラスを傾けて喉の奥に液体を時間をかけて流し込む。旅は終わりだ、と彼女は思ってみる。明日からまた、日常が始まる。

了

drifter

茶石文緒

独りで眠る寝台が小舟のように思えることがある。ひどく疲れて、横たわってもまだ眩暈が鎮まらないような夜のこと。脳の中で記憶や感情や血液が渦を巻いて暴れる音が、冷たい水になって押し寄せ、部屋に溢れたかと思うと寝台を持ち上げる。みるみるうちに水位が上がり、窓は消えうせ、支えを失った寝台は、ゆらりと部屋から流れ出る。

窓の外は一面の暗い水。遠くに半分水没したビルのシルエットが斜めに突き出ている。わたし以外の漂流者は誰もいない。水の感触はとてもリアルで、轟々とうねる通奏低音に、ぴしゃり、ぽちゃり、という飛沫の音が複雑に重なり合う。それは青くやさしい癒しの水ではなく、どこか知らない土地から削り取った土臭い濁り水。目を凝らせば水のうねりや、濁りの中の砂粒や葉屑まで見てとれる。

寝台の上も決して安全とは言えない。粘り気のある水は、身をくねらせる生物のよう。自分が動くと寝台も大きく傾くので、下手に起き上がることができない。身体を伏せて、シーツにしがみつくようにしていると、波のうねりが目の高さに見える。時折手脚にひたりと水が被るのを感じながら、わたしは、自分の部屋が遠ざかっていくのをどうしようもなく見つめている。

わたしはどこへ行くのだろう、薄っぺらなキャミソールドレス一枚で、こなれたシーツと生柔らかい枕、手のひらに載るくらいの小さな目覚まし時計だけを携えて。全財産がたったそれだけなんて、あまりに心細いけれど、でも、それもいいじゃないか、と何かが意識に呼びかける。たとえば今、必死で抵抗してみるか？濁流に飛び込んで、肺を痛みに軋ませながら、冷たく汚れた水の中を、あの窓に向かって泳ぎ帰ってみようか。けれど、そうするにはあまりに疲れすぎている。第一、そこまで必死になったって、取り戻せるものなんて、たかが知れているのだ。それよりもいっそ、不可効力に甘えて旅立ってみようか。知らない土地に流れついて、記憶のない女として人生をもう一度始めるのも面白いじゃないか？

そう思った時にはもう物語は始まっている。

朝の光の中。もう土は乾いている。広い草原を貫く国道の片隅に、ひとりの女が立っている。彼女は記憶を洗い流された女。見たこともない土地で、泥染みの浮いた裾の長いキャミソールドレスを着て、化粧もせずに裸足で立っている。彼女を路端で見つけて拾うのはきっと、彼女が今までに知っていたのとは全く違う男だ。古いピックアップトラックを運転しながらひっきりなしに煙草を吹かし、ラジオの深夜放送に鼻歌を歌いながら一夜に何百キロを走るような男。

男は車を止め、黙って女を見下ろす。彼は女の衣服が少々汚れていることなど意に介さない。それよりも薄い布地の下の身体に目をつける。身体の線は滑らかで、静かな疲れが彼女を優雅に見せている。処女ではない。それが男には好ましい。手順を知った相手のほうが、成り行きに身体を馴染ませるのは早いはずだから。

「乗るかい」

声をかけると、女は黙ってトラックに乗り込む。男はそれを横目にしながら新しい煙草をくわえる。女が車のドアを閉める瞬間、ドレスの裾を指先でさばく仕草の滑らかさが目に残る。重くとろみのある化繊地。淡い銀鼠色の、その衣装の下の脚に触れるのは何時間後だろう。それを思うだけで、今日走るはずの距離が不意に生彩を帯びたものになってくる。

ほとんど無言で夕方まで車を走らせ、男はいつも一人で泊まるのと変わらない、古びたホテルに部屋を取る。痛いほど水圧の強いコックをひねり、自分の手のひらに湯をあてながら、バスタブに溜まる湯が熱くなりすぎないよう気を遣う。一人で気侭に生きてきた男にとって、そんなふうに他人のために心を砕くのが、もどかしいようでどこか愉しく、気が逸るようでもある。

準備が整うと、彼にしては優しいほうの手つきで、土でよごれた女を洗ってやる。シャワーを当てると、肌にこびりついた泥がゆるんでいく。湯が濁り、排水口に渦を巻く。湯気でタイルの目地がぼやける。

男は薄紙を破いてアイボリー色の石鹸を取り出す。白い泡と一緒に香りが立つ。技巧も虚飾もない無個性な香りは、ひたすら単純な懐かしさだけを運んでくる。

スポンジは使わず、大きな手のひらで、身体に泡を広げていく。お湯のぬるさと人肌の摩擦がここちよくて、女は深く息をついた。こうされていると、まるで幼い少女か、小さな動物になったよう。自分自身の輪郭が柔らかにほぐされていく感覚に、不意に泣けてきて、背中を丸め、顔を覆った。泡に滑る肌が、するりと手から逃げていく。男は思わず呼びかけた。

「どうした」

「懐かしいの」

女は泣きながら答える。こんなふうに守られていたことが、昔あった。人生がとても単純で、石鹸の香りといえばただ一つ、淡いアイボリーの記憶に無条件に結びついていた頃のこと。

「でも、もう戻れない。今はすべてが複雑になりすぎたわ」

自分が捨ててきたものを思って女は呟く。溢れるほどのモノの中で、石鹸一つ買うのにも、どれだけ頭を悩ませなければならないか。死海の塩、ブルガリアの薔薇、プロヴァンスのオリーヴ、蜂蜜、胡桃、砕いた真珠、海の泥。それだけ選び抜いたとしても、心にこびりついた息苦しさまで洗い流せるわけではないのに、一事が万事、その調子だった。食べること、着ること、身を飾ること、愛すること。女にとっては、選ばなければならないことこそ苦痛だった。店先ではいつも途方に暮れていた。豊かさとか、贅沢とかいう言葉ではごまかせないほど、本当に苦痛だったのだ。

「だから逃げたの。全部捨ててしまいたいと思って…川に入ったの」

最後に彼女が捨てたもの、その場に置いてきた靴のことを思い出す。華奢なつくりのミュールサンダル。エナメルを施したピンクベージュで、足首を結び上げるストラップだけが濃い紅色。ピンヒールの底は斜めに減って、艶やかだった巻き革はところどころ傷ついている。

その靴はまるで彼女自身のようだった。百貨店のショーウインドウに飾られて、流行と物の価値を知った女が高いお金を払って選ぶ品。確かに均整がとれて美しいけれど、足を入れた女を幸福にするとは限らない。体重を預けると細いストラップの一本一本が軋みを上げ、歩くほどに足を傷つける。長い距離を歩くにつけ足先は赤く腫れて熱を持ち、耐えがたいほど痛みはじめる。翌朝、残された靴を見る人たちが、彼女をそんなふうに見ればいいと思った。およそ日常向きではない靴で毎日を歩き切ろうとして傷ついた女。一度足を踏み入れてしまったものを、簡単に脱ぎ捨ててしまうことはできない。自由になるためには靴だけではなく重く引きずった生そのものを一度捨てなければならないほどの覚悟が必要だった。

「足を冷やすつもりでいたけど、本音はどうなってもいいとも思っていたわ。流されたときは、もうだめだと思ったけれど……気がついたら、結局岸にたどりついていたの」

溺れかけながら、偶然引っかかった岩にしがみつき、陸地に這い上がった。激しく咳き込み、ようやく我に返ったとき、もう夜は明けかけていた。あちこち打ち付けた身体は痛んだけれど、心は穏やかだった。生き残った彼女は、小気味いいほど手ぶらだった。彼女を傷つけ続けた日常を切り捨てて、まるで生まれ変わったように、見たこともない街に存在することができたのだ。

「えらく複雑なところから来たんだな」

そして、どうしようもなく不器用なんだ、きっと。男は同情するような、呆れるような気持ちで呟いた。棚一杯に色とりどりの石鹸が並ぶところなど想像もつかない。煌びやかな靴が息詰まるほど並んだショーウィンドウのことも、女たちがどれほどの手間と知恵をしぼって、ただ一つ相応しいものを選び出すのかを。自分ならどうするだろうと思う。目に付いたものを直感で選び取り、適当なところでいなすことができなかったのかと訝る気持ちが湧いて出る。

それでも、自分が何のために走っているのかを考えれば、彼女が何を捨ててきたのか推し量ることができた。一瞬の、爆発的な逃走と、毎日長い距離を逃走しつづけること。どちらも、日常という檻に閉じ込められないための、必死な抵抗には違いない。

男は女を哀れに思う。もつれた髪を解いてやりたいが、備え付けのプラスティックの櫛では、女の長い髪には到底歯が立たない。温いバスタブの中で、長い時間をかけて丁寧に指で解きほぐす。その時間が必要だった。小さな水音が響く中、見知らぬどうしの警戒を解くには、こんなふうに穏やかに過ごす時間は無駄ではなかった。

「あなたは自由ね」

「多分、見た目ほどじゃない」

「どうして、わたしを拾ったの」

「さあ…そこにいたからかな」

曖昧にごまかしながら、男はさっき浴室の準備を整えていたときの、安らかな感情を思い出す。自分の手の中

が空虚ではないという感触に、心が水を帯びるような、潤やかな高まりを覚えた。女が捨てることを必要としたように、男には、きっと今、拾うことが必要だったのだ。

「あなたみたいな人には、わたしは足手纏いになるかもしれない」

「どうかな」

男は穏やかに答える。完璧な豊かさがないのと同じことで、どこへ行ったって、完璧な自由などありはしない。自分の中に、それを事実として受け入れるくらいの広さはあると思いたかった。男は女にキスをし、そのままベッドへ運ぶ。お互いに慰めが必要だから、湿った肌に手を這わせ、そのまま優しくとろけるようなセックスをする。互いにひと時、満たされた気がするけれど、それは到達点ではなく、長い長い成り行きの始発点にすぎない。

翌朝、男が吸う煙草のけむりに、女はゆっくりとまぶたを開く。身体を起こし、昨夜の汗を吸って重くなったシーツを引き寄せて微笑む。頬の肌は乾いてうすら白く、鼻のまわりに薄い雀斑が浮いている。

おはよう、と寝起きの声で女が囁く。乱れた髪が光の中で透き通る。あの髪を昨夜俺が洗ってやったんだ、そう思うと急に女がいとおしくなった。

「朝食を食べよう。一緒に来るか、それとも、買って来ようか」

「行くわ」

彼女は起きあがり、男のTシャツとジーンズをとりあえず身につける。女の支度を待つ、手持ち無沙汰な時間が男には物珍しい。人を待つ必要などない気楽な日々を、自分があまりにも簡単に捨ててしまったことへの静かな驚きがある。

「チェックアウトする。忘れ物は」

ない、と女は言う。昨夜着ていた薄いドレスが汚れたまま椅子に掛けられているが、ふたりとも敢えてそのことは口にしない。街に出たら服も買おう、そう言いながら男は後ろ手にドアを閉める。オートロックががちゃりと降りる音に背筋がすくむ。もう戻る道はない。その事実は一瞬恐ろしいほど絶対的な動揺として、男の心に強烈に残像を残す。

男は女に朝食と衣服と靴を買いえ、トラックの助手席に座らせる。長い旅はこれから始まるのであり、そのさき女が彼に大切にしてもらえるのか、それとも砂漠のサボテンのように延々と続く苛酷さに晒されるのか、それは誰にもわからない。

自分をそんな境遇に置くことができたらどんなに心地良いだろう。

わたしは無い物ねだりと知りながらその空想にしがみつく。全ての履歴を捨てて、まったくの無垢な女として生き直す。そんな機会はそう滅多にあるものではない。これ以上のお膳立てはないじゃないか？

寝台の上、平衡感覚は戻ってこない。昼間の狂騒が不快な残響のように身体の中に残っている。あの多忙、命令、身勝手、嘘、見栄、威圧、譲歩、お世辞で首を締めるような残酷な駆け引き。このままわたしの心がこわれても、それも結局自己責任ということになるんだろう。馬鹿馬鹿しい、全く。

何もかもが鬱陶しい。義務と責任にまみれたキャリアも、クローゼット一杯の洋服も、携帯のデータも、多すぎる靴も。すべて自分を充たすために、わたし自身が、一つずつ眼に適うものを選び取ってきたはずなのに。今となっては、あらゆる出来事は裏返しにしてぶちまけたジグソーパズルのようで、一歩引いて見ると個々の断片はそらぞらしいほど無価値に見える。

それよりも今は想像のほうが真実。わたしは水の揺らぎに身を任せ、いっそこのまま、と思う。このまま夜が明けなければいい。押し寄せるイメージにさらわれて、帰って来られなくてもかまわない。何もかも失ってしまえばいいと、わたしは一瞬、本気でそう思いかける。

とすり。

何かの落下音が意識に響いた。小さく柔らかなその音は、響きが止んだあとも耳の中に残っていた。減衰して消えるどころか、浮遊する意識の中で、次第にじわじわと存在感を増していく。深い水底にようやく届いた錨のように、遠く隔てられた場所から伝わってくる手応えが、波に抗う足掛かりを見つけたことを知らせてくれる。

無軌道に荒れ狂っていた寝台は、ゆっくりとその揺れをおさめていく。揺れが小さくなり、青臭い水が引いていく。乾いた道路の上を、ピックアップトラックの後姿が、スピードを上げて遠ざかっていくのが見える。わたしは行かないことを選んだのだ。

わたしは眼を閉じたまま、もうひとりのわたしに別れを告げる。逃げるなら逃げなさい、どこへでも、そして長い旅の果てに何を見つけたか、何もなかったのか、いつかわたしにも教えてくれればいい。

砂埃と車の影が徐々に彩度を失い、地平線に消える頃、肌に暖かな感触が戻ってくる。わたしは、自分が助かった事を知る。

うっすらと瞼を開けると、窓の外には霧がかかっていた。ぼんやりとした薄闇の中に目を凝らすと、アルミの窓枠の上に猫がいた。りんと涼やかな姿勢の黒猫が、黙ってこちらを見ている。さっきの「とすり」は、この猫が窓枠に降り立った音に違いない。

わたしはしばらく呆けたようにその影を見ている。見たことのない猫だったが、それでもこの夜を救ってくれたことには違いない。そうっと起きあがり、サッシを開ける。猫はこちらを見つめたまま逃げもしない。おいで、と囁くと、からだをしならせて部屋に滑り込んできた。

とすり、寝台の上に優しい重みが降りてくる。互いに遠慮がちに見つめ合った後で、猫は不意に緊張を解き、そのまま羽根布団の上で丸くなった。わたしも窓を閉め、同じように身体を丸めてみる。

もう寝台は揺れていない。あとに残るのは柔らかな身体が呼吸するリズムだけ。わけもなく涙が滲みそうになって、ぎゅっと眼を閉じる。明日の朝になったら、自分を救ってくれた小さな存在に感謝しよう。何もしてあげられることはないけれど、せめてあの男がしてくれたように、一皿のミルクでささやかな朝食を。わたしは今夜はじめて、明日をすすんで迎える気分になる。同時に眠りが瞼の奥の遠いところからやってきて、ようやく全てが、穏やかになる。

了

Folio vol.9
Out Of……

サン・マンドニの白い砂

岡沢秋

薄暗い穴ぐらから這い出して、寝ぼけ眼をこすりながら、広広とした砂浜に立っている。

椰子の葉が屋根の上に、灼けた肌に影を落として優しく揺れる。

きみは大きな腕を振り上げて、いつものうしろ姿で、泡立つ波に、色鮮やかな貝を ひとつ投げ込んだ。穏やかな波紋。魚たちの跳ねる音。僕らは立っていた、寄せては返す波を見ながら、波の彼方から生まれてくる真っ白な月が、中天でほんのり黄色く染まるまで。

巻貝はそのまま、どこまで流れていったのか…

あの日の浜辺の波音を、閉じ込めて。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

サン・マンドニ島は、海のど真ん中の、一一飛行場も船着場も無い、観光客とは無縁の、隔離された場所だった。

人の行き来など無いに等しく、島の人口は、もう何十年と、増えもしなければ減りもしない。何十世代も前から住んでいる人々が、家系を手繰ればどこかで繋がっている親戚たちとの婚姻を繰り返し、血筋を守りつづけていた。

テレビとラジオは辛うじて在った。それらは、この島で最も新しい、時代の贈り物だ。

だが、テレビは白黒だったし、ラジオは遥か波を越えて本島から届く、国営放送しか入らない（それだって雑音混じりだ）。

ラジオから流れてくるのは、聞いたこともない不思議な音楽と、見たこともない都会のざわめき。そして、年寄りたちが「征服者たちの言葉」と呼ぶ、白人たちの言葉――英語――で、まくしたてるように語られる、国内のニュースと世界各国の情勢。

年寄りたちは、変化を極端に恐れていた。新しい言葉は理解しようとせず、昔ながらの、ゆったりとした島の地元言葉だけで喋り、シャツやサンダルは身につけたがらない。征服者たちが名づけた「サン・マンドニ」という島の名前は禁句のようなもので、彼らは昔ながらに「ヨロモコ」と呼びつづけた。

それでも緩やかに島を飲み込んで、時代は確実に流れていた。

かたくなに「伝統」を守りつづけた老人たちが、一人減り、二人減り、いつか皆消えてしまう日は、やって来る。いつだかは分からないけれど、そう遠くはない未来、島ががらりと変貌する日が来るのだろうと、…誰もが予感していた。

島には異国のボランティア団体が設立していった学校があり、子供たちは皆、そこに集められていた。

そこでは、英語を習った。

英語の成績が良い子は、本島の観光ガイドの仕事をして稼げる。英語が分かれば、ラジオから流れてくる早口のニュースが理解できる。都会に出たい子たちは、目をきらきら輝かせて、真剣な表情で頑張っていた。

地理もやった。世界は丸く、この島は、太平洋という大きな海のどこかにあるらしかった。年寄りたちの話では、この島は世界の中心にあって、海は平らで、船を出してあまり遠くに行き過ぎると、奈落に落っこちてしまうことになっていたのだけれど。

数学は嫌いだった。出来ないとお金の計算が出来ないから困ると先生に叱られたが、島ではお金なんてほとんど使われなかった。

買い物は、ほとんど物々交換で済ます。夕飯の魚を買うときに、タロイモやイノコの実を引き換えにする。必要なのはティムの店に行くときくらいだ。ティムは本島から来た人で、島で唯一、テレビやラジオの修理が出来る人だった。

修理には金色のコイン2枚が必要だった。それがどのくらいの価値かなんて、誰も知らない。いざ修理に行くときには、カーペットや、天井に吊るしてある籠をひっくり返して、いつから家にあるのか分からない、どこから持ってきたのか誰も知らないような錆びたコインを何

とか探し出すのだ。

コインの裏には、髭のない、つるんとした聖マンドニの横顔が刻まれていた。

ずしりと重いコインに隠された価値なんて、大人たちは誰も知らなかった。学校で習わなかったからだろう。

あれは、スラジャワの教会で、姉さんと、隣町の人が結婚した夏の夜のことだった。

大人たちは全員酔っ払って騒いでいた。子供は皆、ご馳走のおこぼれにあずかっただけで追い立てられるように寝床に入ってしまったけれど、大人しく寝入った子なんていなかった。皆、広場から聞こえてくるお祝いの賑やかな音楽にどきどきして、寝付かれなかった。

島で取れる竹で作った楽器が、弾むような曲を奏でていた。姉さんは綺麗だったな、髪に白い花を飾っていた。

そんな夜に、そっと寝床を抜け出して、ベッドの下に隠してあった壷を持ち出した。壷の中には金色のコインが5つ、6つ、誰にも気づかれないうちに、溜め込んであった。

僕らは知っていた。

そのコインに描かれたサン・マンドニが、この島の征服者で、布教者だということ。何百年も昔、この島にやってきたサンドニは、教会を建てる土地を買うために、島の人たちに純金で出来たコインを支払った。多分誰も、その価値を知らなかったのだろう。ただキレイで珍しいというだけ思って、仕舞い込んだ。

本島に持っていけば、コインひとつで、頭の先からつま先まで着飾って、たらふく食べられるほどの価値があるという話だった。（だからティムは、何も知らない島の人たちからぼったくっていたとわけだ）

その計画は、誰にも知られるはずがなかった。気づいたところで、大人は誰一人、理解しなかったに違いない。

僕はコインを大切に袋にしまいこんで、小さな手荷物ひとつだけ纏めて、夜に紛れて外に出た。お祭り騒ぎから離れた椰子の木陰に、同じように抜け出してきた、同じ年頃の子が数人、ひっそりと佇んでいた。

一人が沖の入り江を指さした。そこには、人数分のカヌーがある。波の穏やかな夜だ。流れに乗っていけば、夜が明ける前に本島まで辿り着けるだろう。

カヌーは、静かに海へ滑り出した。

冷たい夜風に悴む手を摩り、身を寄せ合って波に揺られながら、僕らは熱く語り合った。教科書の挿絵でしか見たことのない、飛行機や自動車というものが見たい。そんなものが、本当にこの世に存在するのなら。それから、いつだったか、長老の家のラジオで聞いたような、流行りのポップソングを歌う美しい人たちが見たい。ライオンやキリン、ゾウなど、もはや伝説の獣にも等しい巨大な生き物がいるという、動物園にも行ってみたい。そうだ、動物園はいい。真っ先に動物園に行こうじゃないか……。

ほんの少し冒険して、本島の景色なんか見て、戻るつもりだったのだけれど。

それから時が流れ、少年たちは、いつしか年を重ねた。

幾人かは島を出て、見知らぬ都会で働き出した。僕もその一人だ。ほんの数日滞在した本島の喧騒に魅せられて、旅から戻っても落ち着かず、結局、学校卒業と同時に家を飛び出した。

そうして、どうにかこうにか職を見つけ、薄汚れた町の片隅に住み、一人で今日まで生きてきた。

かつて憧れに輝かせた目には曇りが浮かび、澄んだ空気に馴れた肺に、近代文明の生み出した煤や塵がこびりつく。

一度だけ、町へ姉さんが逢いに来た。ずいぶん大きくなった息子に、カヌーを漕がせていた。

都会に出たまま戻らない僕のことを、家族や親戚は、もう死んだものとして扱っているという。

だけど、こちらからすれば、島に居残っている人々こそ、もう、死んだも同然なのだ。

人だけではない。島そのものが、死に瀕して喘いでいた。

地球温暖化というやつだ。

海水面が上昇をはじめ、島は沈み始めていた。かつてカヌーを漕ぎ出した渚は、とっくに海の底。姉さんが結婚式を挙げた、あのスラジャワの白い屋根の教会は、半分も海水に浸かって、傾いてしまっている。聖マンドニ

が島人たちから黄金で買い取った、誰のものでもない土地は、今、海に返されようとしている。

島にいた人たちは、本島か、どこかの島に移住して、ちりぢりばらばらになったと聞く。海の上に散らばった宝石を元通り掻き集めるなんて、神様でもなければ、出来はしない。

かつて変化を嫌っていた年寄りたちの生き残りは、それでも、消え行く大地に留まり続け、年々海に飲み込まれていく土地の最後の切れ端の上に住んでいるという。

そんな光景を、カラーテレビの画面に映る、ニュースの中で他人事のように見ていた。

幼い頃を過ごした家は波に消え、いつか戻ろうと思っていたその場所は、今はもう、海の一部だ。

未練は無かった。僕は旅路に果てるのだ。そして、島から逃げ出した、他の仲間たちも。

年寄りたちが一人残らず、失われた島の名を抱いてエメラルドブルーの波に沈む時…、波の砕け散る白い砂浜が、近代文明の生んだ変化に洗い流される時…、僕らは思い知るのだろう。

すべての旅の終わりにあるものは、死と消滅に過ぎないこと。

そして、世界は果てしなく、この上なく美しいと同時に、限りなく残酷なものであるということを。

了

Folio vol.9

Out Of……

みんなのうた

オカヤマ

「あの、これ……」

言いながら学級委員の双葉さんがプリント用紙をおずおずと差し出す。咄嗟に手を伸ばしたぼくだが、首筋をぐいと引っ張られて思い出した。そうだった。ぼくの右腕は骨折し、ギプスに固められ、首から吊り下げられている状態なのだ。

左手で受け取った藁半紙に印刷されているインクの文字。「グリーングリーン」。ぼくが入院している間に、春の音楽会の課題曲はこれに決まったようだ。

「これが何か？」

「あの、この歌のことだけど……。あまり気にしないでね」

そう言い残し、双葉さんは逃げるようにその場を離れる。だが独り取り残されたぼくには何のことやらわけがわからない。

グリーングリーンに何か問題でもあるのだろうか。

怪訝な思いでプリントに目を落とす。

〝ある日パパと二人で語り合ったさ。この世に生きる喜び、そして悲しみのことを――〟

合唱の定番曲だ。さして目新しさもない。

つらつらと歌詞を追っていく。

〝その朝パパは出掛けた、遠い旅路へ。二度と還ってこないと、ラ・ラ・ラ、ぼくにもわかった――〟

ああなるほど、そういうことか。ようやく合点がいく。

グリーングリーンは別離の歌だ。軽快なメロディのためつい忘れがちだが、その内容は旅立ち、離ればなれになった父を追慕する悲しい歌だ。先日、交通事故で父を失ったばかりのぼくにはつらかろうというわけだ。

プリントに目を落としていると、するりと水っぱなが垂れる。どうも朝から具合が悪い。慌ててプリントを小脇に挟み、片手でポケットティッシュを取り出し不器用に洟をかんだ。どうやら風邪をひいたようだ。

しかしそれにしても、わざわざ「気にするな」と忠告するのも間の抜けた話だ。そんなことを言われれば余計に気になるし、気にしていなかったものまで気にするようになるだろうに。

ぼくは半ば呆れながら、七番まである歌詞に目を通す。七番までというと長いような気がするが、大体が単調な繰り返しだ。簡単に憶えられて、簡単に歌える。それ故に子供向けの合唱曲として適切なのだろう。

〝――グリーングリーン、青空には小鳥が歌い、グリーングリーン、丘の上には、ラ・ラ、緑が萌える〟

うん、双葉さんはいい子だ。真面目で優しくて、誰にだって親切だ。去年も同じクラスだったから、彼女の優しさ、細やかさが取って付けたものでないことは解っている。

でもね、そういう人は、ときどきちょっと鬱陶しい。

ところが放課後、合唱の練習で体育館に集まってみると、やたらとぼくの方をちらちら盗み見する女の子が多いのに気付く。それだけではなく、お互いに目配せしては小声で囁き合い、そしてこっそりと向けられるいたましげな視線――。

何も双葉さんだけじゃない。みんなそれぞれに憐れみ深く、みんなそれぞれにいい人なのだ。

だけどそんな優しさは、かえってぼくに身の置き所を失わさせる。

もちろんぼくだって頭では解っている。父親の死は悲しむべきことだろうし、そんな境遇に陥ったクラスメイトを気の毒に思うのは、人として当然のことだろう。

でも当の本人であるぼく自身が、父の死をさほど痛手と思っていないとなると、話はまた変わってくる。父が死んだからといって、ぼくの何かが失われたような気はしない。だから周囲の真っ当な同情、憐憫を受けるたびに、ぼくは自分の薄情さを思い知り、後ろめたさにさいなまれる。とはいえぼくは父を憎んでいたわけではなく、ましてや父の死を願っていたわけでもない。ぼくにとって父は、ただひたすらに疎遠な人物でしかなかったのだ。

先に練習にきていたクラスが演壇から降り、続いてぼくらのクラスが壇上に進む。ぼくが入院している間に何度か練習したようで、皆、まごまごすることなく雛壇に列を作り、指揮者が台上に上る。先生のピアノに合わせて一斉にお辞儀をし、指揮者が高く掲げたタクトに視線が集中する。それぞれの手には配布された歌詞カード。

それにしてもグリーングリーンの親子をぼくになぞらえるというのも皮肉な話だ。彼らは実に堅密な関係を築いており、その別離――それが離婚によるものか、あるいは死によってわかたれたものなのか断定できないが――ですら、父から子へ託される遺産として、少年の心に深く根を下ろしている。理想的といえばあまりに理想的で、少々暑苦しいくらいに密接な親子関係じゃないか。うちとはまるで事情が違う。

〝ある日パパと二人で語り合ったさ。この世に生きる喜び、そして悲しみのことを――〟

歌い出す五年三組。定番の曲なだけに、ぼくもすぐについていけた。歌詞はともかく、曲自体は何度も耳にしているのだ。

〝――グリーングリーン、青空には小鳥が歌い、グリーングリーン、丘の上にはラ・ラ、緑が揺れる――〟

そもそもぼくには父親との思い出があまりない。ぼくが四歳のときから去年まで単身赴任を繰り返していたせいか、ぼくは父の顔を憶えるのに苦労した。幼い頃はたまにふらりとやってくる「見知らぬおじさん」に怯えて泣いていたほどだ。

ある程度年端が行き、長距離電話の向こう側にいるのが自分の父だと理解できるようになっても、やっぱりそれは「よそよそしい誰か」の範疇を出ることはなかった。昨年、ようやくひとつ屋根の下で暮らすようになったものの、ぼくが目覚める前に出勤し、終電で帰宅する父は、相変わらず疎遠な間柄の人間でしかなかった。

〝ある朝ぼくは目覚めて、そして知ったさ。この世につらい悲しいことがあるってことを――〟

そんな父が、ある日を境に家にいるようになった。直接訊いたわけではないが、おそらく人員整理の対象にされたのだろう。あんなに会社に振り回された挙げ句、破れた靴下みたいに捨てられたのではさすがに気の毒というよりほかはない。だけどそれだって余所余所しい他人事の感情で、本心をいえば、父がいることによって何だか妙にぎこちない、家の空気にうんざりしていたのである。

〝――グリーングリーン、青空には雲が走り、グリーングリーン、丘の上にはラ・ラ、緑が騒ぐ〟

だがいい加減、新しい勤め口を見つけてくれないかと思い始めたある日、唐突にドライブに誘われた。県北の高原までの日帰り旅行だ。

この小旅行が二人の間に生じた隙間を埋め合わせるために企画されたものだということはすぐに解った。車中、父はぎこちなく「学校は楽しいか」「友達はいるのか」などと、手探りで会話の取り掛かりを見つけようと必死だった。一方ぼくはといえば、その退屈な問いのいちいちに律儀に一辺倒で答えていたものだ。

しかし二人の努力をもってしても会話が弾むことは一向になかった。なぜならぼくらの間でやりとりされたのは、問うて、答えて、また問うて、の繰り返しでしかなかったからだ。

互いの足下にぶつ切れの言葉が散乱する。

やがて父は話題に窮し、ぼくは返答に倦み果てた。

じきに車は緑深い山間地帯に差し掛かる。ぼくは車窓の景色に心を奪われたふうを装い、父に背を向け、助手席の窓に身を乗り出した。こうしていれば、むやみに話しかけられることもないし、沈黙を意識せずに済むからだ。

それが幸いしたのだろう。

山間の急な登り坂。片側一車線の道路は幅狭で、大きく右へカーブしていた。その坂道を上から猛スピードで下ってきた四輪駆動車。缶ビール片手の大学生が運転するそれは慣性の法則に抗しきれず、大きくセンターラインをはみ出して、対向車線にいたぼくらの方へ突っ込んだ。

左の助手席にいたぼくは右腕を骨折し、頭を強く打って数日間、意識がとんだ。右の運転席にいた父は直撃を受けて即死した。自動車の右半分をスクラップにされたくらいだから、おそらくひどい有り様だったのだろう。

だがそれら全ての成り行きを知ったのは、事故から一週間も経ってからのことだった。ぼくが意識を取り戻したとき、すでに葬儀は終わっており、そして今、ぼくの父は瀬戸物の骨壺に収まって、仏壇の前に置かれている。つまり最後まで、父の存在はぼくにとって他人事だったというわけだ。

ふと気付けば辺りがざわめきを取り戻していた。知らない間にひとくさり歌い終わっていたようだ。何やら先生が注意している。もっと声を大きく。背筋を伸ばして。「あと、歌ってない子もいるよ。恥ずかしくてもちゃんと声を出してね」

言いながら壇上を見渡す先生の視線がぼくを捉えた。思わずうつむく。確かにぼくは考え事をしていて、いつしか歌うのを忘れていたのである。それを責めているのかと思いきや、再び視線を上げてみると、今度は先生の方が、ばつの悪そうな表情で視線を逸らす。

ああなるほど。先生もお人好しの部類なのだ。つらい

思いを喚起され、思わず口をつぐんでしまったと、そんなふうに勘違いをしているのだ。

「じゃ、じゃあもう一回いくよ。今度は最後の礼までやるからね」

言い置いて、そそくさとピアノに戻る先生。

再び伴奏に合わせて歌い出す五年三組。でももうぼくは合唱などに身が入らない。周りが気を遣えば使うほど、ぼくは彼我の温度差を意識し、その差がますます自分を責める。実際、ぼくは父の死を知ってからというもの、努めて悲しみを掻き立てようとしたのである。たとえ縁薄い父であっても、肉親の死に動揺することもない自分の薄情さを認めるのが嫌だったのだ。

でも今は無理だ。父という個人の一生を思えば同情もするし、気の毒だとも思う。だがぼくという個人の身に降りかかった悲劇だとはどうしても思えないのだ。

うつむき、歌詞カードに目を落とし、この居心地の悪い時間が一刻も早く過ぎ去ることを祈る。しかしずっと下を向いていると、鼻水が垂れて仕方ない。朝からずっとこの調子だが、放課後になってからますますひどくなってきた。

反射的に鼻水を啜ると、隣の女の子がびくっとした。何かと訝しんだがすぐに悟る。この子はぼくが泣いていると誤解しているのだ。

洟を啜ることもままならず、ぼくは更に深く顔をうつむけ、鼻水が垂れるに任せた。鼻水が落ちたところの藁半紙が黒く湿った斑点になる。

のみならず、今、なぜだか睫毛が重くなる。ひどく眼球が熱い。

ぽろりとこぼれた涙が藁半紙に吸い取られる。いったいこれはどういうわけだろう。悲しくもないのに涙が出るなんて。喉の奥のひりつくような感覚もなく、頬を紅潮させるあの高ぶりもない。ただ機械的に涙が滲み、溢れていく。

涙に潤んだ視界にもじゃもじゃ頭。雛壇の目の前に立つクラスメイトの髪の毛に、白い粉のようなものが見える。

判った、これは風邪じゃない。今日、この最悪のタイミングで花粉症になってしまったのだ。きっと、ぼくの前に立っているもじゃもじゃ頭には、これでもかといわんばかりの花粉が付着しているに違いない。

ともあれ、涙を見られるのはまずい。咄嗟に涙を拭こうとして思い出す。そうだった。ぼくの右手はギプスで拘束され首から吊り下げられているのだ。ならば左手で――。

いや、それもまずい。ごしごしと瞼をぬぐっているぼくを見て、クラスメイトは何と思うだろうか。絶対に、確実に、父の死を悲しんでいると誤解するに違いない。同情されるのが嫌なわけではない。でも悲しくもないのに悲しんだことにされるのはたまらない。ぼくの感情が追いつく前に、ぼくの振る舞いが誰かによって決められる。そのまま芝居を続ければ、ますますぼくは後ろめたくなるはずだから。

ぼくは昂然と顔を上げ、涙、鼻水垂れ流しのまま、この場を乗り切ることにした。さいわい、生徒はみんな手元の歌詞カードに視線を落とすか、さもなくば正面の指揮者に顔を向けている。涙に濡れたぼくの顔を見られる心配はない。

喉に逆流する水っぱな、目尻から溢れる涙。とてもじゃないが歌っていられる状況ではなかった。ぼくはもう、鼻で息をすることもままならず、沼の鯉みたいに口をぱくぱくさせるばかりだった。

七番までのひどく長い歌がようやく終わる。ピアノに合わせ、深々とお辞儀をした際に、左の袖口で手早く顔をぬぐった。これが練習で良かった。もし本番だったら、居並ぶ観客に、涙と鼻水に濡れたぼくの顔を見られていたことだろう。

――何であの子は泣いてるの？

――この前お父さんを亡くされたんだって。

そしてグリーングリーンを口ずさみ、ああそうか、と訳知り顔に頷くのだ。想像するだけでぞっとする。

次のクラスが体育館に入ってきたので、五年三組の練習はお開きになった。先生に促され、演壇の端からぞろぞろと列をなして下りる。今日は散々な目に遭った。さっさと教室に戻って、荷物を持ったら一目散に帰宅しよう。

だが廊下に出た途端、ぼくを呼び止めるか細い声。

「……あの」

そうだった。たった一人の例外がいた。指揮者だけは、ぼくらの方を向き、壇上全てを見渡す立場にいたのだ。

「つらいと思うけど、泣かないで……」

一瞬、わけもわからず、ぶん殴りそうになった。

だがまたしても不自由な右手が邪魔をする。そう、ぼくの右手はギプスで固められ、首からぶらりと吊り下げられているのだ。

「――いちいちうるせえんだよ」

だがそんな憎まれ口ですら、双葉さんは優しくそっと受け止める。無理しなくていいから、とでも言いたげな慈しみに満ちた微笑で、とげとげしいぼくの言葉を迎え入れるのだ。

瞬間的に沸き上がった激情が行き場を失い、腹に落ちてくすぶり続ける。吐きそうになった。何でこんな目に遭わなきゃならないのだ。

惨めなんだか、腹立たしいのか、悲しいんだか、悔しいんだか、どうにも整理の付かない様々な感情が渦巻いて、とうとうぼくは泣いてしまった。

そんなぼくの手を取る双葉さん。包み込むその掌は小さいけれど、暖かい。

「つらいときは何でも話してね……」

小さな声で、しかし照れもせず、ためらいもせずに言い放つ。

「だって私たち友達でしょう？」

格別親しい間柄でもないのに、どうしてこの子はこんなにも優しくしてくれるのだろう。

頭がクラクラしてきた。

今のぼくが望むのは、優しい視線や慰めの言葉なんかじゃない。

ただただそっとしておいて欲しいだけなのだ。

でもたぶん無理だろう。ぼくは「不幸」な少年で、そういう人は慰め、励ましてやらなければならないからだ。

ああ、つくづく双葉さんは良い子だ。真面目で、優しくて、親切な双葉さん。まるで天使のような女の子だ。

でもね、そういう人は、いつもひどく鬱陶しい。

きっと、間違ってるのはぼくの方だけど、それでもやっぱり鬱陶しい。

了

Folio vol.9
Out Of……

過ぎゆく夏

村上妙

朝の七時五〇分だった。僕は燃えるゴミを町指定の袋につめてアパートの収集所に置いたところだった。

目の前に気配があった。目をこすり腰を上げたとき、僕は初めて彼女に会ったのだった。

「すみません」

細い声だった。僕は何が起こったのかよくわからず、彼女を凝視した。目はさほど大きくなかった。化粧気はなく、銀色の眼鏡の縁が光を放っている。

「Y町まで行きたいんですが、道に迷ってしまって」

Y町？隣町じゃないか。余計に不審だ。僕は変に思われるのを気にせず彼女の全身を見た。

黒のジャケット、ブーツカットの膝が色褪せたグレーのジーンズ。長い真っ黒な髪。高校生のような学生鞄を肩から掛けている。

「あのう？」

「失礼ですが、どちらからおいでで？」

「新宿からです。人を、探しているんです」

僕は頭を掻いた。

「ああ、そうでしたか。すみません、Y町なら隣町ですよ。ただ」

「なんでしょう？」

「バスも電車も通っていませんから時間かかります」

「そうですか」

彼女は苦笑した。

「じゃあ歩いて行きます」

「歩ける距離じゃないと思いますけど…」

「いえ、お金がないんです、恥ずかしいことに」

「あ、」

僕は気まずくてまた頭を掻いた。

「この道を左に折れて、まっすぐ行けば…3時間くらいで着くはずです」

「そうですか。ありがとうございました。」

「すみません、原付でも持っていれば…」

「いえ、道がわかっただけで充分です。ありがとうございました」

彼女はぺこりと頭を下げた。そして顔を上げたとき僕はぎょっとした。死んだ魚の様な目だったからだ。彼女は、僕の様子など気にせずにすたすたと歩いて行った。

※

「はあ、ほんじゃあおたくさんがうちの息子の」

「はい。突然押しかけて申し訳ありません」

「いや、いんだよ」

私は冷たい麦茶を淹れて息子の彼女だという子に差し出した。

それにしてもなんでまた息子の彼女だけがうちを訪ねてくるのか。東京からはるか離れたこの町、Y町まで。

随分歩いたのだろう。この夏だというのに黒いジャケットで汗をだらだら流し、すっかり真っ赤に日焼けした顔で。

「ちょっと待っててね。タオルでも持ってくるわ」

「いえ、長居すると悪いですから、平気です」

「だけど、折角なんだから一緒に来ればよかったものを」

だいたい、息子は女たらしだというのに、この子は2年一緒に暮らしていたのだというのだから、余程何か引きつけあうものでもあったのだろうか。

「それが、どうしてもできなくなって」

「何かあったのかい？」

首を横に振るだけで、俯いてしまった。

「私、地元で就職することが決まったんです。だから、次の春から離ればなれになることになって」

「あの馬鹿、別れようとでも言い出したの？」

嗚咽が響きだした。

「本当にねえ、申し訳ないよ。うちの馬鹿は昔から女癖が悪くてねえ。うちから東京なんかにいかせたのが間違いだったよ。あんたみたいなかわいいお嬢さんを散々傷つけてねぇ…」

やっと顔をあげると、焦点のさだまらない目で私を見据えた。

「馬鹿なのは私です。ずっとそばにいたかっただけなのに」

俺は大学の喫煙所で、見慣れた顔だがすっかり憔悴し真っ赤に日焼けしている幼なじみを見つけて声をかけた。

「おい、久しぶりじゃないか。百合子」

「久しぶりね」

「まったく、就職決まったやつはいいよなあ」

百合子に会うのはどれくらいぶりだろう？長い夏休みの間、一回も会っていなかった。こんなに長い間顔も見なかったのはこの二一年、初めてだった。

「随分やつれたな」

「食欲なくって」

「サトのせいか？」

百合子はセブンスターに火をつけ、大きく煙を吐いた。

「旅に出てたのよ。気持ちの整理に」

「はあ？」

「いなくなっちゃったの、サト」

「おい」

声が荒くなるのが自分でも分かる。百合子の男は大学内でも有名な女たらしで、二人の部屋に知らない女がどれだけ行き来していたか数えきれない。

「まあ、よかったよな。サトは百合子を幸せにできるやつじゃないよ」

「そうかな…」

百合子の目はうつろに空を見ていた。

「お前だって地元で就職するって言い出したのもアイツが原因なんだろ？」

「ううん、サトが私に出て行けって言ったのよ」

「なんだよそれ」

「俺はもうお前に、飽きたって」

俺は拳を強く握りしめた。幼なじみの百合子をそんな扱いにする男など許せない。

「おい」

「なあに」

「あいつ殴りに行く」

百合子はとめなかった。なんでだ？争いがなにより嫌いな百合子が？サトにだったらどれだけ泣かされてもいいのと強がっていた百合子が？

「行くぞ」

「うん」

俺が部屋を開けるとむっとした。なにか腐っている匂いだと思った。

「おい、サト出てこいよ」

サトの靴はあるのにあがりこんでも返事はなかった。玄関のすぐ横のユニットバスからさらに強く腐臭がした。開けるとそこには、ビニール袋に覆われた黒々とした物体があった。

「おい、もしかして百合子、お前…」

「うん、殺しちゃった。」

私とサトは上京して2年目の夏、サークルで知り合った。初めての大学生の飲み会というものに参加した私はうまい具合に酔わされて、気付いたときには私は全裸で、起き上がると隣にサトが眠っていた。それから私はサトの家に住むようになった。知らない女とサトがベッドにいるなんてことは日常茶飯事だった。それでも私は、サトがどうしようもない人間だとわかっていながらもどうしてもサトから離れられなかった。

「百合子、お前…」

「サトのね、お母さんに会ってきたの。Y町っていう田舎。すごい田舎だった。私達の地元より、ずうっと。一面の稲穂の向こうにね、綺麗に湖が光ってた」

「それよりなんでお前…」

「こうでもしなければ、私はずうっとサトに縛られて生きていくんだって。そんなの無理だと思ったの。

いっそ私が死のうかと思ってた。だけどね、馬鹿みたいじゃない、散々泣かされて、サトが生き残るなんて」

「百合子、逃げよう」

「私の旅は、終わったの。サトのお母さんにね、ごめんなさい。あなたの息子さんを手にかけましたってそう言うつもりで行ったの」

「いいから、逃げよう」

「旅っていうのは帰ってくる場所があるからこそできるのよ。私は、この家に帰って来た。そして永遠に、サトと時間を共有するの」

「馬鹿な真似はやめろ」

「もう、遅いのよ」

※

また、夏がきた。百合子が死んで七回目の夏。

地元で就職し、見合いで結婚し俺は一児の父となった。百合子を忘れるためかもしれなかった。忘れられるわけがない。目の前でどうしようもない人間のために自ら命を絶ったあの日のことを。

彼女のことを大学の頃の仲間で悪くいう人間はいない。俺は、Y町まで旅に出ることにしよう。帰って来る

場所、ちゃんとした家庭がある。

　Y町は、百合子の言った通りの田舎だった。バスも電車も通っておらず延々と道を歩き続けた。どこまで歩いても道端の景色は変わらず、稲穂が風に揺れ、湖面がきらきらと光を放つ。百合子はどんな気持ちでこの道を歩いたのだろう。

　サトはなぜ、あんなに献身的だった優しすぎた彼女を見捨てようとしたのだろうか。サトは人を愛するという感情を、本当に持っていたのだろうか。それでも2年間、確かにあの二人は生活を共にしていた。俺はずっと彼女を奪ってやると思っていたし、それを伝えたこともあった。だけど彼女はサトを選んで決して俺に振り返ることはなかった。そこまで二人を結びつけていたものはなんだろう。

　でも、俺が彼女を忘れるために結婚した妻と俺は何で結ばれているのだろう。サトと百合子の繋がりが分からなかったように俺は妻との繋がりが何なのか分からない。だが、俺はサトのような真似はしない。妻を思うとあんな真似はできない。俺は確かに妻を愛している。

「そうですか…」

　百合子があった時のサトの母親はどんな姿だったのだろう。俺の親と年はそう変わらない筈なのに、彼女は随分と老けてみえた。出された、麦茶はキンと冷えていた。俺は百合子のことを七年前の報道では伝わらなかったことも精一杯伝えようと雄弁になった。百合子とサトのことを。彼女は泣きながらそれを聞きうちの馬鹿はそんなことを、と繰り返し呟いた。

「はい、百合子のことをさぞかし憎んでらっしゃるかと思いますが、俺に免じて、どうか…」

「息子を殺した女を、良くは思えないけれど」

「当然です…」

「でもね、さぞかし酷い思いをさせたのね。うちの馬鹿は。でもね、あの女も馬鹿よ。私に会いに来るなんて…」

　帰り道、だらだらと汗が流れ落ち、畦道で一息つくことにした。百合子の、遺影となった写真を眺めていた。

「お前、本当馬鹿だよな」

　ひゅるりと風がすり抜け、あっと言う間に写真は飛ばされていった。

「馬鹿は俺もか」

　旅は、帰ってくる場所があるからこそできるのよ。あの日の百合子の台詞を思い出して、俺は立ち上がり長い道のりをまた歩き始めた。

了

Folio vol.9
Out Of……

グランドフィナーレ

歪

そういえば、こうして手を繋ぎながら沙織と話をするのは何年振りだろう。もうそれすら忘れてしまったが、沙織だけが力を込めて僕の掌を握るという繋ぎ方は、昔と全く変わらない。

沙織は僕を見上げて微笑む。その笑みは、早暁の海のように静かで、草原の清風のように澄んでいた。

きまりが悪くて、その笑顔からつい目を逸らしてしまう僕の態度も昔から変わらない。

桜の蕾も開き始め、世の中はこれから賑やかに彩られていくというのに、僕たちは別れを迎えようとしていた。どこからか子供の泣き声と笑い声が交ざって聞こえていた。

「ねぇ……」

沙織は何かを言い出そうとして、恥ずかしそうに口を噤み、僕から目を逸らした。

こういう時、いつもなら放っておいても沙織は続きを言い始めるのだが、今日は僕の方から、「なんだい」と、沙織の語尾を追う必要があった。沙織がよく使う、会話を誘導するような問い掛けも、これからしばらく聞くことはできない。

沙織が逸らした視線の先には、沙織の好きな木春菊が咲いていた。

「ねぇ、愛してる？」

沙織は決して解くことのできないなぞなぞを問い掛けるような、少し意地の悪い口調で訊ねた。まるで僕の反応を試すようなその含み笑いは、僕の心の底に眠る、今となっては不燃ゴミのように必要としなくなった感情を、激しく揺さぶる。

例えばそれは、「生きてる？」という質問のように、まるで馬鹿げていて、意識することすら忘れてしまうような質問だった。

しかし、沙織がこの場で訊ねる意味は、まるで「生きてる？」の問い掛けと同様に、意識していないからこそ、時には立ち止まって考えなければならない大切な問いだった。

僕は、生きている。そして、ずっと沙織を愛している。

「もちろんだよ」

「今でも？」

「ああ、今でも」

沙織は手を握ったまま、僕の言葉というフィルターを通して、まるで出逢った頃を思い出しているかのように、目を細めて僕を見つめた。照れ臭くなった僕が目を逸らすまで見つめていた沙織は、その幸福で満たされた表情のまま、内緒話をするような口調で囁いた。

「これからも？」

「さぁ、どうかな」

沙織は握っていた手の力を緩め、不安気な表情で僕の顔を覗き込んだ。

「……離れちゃうから？」

「そうだね、しばらくは一人でゆっくり過ごすよ」

「そう……寂しいわ」

別れの時は近付いている。僕には何となくそれがわかるし、誰よりも沙織自身が一番わかっていることだ。沙織は、僕の手の感触を記憶の中に収めるように、握っている手に力を込めたり弱めたりしていた。

僕と沙織が重ねている掌に、温かい汗が滲む。どこからか聞こえてきた子供の泣き声はいつの間にかやんでいて、今は笑い声だけが幾重にもなって響いていた。

「あと二・三年もすれば、また会えるよ」

「それってちょっと早過ぎない？」

「きっと、そんなものだよ」

「じゃあ……待ってる」

沙織は握っている手の上からもう片方の掌を重ねた。細い薬指には、あの時に渡した指輪が、僕たちが過ごしてきた時間を描き出しているかのように、淡く、鈍く輝いていた。

「指輪、買い替えなきゃな」

「どうして？」

「これ、もうサイズが合わないだろ」

「あっちでも売ってるかな」

「行ったことないから、わかんないけど」

「あなたの悪い癖は、いつも見切り発車で物事を進めることよ」

「結局、この性格は変えられなかったね」

沙織の指輪を静かに撫でる。サイズが合わなくなった指輪は沙織の指の外でくるくる回る。沙織は、縮んでしまった。そしてそのまま僕の目の前から、ゆっくりと消えてしまう。突然、耐え難い衝動に駆られた僕は、沙織の小さな手を強く、強く、握り締めた。

「痛い」

「ごめん。しかしこうやって手を握るのもしばらく我慢だな」

「何言ってんのよ。自分から手なんて握ってこないくせに」

沙織は頬を膨らませ、再び窓際の花瓶に咲いている木春菊の花に視線を移す。沙織の視線を追って、小さな花瓶に辿り着く頃には、僕の視界は淡く滲んでいた。

それは、誕生日に木春菊の花束をプレゼントしたことを呼び起こし、大喧嘩で花瓶を割った日を思い出し、木春菊の向こうに広がる空は、二人が出逢った頃をよみがえらせた。見るもの全てが沙織との思い出に帰依されていく。

沙織は、細い指を薔薇の茎のように僕の指に絡ませたまま、薔薇の刺のような言葉を、小さく、小さく呟いた。

「……そろそろみたい」

「そうだな」

「体には充分気を付けてね」

「君も元気で」

「元気で？　なんだかそれおかしいね」

「それもそうだな」

別れの時は近付いている。沙織はこれから旅に出るのか、それとも僕の知らない何処かへ行ってしまうのか。

いや、僕はそこを知っている。僕もいつかは沙織の居る場所へ。再び沙織と出逢うために。新しい指輪を持って。木春菊の花束を抱えて。沙織はきっと待っている。優しい笑みを浮かべながら。

「ねぇ愛してる？」

「もちろんだよ」

「今でも？」

「ああ……今でも」

共に歩んだ歳月が、今静かに幕を閉じる。

僕の口調は、あの頃の口調で。君の声音は、あの頃の声音で。二人微笑み交わしながら最期の会話は、無言の中で。

僕たちの人生は、君の冷たい手とは裏腹に、最期まで温かくて。

君を奪った病が全てを冷たくしても、

四十五年前に渡した指輪と、微かに微笑んでいる幸せそうな寝顔だけは、あの頃と変わらなかった。

了

データーベースラブリー

サイキカツミ

海岸線の道は曲がりくねったあげく、断崖に続いていた。

ハマーはここは自殺の名所なんだといい、そうなのかとあゆみは漠然と思いながら、展望台の端で白い水平線を見た。よく見ると水平線の一部だけが白く光っていた。水面の輝きの中にオレンジ色の光が含まれている風にも見えたが、あまりに遠すぎてそれ以上の判別はつきかねた。

「あれ、なに？あそこ、光ってる」

あゆみは振り返ってハマーに声をかけた。ハマーは傘を抱えて手の中のカメラを弄りながら不思議だなあといった。きっと雲に隙間があって、そこから陽が刺してるのだろう。あゆみはその雲と海の織りなす美しさに見惚れた。雲は何重にも重なり、より上空にあるものは勢いよく、海面に近いものはよりゆっくりと流れていた。黒々とした雲。とぐろを巻いて荒れ狂う雲。じっと広大にゆるやかに流れる雲。そして、海。

そのうちに輝きは消えた。

展望台の先端にたつと三方が海に包まれていてあゆみはぞっとした。右手は暗く雨に揺れる森林が断崖の側まで寄せていた。左手の遠くには丸いドーム型の屋根を持つ建物が見え、それは原発でハマーはそこにいきたがっていたのだが、疲労とあゆみが退屈しきっていたのに呆れて断崖で車をとめた。雨風で木々が揺れている。駐車場から断崖までの細い道はまるであの世への間道のように森々と薄暗かった。風は潮の匂いを運んで雨まじりにあゆみの顔に強く吹き付けていた。

こんな日に断崖を観光するものなどいない。大粒の雨がざんざか降っていた。

あゆみは久しぶりに着たワンピースが風に揺れながら濡れるのが新鮮だった。岩にさらされた断崖。草は僅かにのこる地面への執着をあらわすかのように地表にぎゅっとこびりついていた。所々に立て看板があり、赤い文字で「この先危険」と書いているのだが、本当にその先は手摺りさえ心もとなく急角度で海面に向かって落ちている。

あゆみが覗き込むと波頭が岩に当たって白く砕けているのが見えた。岩。そして、寄せる波。砕けて散り、きらきらとしていた。

振り向くとハマーは一心不乱に写真を撮っていて、ふと気がついたようにあゆみにカメラを向けた。

☆

そこは長い間、窓も締め切った部屋で、すえた匂いがこびりつき、食料品やティッシュのゴミが山になっていた。本来のゴミ箱は溢れた上に寝転がったまま長い年月が経過しており、漫画が棚の中に並び、ビデオが山のように積まれていた。古いパソコンが一台。テレビが一台。おまるがひとつ、太った男が一人、全裸で拘束されたまま眠る女が一人。それがその部屋の主要な内容物だった。

太った男は自分をハマーと女に呼ばせていた。「俺がハマーだ」という古い洋モノのコメディドラマがある。彼はドラマではミギーと名づけられたエアガンを買った。何度も何度も繰り返してハマーは撮り溜めたビデオカセットを見た。彼が笑う時はそのビデオを見ている時だけだったが、憧れは憧れに終わり、似ても似つかないほどハマーは醜く太っていた。ドラマを見た後は興奮して俺をハマーと呼べといって、あゆみに銃口を向けて姿真似をしたりした。

そんな部屋の中ではずっとテレビが流れていた。画面ではけばけばしい印象のテロップが踊り、レポーターは素っ頓狂な声で底の浅い正論（とハマーはいうのだが）を繰り返していた。『埼玉の監禁男ついに自供』『10歳の幼女誘拐犯の引きこもり生活』『落伍者の果て』。ネットに繋げると、引きこもりの男を非難する文章のやりとりが賑わっていた。ハマーはその動きに深く興味を示し記事をデーターベースソフトにペーストした。

事件のあらましはこうだ。先日、埼玉で幼女を数年に渡って監禁した男が逮捕された。名前はイシザカコウジというその男は拘束され連行された。某俳優と同じ名前だが全く本物のイシザカコウジに失礼なほど、でぶでぶと太って淀んだ目をしている男だった。年齢は三七歳。三〇台の初めに運送業をクビになったあと、財産家の一人息子だったおかげでのうのうと暮らしいた。ハマーは自分の境遇と比べて「こんなヤツ」と唾棄した。男は幼女を誘拐未遂の余罪があった。埼玉県のあちこちで車に連れ込みかけたまま失敗している。単なる痴漢（洗濯物窃盗）の余罪も何件かあった。ハマーはその点を糾弾する。ロリは神聖なものだ。だから他のエロスに浮気するのはダメなヤツだと。テレビはイシザカの人物像を探るという番組を何度も何度も放映した。ハマーはそれを逐一録画していた。それはハマーの外出している時間はあゆみが録画した。

「俺は第二の宮崎勤だ」イシザカコウジは公判の途中に傍聴席に向かってそういい放ったそうだ。

録画したテレビを見ながら、第二の、かとハマーは薄ら笑う。所詮、類似犯だったし、まがいものだった。宮崎はハマーの神だった。宮崎が本物でイシザカは偽物だった。そして次の本物は間違いなく自分だとハマーは思っていたし、実際、そうなのだと信じていた。

「本物と偽物の違いはなんなの」

あゆみはそう聞く。ハマーは「狂気さ」と答えた。

「狂気は誰にも真似することはできない。他はコピーすれば殆どの物は代用できる。だが狂気だけは真似した瞬間に狂気ではなくなるんだ」

ハマーは自らの世界が大事だ。

「この娘は可愛くてそしてお馬鹿なんだ」と何度も何度もあゆみに語り、この娘をおとして犯ってやる。このエロシーンはとてもいいんだと力説する。ポニーテールの一条若菜はハマーのお気に入りだった。ゲームをしている時の彼はまるで狂気も洗練されたものもなく不格好な冴えない中年男性だった。

あらゆることのうち彼が最も集中したのは、線を描いている時で、時々思い出したように彼はちゃぶ台に向かって黙々と何かを描いていた。コピー用紙にボールペンの線を何本も何本も描いていたのは、うねり、とぐろを巻き、やがて一つの流れになってゆく水の絵だった。それは陰毛の模写であり、濁流だった。お気に入りのゲームの少女の絵かと思っていたあゆみは、肩すかしにあい、それが素晴らしいものだとは全く持って思わなかったが、ハマーの意外な熱心さには感服した。レオナルド・ダビンチは晩年濁流の絵を描き続けたといいつつ、よほど機嫌が良いときには買ってきたワンカップを飲みながら自分はダビンチの生まれ変わりだとさえのたまうのだった。あゆみはそういうハマーを憎んでいた。

あゆみの定位置は部屋の隅の半畳程の場所で、その反対側の角にあるのがあゆみの雪隠だった。おまるに汚物が溢れるようになると、ハマーは階下のトイレに捨てにゆくのだが、その度ごとに絶望的な気分に陥り、そうなると絶望的な気分で落ちこみ、急激に眠くなるのだった。

この二年ほど、ハマーは週に三度か四度、半日づつ車でどこかへ出かけていた。どうやら親が遺した家の維持と生活費だけはなんとか働いているようだった。稼いできたお金でアニメのキャラクターを模した衣装をあゆみに着せて悦んだ。テレビで見る女子高生は可愛いし楽しそうだ、あんなふつうの服を着たいとあゆみは思う。そしてどこかでハマーがまた別の幼女に手を出してはいないかとあゆみは恐怖する。「おれはやってないお前だけだ」と繰り返しいい、そのくせテレビに子供が映ると目を細めて見ていた。

あゆみは自分が何故不安に思うのかと考えないことにしていた。あゆみが責めるとハマーは泣く。時には夜中の暗闇の中、あゆみの胸にすがりついて泣いた。

「ごめんよごめんよ。君を連れてきてしまった。どこにもいかないでくれ」と。

あゆみはハマーの頭を撫でる。そして、絶対に殺してやりたいと思う。

五年。五年間は人生の中でどれほどの重みを持つのだろう。

小学生が高校生になる時間。ランドセルは何年も使われないまま部屋の隅に転がったままで、もう自分は十五歳なのだと考えるとパニックに陥る。学校にも戻れない。親に合わせる顔もない。足を縛られて過ごした一年。何度も逃亡しようとした二年。毎夜の行為に躯が弱り、病気がちだった三年。絶望の四年。諦めて王女のように振る舞った五年。

「もうすぐ僕たちが出会ってから五年目の記念日だ」

ハマーはいけしゃあしゃあといった。頭にきたあゆみは彼の躯を蹴った。ハマーの股間を蹴る。強く蹴れば蹴るほど彼は勃起して、やがてたまらなくなると彼は手でしごきだす。エロビデオを見てビンの中に精液を最近溜めていて、いっぱいになればあゆみにぶっかけてその上で交じりたいという願望をハマーは持っていた。あゆみは好きに任せた。どうせこのまま朽ちてゆくのだ。入れてよとねだる。ハマーのものに刺されながら頭が痒いとあゆみは頭を掻いた。

滅びよ。世界。

ハマーがぐるぐる回るような夢を見たといった。

誰だか分からない三人の人と両手をつないで輪になっていた。同じところをぐるぐると回転していた。彼らはにこやかに笑っていた。楽しそうに笑っている。気心が知れたような親密な笑顔だった。ハマーはつられて笑ったが上手く笑えたかどうかは分からない。自分の存在はこの世に認められていないと思っているハマーのまわりは広い草原だった。そこはまるでサウンドオブミュージックに出てきたような美しい草原の真ん中で、場所は判別しなかった。アルプスではなかった。遙か遠くに丘が見えた。森がその周りを取り囲んでいた。彼ら（彼女ら？）が誰だったか目覚めた後では分からない。

「へえ、そう」

いつものようにあゆみは一応答えるものの、実のところハマーの夢などどうでもよかった。それより窓の外の風景が大事だった。

雨粒が目の前のガラスをつたって流れ落ちてゆく。ひとつの粒が二つみっつといくつもの水滴を吸収して流れてゆく。風に剥がされて左右に消えてゆくのだ。部屋の窓で雨粒を見てる時とは似てるようでまるで違っていた。全く新鮮で不思議だった。

片側三車線の太い道路。ずっとずっとまっすぐ、どこまでも続くような広い道路だった。

ガスタンクの丸い重なりが見えた。地平線がのような水田もあった。昔は聞いたこともなかったファーストフードも見えた。五年振りの外界はあまりにも眩しくて目がチカチカするようだった。

外！　そうなのだ。あゆみの待望した外の世界だった。

どんなに望んだことだろう。どんなに夢見たことだろう。あゆみは雨を残念に思いつつも、雨で良かったのだと納得した。天気があまりに晴れがましかったら、どんなに心細かっただろう。どれほど恐怖を感じたのだろうとおもう。

車がどこに向かうのかあゆみには興味なかった。もしかすると二度と見ることができない風景かも知れないと思い、あゆみはじっと世界を凝視していた。ハマーはずっと原子力発電所の原子力以外の可能性を語り続けていて、きっと行き先は原発なのだろうが、何故、ハマーがいきたがっているのかはよく分からなかった。大量に買い込んだお気に入りのキットカットをハマーは頬張りながら、テロだ。テロだとハマーは繰り返した。キットカットをあゆみは風景に見とれたまま口に運んだ。

それは五年目の記念の旅だった。

「ねえ、ここで一緒に飛び降りちゃいましょうよ」

そういうと、手を伸ばしてあゆみは傘を断崖の下に落とした。

自分でもいささか芝居じみていると感じていたが、ひらひらゆっくり風に流されながら落ちてゆくビニール傘は回転して、壁にぶつかりながら落ちてゆく。

何故だかこみ上げてくるものがあった。どうせこの世に生きてても意味はないのよ。あんたなんか。そうでしょ？私も生きていたって意味もないのよ。せっかくだから死んじゃいましょうよ。

両手を広げてあゆみは振り返った。

「突き落として」

ハマーは手にカメラを持った格好のまま、その場にたちずさんでいた。そしてはっと気づいたようにあゆみに駆け寄り、「死なないでくれ」とあゆみにしがみついた。そしてしゃくりあげて涙を流しはじめた。あゆみは幻滅して答えた。

ねえ、あなたはダビンチの生まれ変わりじゃなかったの？自分は天才だと思ってるんじゃなかったの？だったら、私なんか殺して頂戴。殺して、そして何知らぬ顔で生きて。生きてあなたの神様よりも大きな犯罪でもすればいいじゃない。あなたがさっきいってたように原発でも破壊してこの世を道連れに破滅すればいいじゃない。

あゆみはハマーの頭を抱きしめながら、呟いた。

「だめだ。だめなんだ。俺は何もできない男なんだ。そんなことできない」

あゆみもつられて涙が溢れてきた。どうして私なの？どうして私だったの？

その声はハマーの耳には入らなかったようだ。

「俺は、おれは」

あゆみはいっそ自分がハマーを突き落としてやろうかと考えたが、そうすると、悲しい気分に陥りそうになった。そしてそんな自分に腹をたてた。

「じゃあ、かわりに、死んで」

「いやだ。いやだ。俺が憎いのか」

「そうよ、憎いのよ」

「そんなことをいわないでくれよ。俺はおまえなしでは生きて居られない」

「死んだ方がいいわよ。あなたみたいな人は」

雲が水平線の上でぐるぐる回ってるように渦巻いているのが見えた。もっと雨が強くなるだろう。もっと風も強くなるだろう。雷よ鳴れ。閃光よ地上に落ちろ、地上の有象無象を流し去るほど雨よ振れと、あゆみは雲を呪った。

私の人生を返して。

原発に着いた時にはだいぶ日も陰って暗くなりかけていた。車の中でハマーの感情が元に戻るのを待ち、濡れた服を乾かすのに時間をとられたせいもあった。

「昔の小説に原発を乗っ取って政治的に利用しようとした青年達の話があるんだ」

機嫌が直ったハマーはにこにこしながら、その大きな白いドーム型の屋根に向かって、手を合わせた。ライトアップされた屋根は黄色とオレンジ色に染まって、ぼんやりとその異様な姿を現している。まるで妊婦のお腹のようだ、とあゆみは思う。

昔、ロシアがソ連という国だった頃、原発が爆発して、雨に放射能が含まれてるっていう話があって、怖かったとハマーはいい、今だって、ほんの少しずつ地球上に放射能は降り注いでるんだ。序序にこの星は死んでゆくんだ。そして誰もそれを止められないんだ。ハマーは夢うつつのようにそう呟いた。ねえ、キットカット食べよう。甘くておいしいよ、ねえ。袋から出して、またハマーはその茶色の固まりを美味しそうにほおばるのだった。

☆

殺しても殺し足りないくらい憎んでいた。そして憎しみが大きければ大きいほどあゆみはハマーに囚われていた。逃げ込んだ原発の事務所に追いかけてきて、その場で大立ち回りを演じたあげくハマーは捕まり、あゆみは世界に戻ってきた。警察署の取調室であゆみは泣いた。そして、彼が捕まったと新聞に出ているのを見た。怖くてテレビは見ることができなかった。五年ぶりの父と母はとてもやつれて見え、静かな距離が開いてしまったのだと思う。何を話して何を語ればいいのだろう。今更、家族ごっこするのがとても苦痛に感じて、いろんなことが窮屈だった。自分はやはりあの断崖で死んでしまった方がよかったのだ。

そしてあゆみは、自分は罪を犯してしまったのだと後悔した。ハマーを世の中に出してしまったことを後悔した。人々の好奇の目に晒してしまったことを後悔した。自分も好奇の目の中に放り込まれた。そして絶望する。ねえ、愛するって何？

私はもしかするとハマーを愛していたのかも知れないと思う。

憎しみが強いほど、そして苦しみが大きいほど、あゆみはハマーの姿を思い出した。

寝言であゆみの名前を呼ぶハマー。時々、絶望的な苦悶の表情に陥り、悲しそうに、そして鬼のような目であゆみを見た。苦しそうな表情で眠るハマー。はしゃいでゲームに没頭するハマー。インターネットで見つけた画像を、子供のように「面白いよ面白いよ見てみて」と見せるハマー。落書きを天才の所行だとのたまわるハマー。情けない格好で撮った数々の写真。現像してないのも数多くあるだろう。最後のフィルムに写ってたはずの私の写真はどうなってしまったのだろう。あのおまるは廃棄されてしまったのだろうか。ビデオのコレクション、あゆみから見ればくだらないゴミのような映像の数々。波の絵。

「やっぱり君は僕を見捨ててしまうんだ。見捨ててしまうんだ」

原発の事務所で叫んだ声がいつまでも耳の中にこだましていた。

あゆみはイシザカコウジのデーターベースのようにハマーのデーターベースを作ってあげなければと思った。そのデーターベースの構築が終われば、きっと私は逃れられる。きっと私の事件は終わる。だが、作ることはできなかった。どうしても作れなかった。君は、被害者だ。被害者が加害者に囚われているので、その囚われから開放しなければならないと、警察や医者がいう。だが、記憶と時間と感情は取り返せない。過ぎ去ったものは取り返せないのだ。

ねえ、でも、この苦しみは、愛じゃないの？

あゆみはそう、誰かに今日も訊くだろう。あまりにも酷すぎて私はもう元に戻れない。もう決してあなたのことを私の中から消すこともできない。傷みと苦しみは二度と繰り返したくないと思うけれども懐かしい。そして、私はもう誰も愛することができないと、悲しそうにいうのを聞くだろう。本当の愛などない。そして、嘘っぱちの愛もない。何にも囚われるようなことがないように、あゆみは過去など存在しなかったように、三年後の今日も街を歩く。人々の姿をまるで遠い世界の絵画のように感じながら。孤独に。

了

A Dreaming Traveler

岩井とおる

畳の上に体を広げて天井を見る。黒ずんだ蛍光灯、いまにも落ちてきそうな剥れかけた木片。

携帯電話の電源が切れているのを確認してしばし目を閉じる。あいも変わらず、雨の音がする。日本三景を眺めに行く気はしない。名前を耳にしたことがあるから来てみただけで、景色に興味があるわけではまったくなかった。

「もう、やめよう」

僕は彼女に言った。言われることは薄々わかっていただろう。好きになるということは、あるいは少し相手を理解するということは、こういうことだ。どんなに鈍感だって〜少なくとも彼女は僕にほかに女がいないかと問い詰めない程度には鈍感だった〜、相手が別れを切り出す兆候くらいはわかる。彼女はあまり表情を崩さなかった。

「なんで？」

僕を責めているのか自分自身を責めているのかわからないような声で、両手で持っているガラスのコップに向かって彼女は言った。

「なんでって言われても…。その…」

「もう好きじゃないの？」

「うん、ごめん」

「そう」

彼女はコップから手を離し、ストローの入っていた細長い紙をちびちびと千切りだした。それを見ているとまるで、僕自身が千切られているようだった。アイスミルクティーの入っていたコップには、今では底に少し水がたまっている。

僕はひとつ嘘をついた。別に好きじゃないわけじゃない。でも好きだからってなんなのだ？確かに僕は彼女のことを好きだけれど、でもほかにいくらでも好きな女の子はいるし、矢田亜希子に仲間由紀恵、春の河原や空や雲も好き、ドラクエだってオレンジレンジだって、メザシだって好きだ。彼女がメザシ以下なわけはないが、でも会いたくはない。なぜかといえば、もう抱きたくないから。ただそれだけのことだ。

抱きたくない浮気相手というのは、なんの存在価値もないことの最高級の比喩のようなものだ。穴の空いたコンドームだってなにかには使えるかもしれないけれど、抱きたくない浮気相手の使い道なんてあるはずもない。

ゴールデンウィーク一緒にすごすつもりだったのに！わたしの予定どうしてくれるのよ！とかなんとか言っていつものように怒りまくってくれるほうが、僕としてはずっと楽だった。でも彼女はただただ黙っていた。

やがて彼女は思いついたように立ち上がり、荷物を手にとって無言で外に出た。僕は追わなかった。彼女は振り返らなかった。

次の朝、携帯を開くと五月になっていた。旅に出よう

一人旅のイメージといえば、こんな感じだ。

そんなに背の高くないやせ気味の青年が、少し大きめなかばんを持って一人列車に乗る。古典的イメージに沿って各駅停車に乗るのもいいが、現代なので新幹線でいいだろう。金には別に困っていない。どうせなら、できるだけ速いほうがいい。

行き先なんて決まっていない。とりあえず北のほうへ。

窓に寄りかかって過ぎ行く風景を眺める。ガラスに映った黒目が、左から右へゆっくりと動き、すばやく左に戻ってはまたゆっくり右に動く。この動作を何百回と続けるうちに、もう東京ははるか遠くへ去っている。

外は雨。七月の大学の試験は二科目だけであっという間に終わったけれど、長引く梅雨はまだ終わりきっていない。北上する梅雨前線から逃げるように、東北新幹線は走る。畑が、古びたプレハブ小屋が、水滴でにじむ。

青年はとりあえず仙台で降りてみた。乗り換えの在来線を一通り見回してから、松島に行ってみることにする。記憶に間違いがなければ、日本三景の一つのはずだ。

降り立つと、期待を寸分裏切らないさびれた駅だ。黄土色の壁に、赤い屋根。木造の駅舎は雨がしたたって、どことなく風情がある。

安い民宿を探すと、不安になるくらいあっさりと見つかった。もちろん部屋は空いている。御飯はどうされますか、と尋ねられたので、素泊まりで、と答えた。

と思った。

一人旅は好きではない。一人でもすることのあるうちは悪くない。たとえば京都。神社仏閣をめぐる、梅をみる、悪くない。一銭洋食を食べ、抹茶パフェを食べ、くずきりまで食べてみる、悪くない。

でも満腹で、もう歩く元気もなくなったとき僕は知らない街でただ一人立ち尽くす。どうしようもなくて、漫画喫茶に行ったことがある。もちろん東京にだって友達の家にだってある「ピンポン」を、全五巻とりあえず読みきると、涙が止まらなかった。

わざわざバスを乗り継いで目指した店が休みだったとき、雪で外に出る気がしないとき、隣に誰かいないとこんな些細なことも笑い飛ばせない自分を発見する。

だから僕が旅のはじめにすることは、まず地方出身の友達に連絡をとることだ。彼らが運良く地元に帰っていればそこを頼っていくのだ。あるいはネットで知り合った地方の友達に会いにいくこともある。

もちろんそのとき付き合っている女の子と行くこともあれば、仲間と大勢で行くこともある。でもそれは旅行であって旅ではない。なにが起こるかわからないのが旅で、なにが起こるかわかっているのが旅行だ、と僕は勝手に定義している。こんな自分勝手な定義が、僕にはものすごくたくさんある。おかげで僕の使う日本語は、日本語のようで日本語ではない。結局は言葉だって、自己満足のツールでしかないのだ。

僕はずっと東京で育ったので、いったい地方の人がどんなふうな育ち方をするものなのか、まったく見当がつかない。

娯楽がないから初体験が早いとか、みんな学校でやるんだとか、地元で集まって同窓会をやると三次会(3)でラブホに行くのがお決まりのコースだとか、そんなわけのわからない噂が出回って、地方を軽蔑しつつも内心ちょっと羨んだりもした。

当然東京の大学に進学したわけだけれども、実際にそんな地方のカラフルな噂の証人がいたりして、大学ってすごいところだとはじめは思った。

さて、三人目にしてようやく電話に出てくれた大学のサークルの後輩の女の子は、運良くゴールデンウィークに合わせて地元の大阪に帰っていた。残念ながら大阪ともなると、性生活は東京と大差ないらしい。つまり、小汚い、ということだ。

「大阪になにしにくるんですかあ？」

と彼女は標準語で言った。

「うーん、たこ焼き食いたいな」

「あーおいしいたこ焼きやさん知ってますよ。いつ来るんですか？」

「いま行くよ」

三十分で家を飛び出し、それから三時間後、僕は新大阪の改札で手を振っている後輩を発見した。前言を撤回する。これは旅なんかじゃなくて、ただのデートだ。

「先輩いま好きな人いるんですかあ？」

と腕の中で白い肌が赤く照っている後輩が言った。赤いのは恥のせいでも暑いせいでもなく、単に照明が赤いからだ。大阪のラブホテルは東京のそれより、ちょっと派手めな気がする。

「うん、いるよ」

ベッドの中ではつい正直になる一悪い癖だ。

「ドラマみたいに、それは君だ、とか言ってくれないんですかあ？」

と赤い照明に向かって後輩が言う。

僕は黙っていた。どう答えても嘘になるような気がしたからだ。後輩のことは、僕はとても好きだ。でも「とびっきり」ではないし、たぶん彼女の問いには「とびっきり」が省略されていた。ドラマの「好き」は、いつだって「とびっきり」なのだ。

彼女の顔は僕の腕を転がって、いま目の前に現れた。長いキスをして、突然飛び起きた後輩は

「カラオケしましょー」

と明るく叫んだ。

「おお、やるか」

「歌ってくださいよ」

「どんなのがいい？」

「先輩らしいやつ」

「俺らしいやつねえ…」

ベッドサイドにある分厚い本で曲を探す。番号を言って彼女に入れてもらった。しばらく経ってから、歪んだ音が流れ出す。

あーだから今夜だけは君を抱いていたい

あー明日の今頃は僕は汽車の中

確かに、なにが起こるかはわからない。でもそれはこれが旅だからではなくて、僕らが男と女だからだ。

愛に終わりがあって、心の旅が始まる。

愛する人といえば、この二十一年の生涯で、たぶん一人だけいる。「たぶん」というのはもちろん、あとから振り返ればこんなものは愛ではないかもしれないから

女の子は本当は、愛されていないほうが気楽なんだと思う。ちょっと突き放されたくらいのほうがきっと、相手に期待したりしなくていい分やりやすいのだ。これはもちろん僕の仮説に過ぎないのだけれど、僕という男の子に対する需要がそこそこ存在することが、その仮説を証明するに十分な証拠だと思っている。

結局ゴールデンウィークが過ぎてから夏休みに入るまでの間に、僕は五人の女の子と寝た。多いと言えば多いし、そうでもないと言えばそうでもない。誰とどこに行ってどんな会話をしたかをきちんと覚えておくにはちょっと多すぎるけれど、一週間に一度はデートしてなおかつ週休二日をとることができる。デートするときに気をつけることは、名前を呼ばないようにすることだ。

東京に戻ってきてからも後輩とは二人で頻繁に会った。しまいには僕はよく後輩の家に泊まるようになっていた。

六月の終わり、ふと思いついて後輩に尋ねてみた。

「お前って、彼氏とかいるのか？」

「先輩ってほんとに変ですよねえ？」

「なにが？」

「そういうのって普通、最初に聞くもんですよ」

「そういうもんか。まあ聞かなくても見当はつくから、別に聞かなくてもいいかなと思ってさ」

後輩はなにが面白いのか、大きな声で笑った。僕はなんだか面倒くさくなって、眠ってしまった。最近週二回は寝床になっている後輩のベッドは、なぜかとても寝ごこちが良い。

「でもね、どうも愛されてる感じがしないんだ」

「先輩ってそういう悩みを超越してるのかと思ってました」

「いや、ある意味では俺は誰よりも子供だと思う。俺も彼女も、永遠に手に入らないものを追いかけて、もがき苦しんでいるんだ」

「そう口では言っても、信じてるとこありますよね？」

「うん、そこが問題なんだよな」

「傷つけたかったら、傷つけてもいいです。でも、これ以上ほかの誰かを、傷つけないでくださいね」

一緒に東京まで帰ってきた後輩は、別れ際に珍しく真面目な顔でそう言った。僕は確かにうなずいたはずだったし、確かに二週間くらいはその約束を守ったのだ。でも結局のところその約束を守り通すことは、かなわなかった。

傷ついた一言うのは簡単だ。でも本当は人はそんなに簡単に傷つくものではない。二十歳にもなって、よく知りもしない男との恋が一ヶ月で終わったからといって本格的に傷ついてしまうような女の子がいるはずもない。

問題は傷ついたふりをするのが可愛いと思い込んでいる女の子がいっぱいいて、そしてどうやらそれを本当に可愛らしく感じてしまう男がこれまたたくさんいることだ。それで結局のところ、僕は女の子を傷つけた極悪人として断罪されることになる。

でも言わせてもらえば、女の子の方だって僕が愛なんてひとかけらも持ち合わせていないのを知っていたはずなのだ。本当に利用されて捨てられたのは僕の方だし、でもそんなことはもちろん誰も信じてはくれない。

だ。

愛というものを言葉に表すのは、いつだって困難だ。結局それは実体のない単なる思い込みで、文字にしてしまうといったいどこら辺が愛なのかさっぱりわからない。それでもすごくうれしいことがあると真っ先に佳奈に伝えたくなったりするようなとき、俺はたぶんこいつを愛しているんだろうなあ、と思う。

じゃあなにがすごくうれしいことなのかと言えば、いろいろあるうちの一つが「佳奈が笑顔でいること」だ。そんなことに思い当たるとこれはやっぱり愛だ、と持つべきなのか持つべきでないのかわからない自信を持つことになる。

問題は、佳奈が僕のことを愛してくれていないことで、単純でありきたりな問題だが、だからこそ事態は結構深刻だったりする。

「好きな人がいるのに、こんなところで私と会ってるんですかあ？」

と今日三軒目のたこ焼き屋で彼女は言った。心斎橋の「憂憂堂」だ。ここのたこ焼きは、とにかくうまい。もしかしたら本場の大阪人に言わせれば邪道なのかもしれないけれど、ポン酢につけて食べるこのたこ焼きは芸術の域に達している。

「そうだね、ちょっと複雑でさ」

「告白してみればいいじゃないですか」

「いや、付き合ってはいるんだよ。もう二年もね」

後輩がしばらく黙ってしまったのは、カリカリしたたこ焼きの最初の一個のあまりのうまさに感激したからだけではないようだった。

寝相が悪いせいで、僕は時々ベッドを一人で占領してしまうらしい。そうなると後輩はこそこそと抜け出してどこかに行ってしまう。僕はそのことにドアが閉まる冷たい音で気づく。僕しか存在しない部屋、でも僕の居場所ではない部屋。布団を直して、ちゃんと右半分におさまるように寝てみるのだけれど、そんなことをしてももちろん後輩は帰ってこない。

僕のものではないあらゆるものに囲まれることに耐え切れず、一度その部屋を思いっきり散らかしてやったことがある。でも結局次の朝の僕の行動といえば、後輩が帰ってこないことを祈りながら大急ぎで部屋を片付けることだった。完璧に元通りにすることができることに気が付いて僕は少し愕然とした。こんな風に他人の部屋に慣れてしまったのは、これが初めてだったからだ。そしてその他人というのは、家族でも恋人ですらない、ほんとうにただの他人なのだ。

帰ってきた後輩は、抜け出したことについて特になんのコメントもせず、遅めの朝ごはんを作ってくれる。もちろん僕もなにも聞かずに味噌汁をすする。これはたぶん後輩が作る二度目の朝ごはんなんだろうなあ、と思って少し悲しくなる。でも二番目同士だからこそ、僕らはこうやっていつまでもじゃれあっていられるのだ。

ところがその日、後輩は帰ってこなかった。昼になっても帰ってこなかったのは初めてだ。仕方なく僕は遅めの昼ごはんを食べに出て、テレビゲームをやりながら夜を待ったのだけれど、やはり後輩は戻らなかった。

夕飯はピザをとった。出るのも億劫だったし、後輩がいまにも帰ってくるかもしれないと思って落ち着かない気がしたからだ。

住所がわからなかったので、そこらへんにほっぽりだしてあった学生証を見た。眼鏡をかけた神妙な顔つきからは、とてもセックスの時の顔は想像できなかった。そこに載っていた名前は、僕が思っていたのとは全然別の名前だった。名前を呼ばない習慣はほんとうによく役に立つのだ。でも携帯のメモリーにくらい「大阪」とか「テニス」とか「ピンク」とかいう便宜的な名前だけでなくて、きちんと本名を入れておくべきなのかもしれないという気もする。

帰ってこない理由は見当もつかなかった。電話にも出ないし、メールも返ってこない。僕が一体なにをしたというのだろう。事故に巻き込まれた可能性もあるにはあったが、それは楽観的にすぎる憶測というべきだった。前日の出来事を何度頭に描いても、思い当たる節はない。

敢えていつもとの違いを探すなら「お前って、彼氏とかいるのか？」というその一言だけであり、そのあとの彼女の甲高い笑い声だった。

だいたいピザの宅配便と一緒に、後輩は現れた。僕がピザの一口目をかじろうとしていると、台所でサラダを作り出した後輩が、背中を向けたままこう言った。

「わたし、旅はやめることにしました」

「旅？」

「そう、心の旅」

「おうちに帰るの？」

「そう、それもいますぐね」

僕が黙って食べていると、彼女が叫んだ。

「いますぐって言ってるでしょ！」

「急にそんなこと言われても。その、まだピザも残ってるし」

「このサラダ先輩のために作ってると思ってるんですか？これ自分で食べるんですよ。ピザだけじゃ栄養偏っちゃうから」

ということは、後輩はこのピザを夕飯にするつもりなのだ。俺の夕飯をどうしてくれるんだよ！と叫んでやろうと思ったが、やめておいた。僕は黙って立ち上がり、荷物をまとめた。その間、彼女の背中は熱心にサラダを作っていた。

出て行くとき、なにか言うべきか迷ったけれど、結局なにも言わなかった。後輩は、もちろん追ってこなかった。僕も振り返らなかった。ピザのにおいだけが、いつまでも鼻に残っていた。

それから試験が始まるまで、僕は誰ともデートしなかった。全ての授業に出て、友達に驚かれた。僕はめったなことでは学校に行かないタイプだからだ。

でも、さすがにもう試験が近いからな、と言うとみんな納得してくれた。本当に納得したのか納得したふりをしたのかわからないけれど、納得なんてしてほしくなかった。

佳奈にも連絡をとらなかった。佳奈の方から連絡が来るかと思ったけれど、全く音沙汰なしだった。そういえば、連絡をとるのはいつも自分の方からだった。僕が会いたいと言わなければ、彼女は僕のことなんて思い出しもしないのかもしれない。

語学のテストを受け、出さなければならないレポートをきちんと仕上げ、2つしかない期末試験を受けると、僕は完全に自由の身となった。自由とはしかし、なにもできないのとほぼ同義だった。

することがなかったので一人、旅に出た。型にはまりすぎていて嫌だったけれど、このまま東京にいたら本当に自分が腐ってしまいそうだった。ふてくされる、という意味ではなくて、暗く湿ったところで木が朽ちていくように、文字どおり腐ってしまいそうだったのだ。

行き先は決めなかった。これまで行ったところのないところに行こう、と思った。行ったことのないところに行くのは実に簡単なことだった。僕は寒いところが嫌いでいつも西の方にばかり行くのだ。だから僕は向かった。北へ。

どれだけの間、民宿の畳に身を浸していたのだろう。僕はずっと天井をみていた。もちろんそこに天井はある。でもなにも見えなかった。音も色もない世界で唐突に、携帯電話が空気を震わせた。

見えないモノを見ようとして望遠鏡を覗き込んだ

静寂を切り裂いていくつも声が生まれたよ

久々にきく『天体観測』は、佳奈の着信音だった。決して押し間違えないように、ゆっくりと通話ボタンを押した。僕のもしもし、に少し間をおいてから聞こえてきた声はなぜか、佳奈ではなかった。

「もしもし」

「佳奈？おい佳奈じゃないのか？」

「佳奈さんは死んじゃいました」

「死んだ？どうして？」

「わたしが殺したからですよお」

誰だお前は！と叫びそうになって、気が付いた。この声は後輩だ。

「なんで殺した？」

「なんでって言われても…。先輩が佳奈さんを殺せって言ったんじゃないですか」

「いつそんなことを言った？俺はそんな覚えはないぞ。大体、なんでお前は俺の付き合ってる女が佳奈だって知ってるんだ？」

「それは、ものの見方があまりに一面的に過ぎます。どれだけ言ってもわからないこともあれば、なにも言わなくたってわかることもあります」

気だるく甘い後輩のしゃべり方が突然、緊張感を持った早い口調になったとき背筋に寒いものが走り、僕はなにも口を挟めなくなった。彼女のセリフは僕の質問の答えでは全くなかったけれどそれを指摘する余裕なんてとてもなかった。

「先輩と寝ていると、わかります。この人はこの場では女の子が求めているものを過不足なくあたえることができる人なんだって。でもそれはだたこの場だけのことなんです。先輩は、先輩のいないところではなにも与えようとしないんです。そんな風に、即物的に扱われてきた女の子の存在を、わたしは感じることができます。女の子たちはみんな、そんな扱いに傷つくわけでも不満なわけでもない。そのことは先輩のとくちょう一長いほうの特長ですよ一で、最大の欠点でもあります。だって先輩は、そういうその場だけの付き合いになんて満足していないからです。いないところでもなにかを与えてくれる女の子をいつだって求め続けているからです。

「佳奈さんにもたぶん先輩は、いないところではなにも与えていないし与えられてもいません。でもそれを与え合えるような予感が先輩を佳奈さんに執着させています。佳奈さんもそんなことくらい分かっています。でも佳奈さんは思うんです。『わたしには与えることのできるようななにかなんて持っていない』って。先輩は、そういう風に思わせるようなところがあるんです。世界が完結しすぎているというか、とにかく誰かが割り込む隙なんてなんもないように見えるんです。だからきっと佳奈さんはわたしに、殺してって頼んだんです」

佳奈が後輩に殺してほしいと頼んだ？さっきは僕が頼んだと言っていなかったか？

「先輩はいま、さっきは俺が頼んだって言ってたのに、と思いましたね？そのくらいのこと、言わなくたってわかるんですよ。だから先輩はものの見方が一面的に過ぎるんです。ものごとはどんなことだって常にたくさんの面を持っています。ある面では先輩が佳奈さんを殺し、ある面では佳奈さんが佳奈さん自身を殺し、ある面ではわたしがわたしの意志で佳奈さんを殺し、ある面では佳奈さんはまだ元気に生きているんです。結局どれだって同じことなんです。あとは先輩がどう考えるか、ただそれだけのことなんです」

後輩は一気にまくし立てると、もうなにも言うことはない、というように黙りこくった。

佳奈の部屋が目の前に現れた。佳奈は窓に向かって立っていて、僕はガラスに映る彼女の顔を見ることができる。髪はもう何日間も洗っていないようにばさばさで、目は赤く、顔は腫れていた。こんなひどい表情の佳奈は見たことがない。僕は彼女に近づこうとするが、金縛りにあって動けない。部屋の入り口に突っ立って佳奈を見ていることしかできない。

そうこうしているうちに後輩が入ってくる。僕はそのことを必死に佳奈に伝えようとする。佳奈は全く気づかない。後輩はどこで手に入れたのか、銃を持っている。両手でそれを構え、狙いをつけると、音もなく弾が発射され佳奈の頭にめり込んだ。佳奈は立ったまま動かない。でも僕にはわかる。彼女が間違いなく殺されてしまったことが。わかるはずなのに、どんな感情も沸いてこない。空っぽの心で僕は死んでしまった佳奈を見ている。そういえば、後輩はもうどこにもいない。意識がなぜか急速に薄れていく。悲しくも、暖かくも、辛くも、幸福でもない。五感が完全に失われている。僕は、無だ。

場面は再び畳の部屋に戻っている。僕は我に返って、電話に向かって叫ぶ。どういうことだ！と。しかし受話器の向こうには誰の気配もない。おい！ともう一度叫ぶがやはり誰にも届いていない。電話の画面を見ると真っ暗だった。部屋も、もうほとんど闇に包まれようとしていた。

夢をみたのだ、とようやく気が付いた。そもそも東京を出るとき僕は携帯の電源を切ったのだし、ここに着いたときにもそれを確認したことを思い出した。

僕は、僕自身の脳が夢の中で後輩に言わせたことについて考えていた。与える与えられるとか、そんなややこしいことのために僕は佳奈といるのだろうか。

佳奈が生きているという保証は確かにない。もういつから佳奈の声を聞いていないのだろう。確か、前に会ったのは一ヶ月前だ。そのとき佳奈はひどく疲れた顔をしていた。僕にはその顔をどうしてやることも、できなかった。

なぜ佳奈なのだろう。後輩でもほかの女の子でもなくて、なぜ佳奈なのだろう。ものの見方が一面的に過ぎるんです、と後輩は言った。その場で過不足なくなにかを与えてあげることができないからこそ佳奈なのかもしれない、とその時ふと思った。勢い余って与えすぎちゃったり、なにをしてあげればいいのかわからなくて途方にくれてみたり。そして欲しいものがもらえなくてダダをこねてみたり。

そういえば、ほかの女の子には、特別なにかして欲しいなんて思ったことは一度もないような気がする。佳奈だったらつぶれるほど抱きしめたいし抱きしめて欲しいし、頭をなでてあげてなでてもらいたい。でもじゃあそれがなんでなのか、と言われたらやっぱり僕にはわからなかった。

携帯の電源を入れてみた。部屋がそこだけふわっと明るくなった。時計表示は八時半、もう夜だ。念のためにメールを問い合わせてみたけれどやっぱり一通も来ていなかった。

暗闇の僕を月が照らしている。星が見える。遠くまで来てしまったのだな、とその星に思った。星といえば、望遠鏡をのぞいてみたらどんな風に見えるのだろう。このまま拡大しないほうがいいような気が、なんとなくする。

それから佳奈が望遠鏡を担いでいる図を想像してみて、可笑しくなった。お世辞にも行動的とは言えないあいつが大げさな荷物をしょって走ってきたら、星が流れたっておかしくはない。もし星が流れたなら、僕らはなにを祈るのだろう。

佳奈とすごした日々を振り返ってみる。とてもじゃないけれど僕は信用に足る人間とは言えない。暇を見つけては浮気をして、浮気とまで行かなくても女の子と遊んで。でもそういう人間だからこそ保証できる何か、というものだってある。

「一途」な人間を僕は信じない。だってその人はなにゆえに「一途」なのだ？きっとその人は、ニッポンでは人は決まった一人の相手としか寝てはいけない、と決まっているから一途なだけなのだ。そんな人に限って、新しい魅力的な相手を見つけたら、いまの相手を平気で捨ててしまうだろう。

平気なんかじゃない、と言うかもしれない。でもそんな傷つきごっこはもう見飽きた。いったいどこの誰が、本気で好きではない相手が傷つくのを、心から悲しむことができるというのだ？本当に平気ではないのなら、もともと付き合うべきなんかじゃなかったのだ。人はそんな簡単に傷つかないから、誰かとだけ付き合ったりなんて芸当ができるのだ。馬鹿馬鹿しい。

正直に告白すれば、僕はいまだに「付き合う」ことと「結婚する」ことの区別がつかない。結婚するつもりもないのに、なんでわざわざ「君だけと愛し合うよ」みたいな約束ができるのだろう。恋をしたいだけなら、なに一つ約束なんてする必要はないのに。誰か一人とだけしか同時に恋ができないなんて、そんなことはありえないのに。

いくつもの関係性の中から、僕は佳奈との関係性が最良のものだと思う。そして時がたっても、その関係性は少なくとも、最良なもののうちの一つではあり続けるだろう。どんな形をとるにせよ、僕はその関係性を大事に守り続けるだろう。

僕が言えるのはそれだけで、佳奈に提示できるのはたったそれだけのことだ。佳奈が愛してくれるようになるのはもっとずっと先かもしれない。あるいは、そんな

ことは起こりえないのかもしれない。それでもいい。よくよく考えてみればそんなのはごく些細な問題でしかないのだから。

東京に帰ろう、と思った。もうここにいる意味なんてなに一つない。まだ広げていない荷物を手に取った。階段を降り、目立たないように宿を出る。あとで僕がいないのに気づいて慌てふためく人たちの姿を思い描いて実に愉快な気分になった。その頃には、頓珍漢な名前と偽の住所しかわからない、未払いの一人客はもう列車の中だ。

『天体観測』で今度は飛び起きた。電源を入れたまま、マナーモードにするのをすっかり忘れていた。周りの乗客が一斉に眉をひそめている。

僕はあわててデッキに走り、電話をとった。今度は間違いなく佳奈の声だった。

「元気？」

と佳奈は聞いた。

「うんついさっき元気になったよ」

と僕は答えた。

「ごめんうるさくてよく聞こえないや」

と佳奈は大きめな声で言う。

「いまね、旅から帰る途中なんだ。元気だから心配しないでいいよ」

と僕は負けじと叫ぶように言った。

「じゃあ着いたら電話して」

「うんわかった。ねえ、佳奈？」

「なに？」

「いや、なんでもない。またな」

「うん、じゃあね。…あ、ちょっと待って！」

「なに？」

「雨降ってる？」

「え、今日朝からずっと晴れてるじゃん」

「そ、そう」

「どうして？」

「ううんなんでもない。じゃあ待ってるね」

「うん、バイバイ」

今回は夢ではないという確信があった。いくらなんだって、夢か夢じゃないかくらい僕にだってわかる。けれども、本当はそんな単純なことでもない。

この世界というのが精神世界だとするならば、僕らが感じたことはすべて現実であり、だから夢だって現実のひとつには違いないのだ。つまり、いまこの現実でも、夢の内容をしっかりと覚えていて、その記憶が現実における感情や行動にしっかりと結びついているなら、夢だって結局は現実なのだ。だから僕らは同じところに生きているようでいて、実はまったく別なところに生きている。

席に戻る途中、ビニール傘を持っているサラリーマンが何人かいて僕はそれを不思議に思った。雨が降っているかどうかを佳奈に尋ねられたのも気になった。シートに身を沈めて外を見る。暗くてよくわからないけれど、やっぱり雨なんて降っていない気がする。

たぶん天気予報で夜は雨になります、とでも言っていたのだろう。あるいはひょっとしたら、彼らは夢を見たのかもしれない。夢の中では雨が降っていて、それと混同して傘を持ってきてしまったのかもしれない。

ある面では佳奈さんはまだ元気に生きているんです。結局どれだって同じことなんです。あとは先輩がどう考えるか、ただそれだけのことなんです―そう後輩は言った。

この現実では佳奈はまだ生きているし、つぎ夢をみるとき僕は佳奈の隣にいるだろう。帰る場所があるということは、とても素敵なことだった。ひとはそのことを確認するために旅に出るのではないか、と時々思うことがある。

帰り着くまでもう決して夢をみないように、僕はしっかりと目を開いて起き続けた。闇を駆け抜けてきた本日最後の新幹線はいつの間にか、ホテルのネオンが目立つ街を走っている。

了

Folio vol.9

Out Of……

去る物語

朝倉海人

あるところに緑色のカラスがおりました。

緑色のカラスが住んでいるところは都会からは程遠く、家もまばらな山奥にありました。山に囲まれた盆地の中で皆、長閑に暮らし、畑や田んぼを耕しながら生きておりました。

カラスはフランドアと呼ばれておりました。

その昔、この盆地の首領さまが病に倒れたことがありました。右往左往するばかりで、何を施して良いのか見当もつきませんでした。「馬の肉を食べると治る」と言う者もあれば、「ご先祖たちに祈れば治る」と言う者もあり、また、「いやいや、何もしないのが一番じゃ」と言う者もおり、結論が出る様子はありませんでした。二つ夜を越す頃には首領さまの様子も次第に悪化しているのが手に取るようにわかりました。

皆、ただ混乱するばかりで、正しいと思うことを自分勝手にそれぞれやっておりました。一族で天に向かって祈る者、自分が身代わりにと自ら死を選ぶ者、絶食する者、馬を殺して食べさせようとする者……などなど様々なことをしておりました。

しかし首領さまは一向に良くなりませんでした。

そんな時、ひとりの年を取った女が人々に言いました。

「古来より伝わる緑色の鳥の羽は病を治すという」

年を取った女は低いしわがれた声で言いました。女は初めからそのように言っていたのですが、皆、耳を貸さなかったのです。年寄りの戯言だろうと思っていたのでしょう。しかし、皆が思いつくこと全てやっても首領さまは良くなりません。そこで、最後の賭としてこの年寄りの言う通りしてみようということになりました。

緑色のカラスは昔も今も盆地の東側にある山の頂に住んでいました。東の山は他の方位の山々とは様子が異なり、背も高く、険しいことで有名でありました。下手をすれば命を落とすやもしれません。

誰しもが黙りこくって、しんと静まりかえる小屋の中で、勇気ある一人の若者が名乗りを上げました。その若者がフランドアでした。

フランドアは小さい頃、首領さまに可愛がられていたことを親などから教えられていたので、恩返しがしたかったのです。

翌日、まだ陽が昇らないうちにフランドアは火打ち石と弓矢、少しばかりの食料を持って東の山を目指して旅立ちました。

フランドアの母親は涙を堪え、人前では決して泣きませんでした。父親はいつまでもフランドアの背中を見つめていました。背が見えなくなっても、じっと視線はそのままでした。

夜になりそして朝になり、また夜となって朝になりました。何度も夜と朝は繰り返しました。しかしフランドアは一向に帰ってきません。

フランドアの家は日が経つにつれ、生気がなくなっていくように静まりかえっていきました。

ある日、空に緑色のカラスがやってきたのをある者が見つけました。盆地に住む誰もが家を飛び出し、空を見上げました。

緑色のカラスは上空を旋回していました。

すると、空から羽がひとつゆっくりと落ちてきました。ひらひらと舞い落ちるその羽を皆じっと見つめていました。羽はちょうど、首領さまの家の前に落ちました。わっという歓声と共に集まると、早速、羽を首領さまにかざすとみるみるうちの首領さまは快復していきました。

皆、あのカラスはフランドアの生まれ変わりだと言い、そのまま緑色のカラスの名前となったのです。

あの日からフランドアは東の山から西の山へ、西の山から東の山へと飛ぶことを日課としていました。一種の儀式のようなものでした。盆地に住む人々はあの日から毎日、フランドアの姿を確認できました。一体、フランドアが何年生きているのか誰にもわかりません。首領さまは既に亡く、勇気ある若者――フランドア――を見知っている者も、もう遠い昔に姿を消していました。今、フランドアを見ている者たちは彼らの子孫や、その話をただの神話だと思っている者たちばかりです。フランドアもきっと何代目かのフランドアなのだろうと思っておりました。

フランドアは、そんな地に住む者たちの思いを知っていました。自分が馬鹿にされている――というのは言い過ぎにしても、軽んじられている――ということはわかっていました。フランドアは他の動物の言葉がわかったのです。フランドアは賢い鳥でした。そんな半ば悪意に近いものを持っている者に対しても寛大な心で、見守ることにしたのです。

上空から見渡す彼らの生活はフランドアにとって興味深いものでした。あくせく働く彼らは何年経っても何十年、何百年経っても一向に裕福な生活になる様子はありませんでした。しかし、彼らは長い時間同じことを繰り返していたのです。フランドアにはとても不思議でした。もしかしたら、同じことをずっと繰り返すことでわかることがあるのかもしれない、フランドアが山を往復するようになったのはそれからでした。ですが、未だに何もわかりませんでした。もしかすると何もないのかもしれません。与えられた箱にいつも中身があるとは限りません。綺麗な包みで覆われていても中身が大したことのないものだということもあります。しかし、何かわかるにはもっと長い時間がいるのかもしれません。フランドアは続けることにしました。

しばらくすると、彼らたちをフランドアの住む東の山で良くみかけるようになりました。フランドアは初め気にかけてはいませんでした。しかし、どうも彼らはフランドアを捕まえようと画策しているようでした。フランドアはそのことを知った時、怒りはしませんでした。悲しみもしませんでした。

ただ、その昔、ある若者が自分の前に姿を見せたことを思い出すのでした。あの時、若者は既に体中ボロボロで、這ってフランドアのいる頂上までよじ登ろうとしているところでした。フランドアは山の様子を見回っている時で、倒れている動物に興味を持って近づいたのです。

フランドアは話しかけました。すると若者は少し驚いた顔を見せました。そして、「緑のカラスか」と言ったのを覚えていました。フランドアは若者を足で掴むと、自分の巣まで運んでいきました。途中重さでふらいたりもしましたが、なんとか辿り着くと、彼を助けてやろうと自分の羽にくちばしを入れた時です。

「その羽は私にではなく、村の首領さまに差し上げてくれないか」

彼はそう言うと、そのまま目を閉じ、全身力が抜けたようにだらりとなりました。フランドアは彼の言った言葉を理解できました。フランドアはあらゆる言葉に精通していたからです。しかし、彼の言葉の意味はわかりませんでした。自分ではなく他者に羽をあげてくれと言われたことは今まで一度たりとも無かったからです。フランドアは言われたままに羽を村に落とし、そこから去っていきました。

好意すら抱いていた彼らの子孫が、今敵意剥き出しの顔をして山を登っているのです。若者が命を賭けて登ったこの山も、人間たちの新たな道具が登ることを容易にしていました。

フランドアはそんな彼らたちの様子をじっと眺めていました。

ある日、いつもの観察を終えて寝床に帰ってくると、彼らが待ちかまえていました。フランドアは何も言わず羽をたたみ、彼ら一人一人を見定めていました。

「これが伝説のカラスか」

「羽を手に入れれば、俺も不老不死になれる」

「俺が最初にもらう」

口々に彼らは言い合い、それぞれ手に持った道具を準備しました。投げ縄、弓矢、松明をかざす者もいました。

フランドアはその様子を目を逸らすことなく見続けました。そして、こう言いました。

「僕の羽に何か特別の力があると思っていたら、それは思い違いだ。君らの遠い遠い先祖の病が治ったのは僕の力なんかではない。勇気ある一人の若者の力なのだよ。だけれども、君らにそう言っても信じてはくれまい。抵抗しないから、さあ、殺したまえ」

フランドアの言葉が終わってもしばらくは、誰も動き出しませんでした。気圧されたのでしょう。ですが、それはすぐに崩れてしまいました。弓矢を持っていた男が矢をフランドアめがけ射ったからです。彼らはそれを合図に一斉に飛びかかりました。

彼らが立ち去った後、フランドアの体には緑の羽はひとつも残っていませんでした。ぐったりとしていた彼は、もう息をしているとは思えません。

その光景を見ていた天は大いに悲しみ、嘆きました。その泣き声は遠くの集落まで響き、その涙はそれからひと月止みませんでした。気圧されたのでしょう。ですが、それはすぐに崩れてしまいました。弓矢を持っていた男が矢をフランドアめがけ射ったからです。彼らはそれを合図に一斉に飛びかかりました。

彼らが立ち去った後、フランドアの体には緑の羽はひとつも残っていませんでした。ぐったりとしていた彼は、もう息をしているとは思えません。

その光景を見ていた天は大いに悲しみ、嘆きました。その泣き声は遠くの集落まで響き、その涙はそれからひと月止みませんでした。盆地に住む者たちはその涙で洗い流され、東の山は地響きをたてながら盆地を埋めてしまいました。

生きながらえた他の者たちも、自分たちの姿を見て驚きました。なんとも猿そっくりの姿に成り果てていたの

Folio vol.9

photo : kaori inbe

Out Of……

です。二本足で立つ彼らは自然から追い払われていきました。

全ては昔々のお話なのです。

了

詩

詩のは音楽である。言葉を紡ぐという行為は身体的な欲望とともにある。
だから今回、CD のブックレットの形にしてみた。この PDF とは別に CD ケースに入る
大きさの PDF も作成したので、DL して切り貼りし作ってみるのもまた一興だと思う。

宿命のように旅人を愛す
ニィナ チカ

その胸にひかっていたのはいつも　さよなら

いつだってみんな、別れを心に秘めていて
告げるのを、今か今かと待ち構えている
酷いことなんかじゃなくて　きっと普通のこと

あたしはたくさんのさよならをもらいすぎて

自分のさよならを失くしてしまったから

誰にもさよならが言えないんだ

誰にあげるさよならも持っていない

ここにいるんだよ？

何も終わらない、全部繰り返し
生きている限りあたしは
こうやって、痛い痛い、血まみれのさよならをもらい続けて
こうやって、泣きながら、笑いながら、それをゆるし続ける

ねえ
行ってしまうのなら　せめてこの記憶を　この想いを
一緒に持って、行ってください
ここに苦しみだけ置いていかないで
ここに愛しさだけ　置いていかないで

光らない現実、未来、秘密、
ほんとうはいつだって
あなたの帰ってくる場所が、あたしであると信じて　いたかった。

果てに夢を見せたまま堕ちる　太陽

あなたを愛そうとした黒い腕は、先から焦げてぼろぼろに崩れた
伸ばした爪は　次々に折れて
伸ばした髪は　はらはらと抜けて
あたしは魔女になりきれなかったことを悟った

「太陽の色を知ってる？」
あなたは呟いて　そこから飛び発った
残像、ゆっくりと、遠ざかる　あなたの　哀しそうな　笑顔

必要とされたいばかりに背負う愛は重く、汚れていた
振り上げられた腕、切り落とされた想い、
まばたきの瞬間に居なくなって
あたしあなたに大好きだよって言って欲しかったけれど
誰よりも大切にされたかったけれど

望むのが怖かった

足枷がついているあたしを　いつかあなたは置いていくと知っていたから
この鍵をあなたは持っていないと　気付いて、いたから
創ろうとも思わなかったよね？
こんなに簡単に　開けられたのに

奪いきれず　騙しきれずに泣いた魔女
あたしの居ない幸せを選んだ　あなたの目に
見えているのは　何色の太陽？

記憶に残せた　想いの欠片で

いつも笑ってて。

あなたがあたしの手の届かないところでも
新しい朝を迎えて、おいしいものを食べられて、安心して眠れて、
そういう日々を愛しく幸せに感じることができるのなら、
それでいい。それでいいんだ。

ほんとうは時間なんて何の味方にもならないんじゃないかっていつも疑って
あなたの面影がここからいなくなるのに、何年かかったとしても
あたしが消えるのなんて、一瞬で
そう、たった一瞬で消えてしまえるのは、いつだってあたしの存在で
ああ、あなたの遺した言葉たちがまだまだあたしから離れられずに纏わりついていて、
愛しくて仕方がない。

どうしてこんなものを遺したの？
どこに行くつもりでこれらをここに置いておいたの？
こんなにもあなたの言葉たちはここに留まっているというのに
あたしの言葉はなにひとつ、あなたのもとには届かない

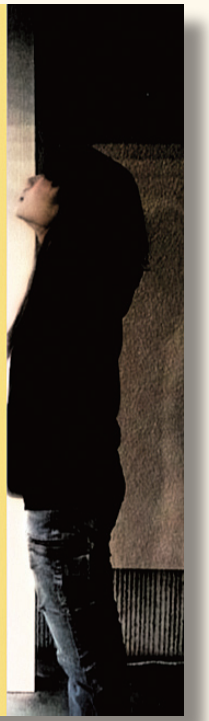
どうか幸せでいて。

ほんとうなら　あたしが与えたい　その幸せでまみれた微笑を　絶やさないで

ほんとうなら　あたしを愛しいと、耳元で囁いてもらいたかったその声を　たいせつに

いつも
笑っていられますように
どうか
幸せでありますように

あなたが時折思い出す、隣に居られたあたしの面影が。



「宿命の様に旅人を愛す」
ニィナ チカ / 夜　泳ぐ

すべての言葉と画像の転載・転用を禁止します。

組曲「旅の夢」
縫坂 疎琅

言葉が音を立てて倒れた日
見渡す景色がとても綺麗だった
全てはあるがままに命を放出していた
僕はこのまま全てを閉ざして生きてゆけると思った

風の味

芝生に立って風に吹かれている
近くには小さな川とも言えない川がある

風の味が昔と違うのは
この土地とぼくが違う時間を過ごしたから

土地の姿は変わった
ぼくの姿も変わった
口笛は吹けないままだし
叶わなかった約束だって覚えているけれど

心だけがそのままだなんてことはないよ

新しくまた仲良くなれるかな
やっぱり馴染めるような味がしたんだ

仲良し橋の猫

仲良し橋の上に猫が居た
二匹 くるくると
お互いを途切れさせないように追っかけあって

春の昼の光
土埃 コンクリート

僕らは名前にくるまれてじゃれあっているだけの猫だな

喉が渇いて
缶コーヒー で 流し込む

白昼の噴水

きらきらと光とともに降り落ちる水
半透明の壁
全ての記憶がその向こうにあるみたいだな

手を伸ばしてももうそこには
何も無い
はっきりと色づいてさえ見えるのに

細かく弾けてきらきらと散る宝物
虹色に腕が濡れた

レシート

公園のベンチに座って
コンビニのレシートを燃やした
何も残らないように

過去のことも今も全てを
忘れるために来たはずだったのに
いろんなことを思い出してしまう

砂の上の燃え滓

こんなはずじゃなかった

長い夢

届くところ
届かないところ
伸ばした手にもはぐれて

輪の切れ目に投げ縄が引っかかって
かろうじてぶら下がった

終わりと始まりの間でだけ
閉じている世界
そしてまた始まる夢の続き

ぼくがいるのはどこなんだろうか
大好きなもので溢れている
悲しみにも感謝して
ここはどこだ
きっと辿り着きたかった場所は胸の中にある
ぼくやきみや誰かの胸の中に
昼の光の胸の中に
暗闇の胸の中に
夢の胸の中に

まだ生きていられる
残酷な

きみの幸せがぼくの長い夢

Out of music in my memory.

旅の夢 :The 真心ブラザーズ「旅の夢」
風の味 :Chocorat「口笛で恋をしよう」
仲良し橋の猫 : ハートバザール「はらいそ」
白昼の噴水 :The Correctors「GIFT」
レシート :The ピーズ「映画 (ゴム焼き)」
送電線の鉄塔と枯れた草叢 :The Jerry Lee Phantom「Dr. Lee Ryder」
ネバーランド : 東京少年「Harmony」
長い夢 :YUKI「長い夢」

送電線の鉄塔と枯れた草叢

送電線の鉄塔の足下に立つ
枯れた草叢

見上げた空に張り巡らされた
人間の生活のためのインフラ

ここに在る郷愁
僕が小さな頃に覚えたものはつまり
人間と自然の狭間のもの

銃口が光る
強大なものが裏返された

ネバーランド

たよりなくまっすぐに立つ
あの頃のぼく
命の向きを決めず

漂うままに
触れ合うままに
溶け合い
別れ

続く日々の終わりに辿り着く場所は
行きたかった場所なんかではないんだ
ってことに
気づかずに

決して来ることのない世界に帰ろうとして
当たり前のように道に迷ったんだ

遠くの光を道標にしながら
明日へと流されていた
見失わないことだけが力だった

ただ天を向いていた命
まっすぐに

見下ろされたかったんだ

エッセイ

ポツドール potudo-ru を中心に考える演劇とは

いざまん

脚本・演出・役者などの身に携わったことのない自分が、ひとつだけ執着している劇団がある。
『ポツドール』
役者がプライベートを背負ったまま舞台に上がる「セミドキュメント」という表現方法で注目を集めた劇団である。現在はその過程を経て描くからこそ活きるドラマづくりに挑戦しており、4月には『愛の渦』という性欲がテーマの舞台を終えたばかり ….。
彼らは稽古場で、絶えずコミュニケーションすることでそこにいる役者同士でしか発生しないリアルを重ね、そこから派生した人間関係を真摯に追い、題材に対して嘘のない現実を描き切る。できあがった舞台には、自分のこととしては目を背けたくなるものでも他人のこととして見ると笑えてしまう「本当のこと」が見え隠れするせいか、誰かの本音を“のぞき見”しているような快感と後ろめたさが伴う。
ポツドールは本当のことしかやらねーぞ。

■

この布石を置くために、何人の役者がその身を捧げたことだろう。役者は、実験台という意味での犠牲者だ。そう言い切るには多少の抵抗を感じるけれど、しかしながらそういった一面も、少なからずあるのではないか … と、ハタから見ているだけのあたしは勝手に思ってしまう。
但し、それは決して負の部分を現しているのではない。
およそ2時間ある舞台のなかに潜ませた、たった数分のあいだに終わる真の意図を伝える作業に没頭する彼らの姿には、いち役者としてポツドールが目指す芝居に挑む、前向きな姿勢がうかがえるからだ。
ポツドールが粒選りの役者を投入しているという見方ではなく、一筋縄ではない役者がポツドールに集まってくる。
そういう位置に、ポツドールはもう、いるのだと思う。

そして、あたしのような一般の目から小劇場界に至るまでそういった「事実」を浸透させた功績は、デカい。

■

演じるとは、何だろう。
「どんな役作りをしましたか?」そう質問すると、それは必要なかったと応える役者が大多数。決められた役に自分が合わせていくのではなく、あくまでも自分にその役を合わせていくのだと役者は言う。
例えば、情けないサラリーマンを演じるのではなく、自分がサラリーマンを演じたら情けない部分がでてきた、という感じ。「彼にその役を当てればこちらの思惑通りになるのではないか」と推測する力が演出家にあるのが前提で、あとは周りと一緒に調理していく。また、これはセミドキュメントを確立させる以前から続けている手法なのだが2回演じてみて自然にできないと脚本ごと書き換えてしまう。

役者の腕をみて脚本家が折れるとか、誰にでも柔軟に対応できる演出家というよりは、役者が演じてみて気持ちわるさ、ぎこちなさを感じるような人物像はリアルではないから、虚実を明確にさせるために書き換える、というニュアンス。
「できないか。じゃあ、変えます」
という演出家の態度が、うまく演じられない自分へのやさしさや気遣いだと思い込んで落ち込む役者もいれば、負担に思わず、任せられている感があっておもしろいと言う役者もいる。

○○○みたいな空気を作ってみて、このシーンにうまく繋がる雰囲気にして、といった、次から次へ提案されるシチュエーションの変化に自分の日頃の経験を反映させられないひとは、おそらく、ポツドールでは泣きを見ることになる。役の資本は自分自身。
合わないもの、できないものが出てくるたびに見付かる個性を見て見ぬフリしようとするひとは、ポツドール向きではないように思える。

■

こういった役者に対する演出のテイストが確立されていることに加えて、ポツドールの場合は、次に、どんな芝居をやるのか分からないのがポイント。
誰も想像つかないし、憶測は必ず裏切られる。——だから、観る。この連鎖を知らない初見の方が、ひとつのパターンだけを見てファンになると、次公演でぼろくそにけなして帰る場合がある。しかし、批判するひとの大半は名前や肩書きを明記した上で、期待しているから進言するのだと述べる。アンケートの感想欄では、「ポツドールらしさ」について言及しているひとが、わりと多く見られるが、具体的なことを出さずに、ただ一行「らしくない」と書かれると、何をやるのか分からないということが分かっている劇団に、何を求めているのかふしぎに思ってしまう。皮肉ではなく、それについてはとても興味がある。
また、無記名で「つまらない」とだけ言い残すひとに訊きたいのは、何が退屈だったのか自分で整理できているか、ということ。

ポツドールは観客に、自分がのぞき見している場所に当事者として居合わせることになったらどう思うのかを連想させる。そして、あんなこと云われたら、されたら、絶対に嫌だ、回避したい!と思わせる。さらに、往々にして後味のわるさを残して幕を下ろす。その後はカーテンコールがあっても一切、舞台には顔をださない。弁解や説明を求める矛先は、のぞき見た自分に向けるべきだと言われているような気分にすらなる。

気まずい雰囲気と、それを打破するきかっけ、空気を読めなかった人物が取り残されるさまや、そんなひとを見て自分の立ち位置を確認する人物など、共感できる痛々しさを持った「へこみ」と、そこから「脱出」するための装置が、至る場面に仕掛けられている。しかし、ストーリーのなかに分かりやすい希望を置いて見せ付けることはしない。どうしようもなく滑稽な人間たちがこぼす台詞や些細な行動から、自分なりに希望に繋がる「何か」を拾い、勝手に咀嚼して、飲み込めればすっきりするし、喉に引っ掛かったままなら不快なまま。

そう聞くと厄介な演劇だと思われがちだが、リピーターが多いところを見るとそれって案外クセになる作業なのかもしれないと思えてくる。

■

こういうのって、嫌だよねえ。情けないよねえ。でも、分かるよねえ。と、つい隣のひとと会話したくなるシチュエーションばかりなのだが、ひとに関心を寄せるあまり残酷になってしまう人間の貪欲さと、愛情。無関心なあまり誰かを傷付けてしまっている人間の純粋さと、裏切り。こういったものに対する感覚のすべてを他人と共有できるわけは、ない。
どうしても、自分の経験と照らし合わせて、「すき・きらい」合致できたものから飲み込んでしまう。… やはり、自分という枠の大きさやカタチ次第で、芝居から取り込むものも、見落とすものも違うのである。ロックに音楽としての普遍の定義がないように、ポツドールにも劇団としての定義はない。あるのは、リアル性だけ。

ポツドールに執着するあたしが思う「演劇」とは、自分という枠からの脱出の試みを行うことで、どうしても脱出できない枠の重みを認知する作業である。

第13回公演
愛の渦

ポツドール
potudo-ru
http://www.potudo-ru.com/

96年12月、早稲田大学演劇倶楽部10期生の三浦大輔を中心に結成された演劇ユニット。
第1回公演から第4回公演まではいわゆる演劇的な過剰なドラマを得意とし、多くの観客から支持を得る。
が、2000年7月、第5回公演『騎士(ないと)クラブ』で、それまでの作風を一変させ、演劇的なものを最大限に排除したドキュメンタリータッチの作品に挑む。「リアル」を徹底的に追求したこの作品は「セミドキュメント」と称され、これを機会にメディアに大きく取り上げられるようになる。
そして、第6回公演『身体検査』では舞台上の完全ドキュメントを実行。役者が一切、演技をせず、プライベートを背負ったまま舞台に上がるという表現手段は、多くの賞賛と批判を同時に受け、小劇場界に衝撃を与えることになる。
その後も「リアル」にこだわった作品づくりに努め、公演の度にセンセーショナルな話題を巻き起こしている。
また、初めての映像作品『はつこい』が第25回ぴあフィルムフェスティバルで審査員特別賞を受賞。「演劇」のみならず「映像」での活動も期待されている。
が、2000年7月、第5回公演『騎士(ないと)クラブ』で、それまでの作風を一変させ、演劇的なものを最大限に排除したドキュメンタリータッチの作品に挑む。「リアル」を徹底的に追求したこの作品は「セミドキュメント」と称され、これを機会にメディアに大きく取り上げられるようになる。
そして、第6回公演『身体検査』では舞台上の完全ドキュメントを実行。役者が一切、演技をせず、プライベートを背負ったまま舞台に上がるという表現手段は、多くの賞賛と批判を同時に受け、小劇場界に衝撃を与えることになる。
その後も「リアル」にこだわった作品づくりに努め、公演の度にセンセーショナルな話題を巻き起こしている。
また、初めての映像作品『はつこい』が第25回ぴあフィルムフェスティバルで審査員特別賞を受賞。「演劇」のみならず「映像」での活動も期待されている。(紹介文:サイトより引用)

"いろは"の先のCSS 第9回

徳保 隆夫

今回のテーマは「プルダウンメニュー」です。プルダウンメニューがデザイン要素として素晴らしいかどうか、という問題はさておき、CSS を駆使してこれを実現する方法について考えて見ます。

2つのプルダウンメニュー

一般にウェブデザインの世界でプルダウンメニューと呼ばれるデザイン要素は、大きく 2 種類あります。

フォーム部品の select 要素 + option 要素

```
<select>
<option>select from here</option>
<option>a</option>
<option>b</option>
<option>c</option>
</select>
```

select 要素はフォーム部品なのですが、W3C の勧告ではデザイン要素として用いてもよいことになっています。多くの選択肢をコンパクトの表示できる特徴があるので、様々に利用されています。「本来、ウェブでプルダウンメニューといえばこれのことだ!」という主張も目にしたことがあります (私は賛同しません)。

ソースも単純明快だし、なかなかよさそうに見えますが、このタイプのプルダウンメニューには、ひとつ大きな欠点があります。option 要素はテキストしか内包できないのです。a 要素もダメなんですね。

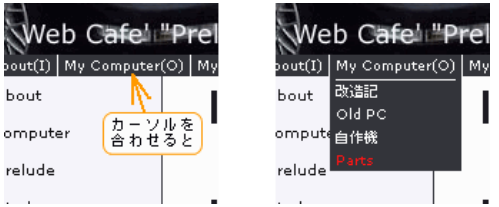
したがってナビゲーションリンク群を select 要素で置き換えるためには、選択された option 要素の情報を受け取って、ページ移動などの処理を行う CGI や JavaScript を用意しなければなりません。それは必ずしも困難ではありませんが、非常に不自然な作業には違いありません。単にナビゲーションが画面を占有する面積を減らしたいだけなのに、a 要素や、それを内包するリスト要素を select 要素と option 要素、そして CGI や JavaScript などに置き換えてしまうのですから。

今回、私はこのタイプのプルダウンメニューは解説しません。興味のある方には、以下の記事が参考になるでしょう。

プルダウンメニューを使う
http://allabout.co.jp/computer/hpcreate/closeup/CU20020331A/

リスト要素の装飾を工夫

この記事の読者の方をはじめ、ストリクターの皆さんはナビゲーションリストをリスト要素としてマークアップされていることが多いでしょう。プルダウンメニューも、リストの装飾スタイルをいじるだけで実現できたら嬉しいですよね。




```
<ul>
<li><a href="index2/">About(I)</a></li>
<li <strong>onmouseover="showhide(this)" onmouseout="showhide(this)"</strong>>
<a href="computer/">My Computer(O)</a>
<ul>
<li><a href="computer/tuneup01.php"> 改造記 </a></li>
<li><a href="computer/levinspc.php">Old PC</a></li>
<li><a href="computer/athlon.php"> 自作機 </a></li>
<li><a href="computer/parts.php">Parts</a></li>
</ul></li>
<li><a href="prelude/">My Prelude(P)</a></li>
</ul>
```

ソース (一部改変) と画面写真は **Web Cafe' "Prelude"** (http://web-cafe.biz/~prelude/) のもの。このタイプと似て非なる (主としてマークアップに難がある) プルダウンメニューが世の中には非常に多いのですが、基本的な発想は例示したものと同じ。カーソルを合わせると、隠されていたナビゲーションが表示されるわけです。Flash を使った事例もありますが、見た目も基本的な発想も似ているため、ここでは割愛。

Web Cafe' "Prelude" はアクセシビリティなど諸問題への配慮が行き届いた作例なので、ひとつの到達点として高く評価されてきました。けれども、このソースを調べて真似するのは簡単ではありません。雑誌にもしばしば作例記事が掲載されてきましたが、当然ながら、買わなきゃ見られない。ソースが汚くても、いい加減でもかまわないというのなら、いくらでも作例や紹介記事が見つかるのですが、" いろは " の先の CSS でそれを取り上げるのもいかがなものか ……。

Web 工房きくちゃん (http://www.stylish-style.com/) という Web サイト作成支援サイトをご存知でしょうか ? 初心者から面倒見てくれる親切な解説と、概ね W3C 勧告に忠実なソースの記述を両立させている数少ない良サイトのひとつです。そのきくちゃんが 2005 年 4 月に公開した

99%CSS で作るプルダウンメニュー 1
http://www.stylish-style.com/csstec/ultimate/css-roll-1.html
99%CSS で作るプルダウンメニュー 2
http://www.stylish-style.com/csstec/ultimate/css-roll-2.html

は、まさに私の求めていた解説。2005 年 5 月 8 日に公開されたばかりの画面中央に配置するなど、きくちゃんの CSS テクニックには、" いろは " の先のアイデアがたくさん紹介されています。興味のある方はぜひご一読を。

今回の解説方針

というわけで、「これでお終い」といったら怒られますよね ? ちょっと言い訳させていただくと、最初は自分で全部記事を書くつもりだったのですが、きくちゃんの作例がよくできているので、「結論はこちらをご覧ください」でいいのではないかと。ただ、きくちゃんの記事にはこう書かれています。

かなりデリケートな構造で、ここがこう働いているから、こうなるんだよ。という説明はちょっと難しいです。

ポイントは .main li.off と .main li.on です。ブラウザーによる解釈の違いもろもろを抑えるため、あちこちいじっているうちに完成したものなので、考えた本人もよくわかってないです。

実践では「適当にコピペ」でもいいのですが (少なくとも趣味の個人サイトにおいては)、最初のお勉強では、基本の仕組みは理解しておいた方がよいでしょう。きくちゃんの作例は、かなり作り込まれたもので、最初からきれいにできている反面、記述量が多すぎて何がなんだか分からない。本稿では、中核技術を抜き出して、段階を踏んで理解を深めていただこうと思います。

プルダウンメニュー作成 7STEP

ここでルートを 2 つに分けます。最低限の内容は以下の作例 7STEP に示します。最後まで読み進めば、きくちゃんの 99%CSS で作るプルダウンメニュー 1 に似たプルダウンメニューをあなたも自力で作れるようになるでしょう。

作例 1　http://folio.daa.jp/09/f/I/r01_01.html
作例 2　http://folio.daa.jp/09/f/I/r01_02.html
作例 3　http://folio.daa.jp/09/f/I/r01_03.html
作例 4　http://folio.daa.jp/09/f/I/r01_04.html
作例 5　http://folio.daa.jp/09/f/I/r01_05.html
作例 6　http://folio.daa.jp/09/f/I/r01_06.html
作例 7　http://folio.daa.jp/09/f/I/r01_07.html

基本的には作例だけで話は足りるのですが、本文では補足的な薀蓄を少し書きます。興味のある方はこちらもどうぞ。

:hover と WinIE

:hover 擬似要素は、ふつう a 要素についてのみ用いられます。それはなぜかといえば、WinIE が a 要素以外の要素について :hover 擬似要素をフォローしていないからです。
a 要素はブロックレベル要素を内包できませんので、:hover 擬似要素の使い道といえばたいてい、背景色を変えるとか枠線を変えるといった程度にとどまってきました。けれども、W3C 勧告では、:hover 擬似要素は a 要素専属だなんて一言も書いてありません。本来なら、:hover 擬似要素はどの要素にも設定できるものなのです。
WinIE が未対応なので実際にウェブサイトで用いることはできないでしょうが、:hover によるプルダウンメニューの基本的な考え方を示します。

```
<div>
<ul class="main">
<li class="parent"> ぬるぽ
<ol>
<li> ガッ </li>
<li> ガッガッ </li>
<li> ガッガッガッ </li>
</ol>
</li>
</ul>
</div>
```

このようなリストがあったとしまして、ここに以下のようなスタイルを設定しますと、プルダウンメニューの原型が得られます。

```
div
{height:3em;}
ul.main
{position:absolute; width:100%;}
li.parent ol
{display:none;}
li.parent:hover ol
{display:block;}
```

肝腎なのは強調部分。:hover 擬似要素が有効な場合 (= マウスカーソルが li.parent に重なっている状態など) だけ、子要素の ol 要素が display:block; されるよう指定しています。ふだんは隠しておくわけですね。
ul.main に position.absolute; が指定されているのは、:hover 発動時に他の要素の配置に影響を与えないための配慮です。
div 要素の height:3em; は、ul.main を絶対配置するスペースを作るための設定です。:hover 発動時だけ展開される子要素の ol 要素と異なり、平常時の li.parent が他の要素と重なってしまうとうまくありません。ようは平常時の li.parent を配置するためのスペースさえ作れれば何でもいいのであって、div 要素とか height:3em; といった記述自体に必然性はありません (コピペで動作確認するのに便利な記述を選んだだけ)。

作例「:hover でプルダウンメニュー」　http://folio.daa.jp/09/f/I/r01_a.html
補足 1　http://folio.daa.jp/09/f/I/r01_b.html
補足 2　http://folio.daa.jp/09/f/I/r01_c.html

JavaScript による代替案

作例 7STEP では、JavaScript による代替案により、WInIE でもプルダウンメニューを実現しています。
詳細は作例をご覧いただきたいのですが、要点のみこちらでも紹介しておきましょう。

```
<li class="off" onmouseover="this.className='on'" onmouseout="this.className='off'">
```

この意味は「マウスカーソルがこの li 要素に重なると、class 属性値が 'on' に設定される」。平常時は class 属性値が 'off' ですね。なので、

```
li.parent ol
{display:none;}
li.parent:hover ol
{display:block;}
```

という記述を、

```
li.off ol
{display:none;}
li.on ol
{display:block;}
```

のように置き換えれば OK ということになります。
プルダウンメニュー作成の中核技術は以上で全部なのですが、ではどうして 7 段階もの作例が必要になるのか。それは、現状の CSS デザインは果てしないブラウザの実装ミスと

の戦いになるためです。とくに WinIE は不思議な挙動が目立ちます。無視できるレベルの不具合が大半ですが、毎回のように、非常に嫌な形で不具合が顕在化するケースが 1 つか 2 つ、出てきます。今回も、いささかてこずらされました。

プルダウンメニューの是非

そもそもプルダウンメニューは素晴らしいデザインアイデアといえるのか？という疑問の声は、初めてプルダウンメニューがウェブに持ち込まれた頃より強く存在します。

IT 用語辞典（http://e-words.jp/w/E38397E383ABE38380E382A6E383B3E383A1E3838BE383A5E383BC.html）の解説を引用しましょう。

プルダウンメニュー【pull-down menu】
読み方 : プルダウンメニュー
別名 : ドロップダウンメニュー , drop-down menu

WindowsやMac OSなどの操作画面で、メニューから項目を選択する方式の一つ。メニューのタイトル部分にマウスカーソルをあわせてボタンをクリックすると、そこから選択項目の一覧が引き出されたように垂れ下がってくる表示方法のこと。「ドロップダウンメニュー」ともいう。

Windows のメインウィンドウにはスクロールバーがないので、アプリケーションのメニューを最初から全部表示しておくのは現実的ではありません。だから仕方なくメニューを階層化し、子メニューは平常時には非表示としているわけです。

けれども、スクロールバーのないウェブブラウザは滅多にありません (特別な設定を選択しない限りは)。

スペースに余裕があるのなら、情報をよく整理したうえで全部公開しておいた方が便利に使えるケースが多いはずです。プルダウンメニューを使う場合、まず親メニューの上にカーソルを移動し、子メニューが表示されたのを確認してから、所定の子メニューまで更にカーソルを移動しなければなりません。この過程で親メニューの支配領域からカーソルが外れてしまうと、再び子メニューは隠されてしまいます。

・一部の情報をデフォルト設定で「隠す」ことの是非
・マウス操作の複雑化 (アクセシビリティの低下)
・WinIE では JavaScript 必須 (同上)

3 番目の批判は時間が解決するでしょうが、上記 2 点の批判はプルダウンメニューの本質に関わります。

趣味の個人サイトどころか、大手企業の公式サイトでも平気で使われているのが現状ではあって、「別にほとんどの人は気にしていないよ」というのが実態なのかもしれませんけれども、一応、こうした批判があることには留意すべきでしょう。(逆に、ビジネス上、有意なレベルで障害となる問題ではない、という割り切りもあってよいかとは思います)

アクセシビリティを確保するために

プルダウンメニューには JavaScript 必須という条件がありますが、JavaScript を無効化している環境にも一定の配慮をすることは可能です。

```
<div>
<ul class="main">
<li class="parent"> 親メニュー
<ol>
<li> 子メニュー 1</li>
<li> 子メニュー 2</li>
<li> 子メニュー 3</li>
</ol>
</li>
</ul>
</div>
```

JavaScript を無効化している場合、親メニューにカーソルを重ねても子メニューが展開されません。したがって、ナビゲーションリストをプルダウンメニューの形で提供している場合、子メニューだけにリンクを設定すると問題が生じます。

最も単純で強力な解決策は、親メニューに小目次のページへのリンクを設定することでしょう。

```
<div>
<ul class="main">
<li class="parent"><a href=" 小目次 "> 親メニュー </a>
<ol>
<li><a href=" コンテンツ 1"> 子メニュー 1</a></li>
<li><a href=" コンテンツ 2"> 子メニュー 2</a></li>
<li><a href=" コンテンツ 3"> 子メニュー 3</a></li>
</ol>
</li>
</ul>
</div>
```

小目次のページには、以下のようなリストを用意します。目次だけのページなら、プルダウンメニューは必要ないでしょう (目次自体がコンテンツなので、スペースには十分な余裕があるはず)。

```
<ol>
<li><a href=" コンテンツ 1"> 子メニュー 1</a></li>
<li><a href=" コンテンツ 2"> 子メニュー 2</a></li>
<li><a href=" コンテンツ 3"> 子メニュー 3</a></li>
</ol>
```

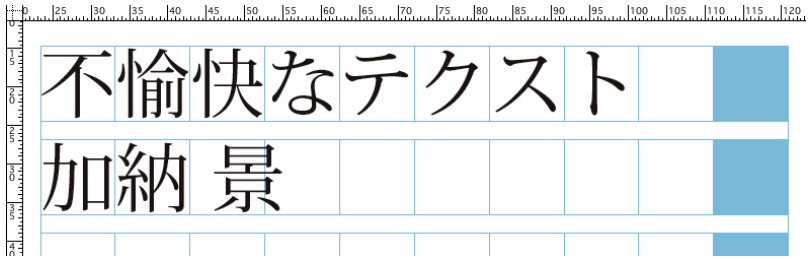
面倒に思われるかもしれませんけれども、検討の価値はあります。

プルダウンメニューは多くの場合、リッチなグローバルナビゲーションを設置するために用いられます。あれば便利だけれども、誰もが利用するわけではない大量のナビゲーション情報を小さなスペースに押し込む魔法のような手段はありません。「メニューを階層化し子メニューをデフォルト非表示とすればよい」というのは、自然な発想といえます。

このようなケースでは、わざわざ新しく小目次を作成する必要はないはず。既に小目次のページは存在しているだろうからです。

たいてい問題になるのは、プルダウンメニューを作るためだけに情報の階層構造をでっち上げたケース。小手先の対策でお茶を濁してはいけません、というのは「いつもの話」ではあります。

今回は以上です。お疲れ様でした。



第三回 構成について

構成のさまざま

構成と言ひますと、「起承転結」のやうな、文章全体を如何に構成するかといふことばかり強調されがちですが、それだけではありません。むしろ、構成の妙は細部にあります。さて、いきなりですが、少し問題をやつてもらひたいと思ひます。

問題

以下の三つの文章の中から、プロの作家が実際に書いた文章を選べ。なお、本文中の強調は、原文ではすべて傍点である。

1.

S・B(ソング・ブック) はベッドに入る時にはみんな脱いでしまう。

すくなくとも 100 回は一緒にベッドで寝ているのに、わたしはどうしてもてれてしまう。

てれて、てれて、S・B がドレスやパンティ・ストッキングを脱いでいる間中ずっと椅子に座ってお祈りしているほどなのだ。

永遠につづくかと思われる劫罰の時が流れ、準備万端ととのったS・B がしびれをきらした全能の神様のようにベッドの中から「何しているの？ダーリン」と叱責して、やっとわたしはわたしの服を脱ぐ。

S・B はわたしが服を脱いでいるのをじっとみつめていた。

「あなたの躰を見ているの大好き」と S・B は言った。

わたしはもう、てれて、てれて、てれて、どうしようもなくなって、パンツだけははいたままベッドに入ってもいいだろうかと S・B に言う。

「いいけど、どうせ脱ぐんでしょう？」

わたしは裸になると、まるで裸になったような気がする。

S・B は裸になっても、もう一枚ペチコートをはおっているみたいだ。

「それは違うわ」と S・B は言った。

「わたしは裸になると、ちゃんと裸だけど、あなたは裸になっても、裸じゃないみたいだわ」

S・B はアリストテレス的にわたしに言う。

躰について考えることは難しい。

アリストテレスだって結局は匙を投げてしまったほどの難問なのだ。

S・B の乳房はわたしの手の形にぴったり合う。何度手をおいても、ぴったりなのだ。

「ベッドの中で謎解きをしないでね」と、わたしの手をつかんで S・B が小さな声で言った。

全くその通りだ。

ベッドは、その中で愛し合うか、なにもしないで手をつないだままねむるか、横倒しにしてバリケードにするか、それ以外に使うべきではないとわたしは思う。

2.

思えば、ぼくが古橋悌二に最後に会ったのは、去る六月のニューヨーク近代美術館での <LOVERS> のオープニングのときだった。最近出たアルバム <SMOOCHY> の制作にかかっていた坂本龍一も忙しいなかを駆けつけて、思い出話に花が咲いたのを覚えている。そう、ぼくたちはニューヨークで何度も素晴らしい時をともに過ごしたのだった……。

それから四ヶ月あまりたって、ダムタイプのブラジル公演の直前に体調を崩して入院した古橋悌二は、前に坂本龍一に DAT で聴かせてもらった <SMOOCHY> の CD を病床でうつらうつらしながら聴いていたという。熟れきった果実のように甘くセンチメンタルなラテン音楽を、あくまでクールな電子音響空間で精密にリメイクした、いわばメタ・ラテンとも言うべきこの音楽を聴きながら、彼はひとり病室でどんな人工の青空を見ていたのだろう。

時あたかも、地球の裏側ブラジルでは、ダムタイプの仲間たちが演ずる <S/N> が喝采を浴びていたという。あれほど舞台を愛したこのアーティスト / ドラッグ・クイーンにとって、これ以上の終幕が考えられるだろうか。

時には艶やかに、時には皮肉に、時にははにかんだように、しかし、いつもきまって笑顔を振りまいていたその姿を思い返しながら、不眠の夜、<S/N> を聴き、<SMOOCHY> を聴く。われわれの世紀もそろそろ幕を下ろそうとしている。

3.

ホテルに泊まっているアメリカ人は、彼ら二人しかいなかった。自分たちの部屋へ行の行き帰りに階段ですれちがう人々のなかに、知った顔は一人もいない。二人の部屋は二階で、海に面していた。公園と戦争記念碑にも面していた。公園には大きなパームツリーが生えていて、緑色のベンチがあった。晴れた日には、いつも絵描きたちが画架を立てていた。絵描きたちは、パームツリーのたたずまいや、公園と海に面したホテルの明るい色彩が気に入っていたのだ。かなり遠くからやってきて、戦争記念碑を見あげるイタリア人たちもいる。青銅製の記念碑は、雨に濡れて光っていた。その日は雨だった。雨がパームツリーから滴り、砂利道に水たまりが生じていた。雨の下で波が横一文字に砕け、浜辺をすべるように後退したと思うとまた押し寄せてきて、雨の下で横一文字に砕けた。戦争記念碑のそばの広場から、車はすべて姿を消している。広場の向こうのカフェの入り口にウェイターが一人立って、がらんとした広場を眺めている。

解答と前置き

アホらしいと顔を歪めてゐる様子がなんとなく想像つきますが、まあ、さうですね、これらはすべて、プロの作家の文章です。出典は順に、高橋源一郎著『さようなら、ギャングたち』(講談社文芸文庫)、浅田彰著『Ronza』1996 年 1 月号、アーネスト・ヘミングウェイ著 高見浩訳「雨のなかの猫」『われらの時代・男だけの世界――ヘミングウェイ全短編 1』(新潮文庫) 所収、である。

さて、解説、と行きたいところですが、すこしまつていただきたい。みなさんは、これらの文章を読んで、なにか、感じ入つたり、心を揺さぶられるやうなことがあつたでせうか。「いや、俺 / 私はそんなことはなかつた」といふ人は、前回のサブ・テクストの段階からやりなほすことをおすすめします。今回は構成、といふことですが、危ないのは、味もそつけもない単なる小手先の技術ばかり考へてしまふことなのです。目線の移動がどうだ文章の長短がどうだ、といふことは、もちろん重要でありますし、さういふことも触れていかうとは思ひますが、より重要なのは、作者になる前によい読者になることです。作者が苦心して作り上げた文章を、読者はすんなりと読んでゐる、さういつた状態を、想像すること。それこそ、「読む力」が「書く力」になる瞬間なのです。あるいは、前回言つた、自意識の徹底、と言つてもよいと思ひます。前回は、自分とはどのやうな存在であるのかといふことをとりあげましたが、今回は、自分は他者に、どのやうに見られてゐるのかを考へてみる、つまりは自分の「後姿を見ること」をとりあげたいと思ふのです。そのために、先づ、人の後姿を見て、どのやうに感じ、それはどうしてさう感じるのかを考へてみませう。

解説

『さようなら、ギャングたち』のやさしさ

さて、まづは高橋源一郎氏の作品 (『さようなら、ギャングたち』) から見てゆきませう。

一読して感ずるのは、とても、やさしい文章だな、といふことだと思ひます。やさしくて、折れやすくて、ばかみたい。そんな感じが、この文章の魅力です。アリストテレスなんかを持ち出して、ふつうはむつかしい話になりさうなのに、そんな感じは全然ありません。一歩間違へれば、どこかの同人誌かやおい漫画か、少女漫画のやうになりかねない (そして実際、この小説は途中で少女漫画が出てくる)、素人にはとても危険な文章ですが、とつても素敵な文章である。

一応高橋氏の紹介をしておきませう。氏は、ポスト・モダン小説の旗手と言はれてゐます。ここでの意味は、従来の小説然とした小説から脱却しようとした小説、といふくらゐの意味でよいと思ひます。実際、氏は現代詩といふ分野からこの世界に入つた人です。さう考へると、どことなく詩みたいな文章に思へるでせう？高橋氏は『ジョン・レノン対火星人』(講談社文芸文庫) の「著者から読者へ」で、『ギャング』が書かれた経緯について書いてゐます。

ところが、「群像新人文学賞」に応募した『戦争』は、最終選考まで残ったが、結局、選考委員から、ほんとに「顰蹙をかって」しまったのだ。

失意のぼくを励ましてくれた、はじめての担当編集者A さんの勧めで書いたのが、『戦争』とは、まったくタイプの違う作品、優しく、単純で、詩の一杯詰まった『さようなら、ギャングたち』だった。

『ギャング』は、ある意味で、「文学」に満ちた作品だった。だが、ぼくは、ほんとうは、「文学」など一かけらもない、つまり『戦争』でデビューしたかったのだ。

『ジョン・レノン対火星人』は、その『すばらしい日本の戦争』を、少し書き直して発表したものだ。

私たちは、高橋氏がなんの作品でデビューしようが知つたことぢやありませんから、問題は、『ギャング』が「優しく、単純で、詩の一杯詰まった」作品にしようといふ意図があつたことを分かればよいわけです (ちなみに、では『ジョン・レノン対火星人』は『ギャング』と正反対かと言へばさうでもありません。たしかに死体だとかセックスだとかオナニーだとかといつた単語が出てきますが、さういつた単語が、単語だけとしての意味にとらはれず、修辞によつて別の意味を与へられてゐます。それが、この作者の類稀なる才能でせう。さう、まるで、アリストテレスがアリストテレスではないかのやうに語つた、この文章のやうに)。

「優しく、単純で、詩の一杯詰まった」作品？まるで、私たちが読んだまゝではありませんか。さう、高橋氏は、きちんと、クリアしてゐる。なにを？むろん、「後姿を見ること」です。

では、作者の思惑と読者の感想が、どうして一致したのでせうか。

それが、構成の力です。

この短いなかでも、高橋氏はきちんと構成を意識してゐる。たとへば、強調してゐる箇所 (原文では傍点) をみていただきたい。文章が進むにつれ、「てれて」が増えてゆく。しかし、ただ増やすだけではそのやうな効果は得られません。その間に、「S・B がドレスやパンティ・ストッキングを脱いでいる間中ずっと椅子に座ってお祈りしている」と書き、「永遠につづくかと思われる劫罰の時が流れ、準備万端ととのったS・B がしびれをきらした全能の神様のようにベッドの中から『何しているの？ダーリン』と叱責して、やっとわたしはわたしの服を脱ぐ」と書くことによつて、弱々しさのような、主人公の性格の一端を描写してゐるのです。

それだけではありません。主人公の馬鹿みたいな感じを、より際立たせ、或いは、難解な哲学書のパロディといふやうな感じで挿入される、「わたしは裸になると、まるで裸になったような気がする」といつたやうな、直訳調の文章が、なにか、生まじめさ、といふよりも、をかしみを与へてゐます。小学生や山下清のやうな人が書く文章でたまに見ますが、「僕は岡山に行ってみたいと思ったので、岡山に列車で行きました」といふ文章に似た面白さがある。

少し話はそれますが、このやうな痴呆的な文章の書き手として、井伏鱒二と武者小路実篤がゐます。井伏は、痴呆的といふよりはまるみのある温かい文章を書きます。実篤は、もう本当にボケてゐるのではないかと思ふほど、徹底的にボケた書き方をしますが、それがとてもいい。志賀直哉と並んで楽天的な白樺派とされた実篤ですが、その楽天の度合いは、張り詰めた緊張感と倦怠を描き出す志賀とはむしろ対照的で、徹底してゐます。或いはほんたうにボケてゐたのかもしれないですけれど。

閑話休題。この、「詩みたいな文章」を読んでゐて、ふと、首を傾げた人がいらつしやるかもしれない。よく目を凝らして読んでみると、ちよつとした疑問がありませんか？もう一度、読んでみませう。

すくなくとも 100 回は一緒にベッドで寝ているのに、わたしはどうしてもてれてしまう。

てれて、てれて、S・B がドレスやパンティ・ストッキングを脱いでいる間中ずっと椅子に座ってお祈りしているほどなのだ。

永遠につづくかと思われる劫罰の時が流れ、準備万端ととのったS・B がしびれをきらした全能の神様のようにベッドの中から「何しているの？ダーリン」と叱責して、やっとわたしはわたしの服を脱ぐ。

S・B はわたしが服を脱いでいるのをじっとみつめていた。

「あなたの躰を見ているの大好き」とS・B は言った。

わたしはもう、てれて、てれて、てれて、どうしようもなくなって、パンツだけははいたままベッドに入ってもいいだろうかとS・B に言う。

小学生の作文の授業で、このやうに習つた方は多いのではないでせうか。「漢字で書ける言葉は漢字で書きませう」

あるいは、マイクロソフト社のワードを使つてゐる方は分かると思ひますが、文章の推敲を自動的にしてくれる機能があります。その機能で、たまに、「表記のゆれ」といふ項目をチェックされた記憶はないでせうか。

この文章には「表記のゆれ」はありませんが、そのやうな体験をされた方は、かう思つたのではないでせうか。「なぜ、『てれて』とかを、漢字で書かないのだらうか？」

私ははじめ、文章の構成といつても文章全体の構成だけを指すものではないと言ひました。それは、文の中のことばの組み合わせ、文の構成のことも念頭に入れてゐるからです。そのひとつに、このやうな「字面」の効果もあるのです。

「字面」を辞書で引けばかう載つてゐます。書かれた文字。また、その文字から受ける感じ。つまり、文章に意識的であるためには、語句の選定はもちろんのこと、その語句を漢字で書くか、かなで書くか、カタカナで書くか、といつたことにも注意しなければなりません。たとへば、もしこの「てれて」が、かなではなく漢字で書かれてゐたら、すこしマジメで厳しい感じが増し、作者が意識してゐた「やさしさ」がそこなはれてしまひます。

もちろん、卒業論文やレポート、入試の小論文や報告書などは、カッチリとしたものでなくてはなりませんから、表記のゆれは御法度です。しかし、基本的にルールがないとされる小説では、自分の感性や思想を如何に表現できるかを問はれるわけですから、むしろ進んで挑戦してみなくてはいけない。

ではそろそろ、『ギャング』で学んだ構成の方法をおさらいしてみませう。

同じ言葉を反復することで、一層その効果が増大される。

ただし、ただ反復するだけでなく、どのやうな状況であるかの描写を入れる。

主語と目的語を執拗に入れると、をかしみを生む。

字面によつて、文章の感じが変る。

かうしてまとめてみますと、味もそつけもない技術論でしかありません。これは先ほど言つたとほりです。だからこそ、この文章を読んだときの受けた感じ、「やさしさ」を忘れてはならないのです。それは、小手先の技術論では到底書け得ないものなのです。

クール・ストイック、そして哀しみ

次は浅田彰氏の文章 (『Ronza』1996 年 1 月号) です。浅田氏は前回も終はり近くでとりあげましたが、今回も登場してもらひます。

一読してどんな感じを受けたでせうか。私は、相変らず、冷静で、厳格、禁欲的な文章だと思ひました。しかし、それだけではありません。そのなかで、書いても書いても拭えないほどの哀しみが横たはつてゐる。そのやうに感じました。むろん、内容が内容ですから、そのやうに思へるとも言へますが、内容だけを言ふならば、今東光の弔辞みたいなアッケラカンとしたもの (それはそれで好きなのですが。特に川端に投げかけた、「お先にどうぞ、南無」は素晴らしい) もありますので、これもやはり文章の力、作者の感情の力です。

しかし、ここが氏の本領ですが、ただ、かなしいかなしい、と言つてゐるわけではない。かなしい、艶やかな感情を、折り目正しく整列し、抑制してゐる。だが、かへつてそれが、爆発的な感情を抱いてゐるであらうことを予感させます。あくまでもクールに、ストイックに、哀しみを語る、それこそが浅田氏の本領なのです。

では、なぜそのやうに語ることができるのか。むろん、気質である、と、そのやうに答へることは容易で、殆ど正解だと思ふものの、ではその気質が、如何に表現されてゐるのかといふ問題には答へられてゐない。答へようとするならば、やはり、構成の技、といへるのではないでせうか。

詳しくみてゆきませう。まづ、この文章を段落ごとに分けてみます。そして、その段落で語られてゐる内容を簡潔にまとめてみます。

古橋悌二と坂本龍一との、NY での素晴らしい思ひ出。

坂本龍一の CD を聴く古橋悌二を想像する。

舞台を愛した古橋悌二にとつて、<S/N> の成功は最高の終幕であると考へる。

古橋悌二の思ひ出から、現実の世界の世紀もそろそろ幕を下ろそうとしてゐることを自覚する。

きはめてよくできた文章である、文章のお手本みたいなものだ、と思ひます。

よく出来た文章、つまり冒頭と結末が一致するといふごく基礎的な技術が、ここでは見られます。

中学か高校かは分かりませんが、みなさんも、同じやうなことをアドバイスされたのではないでせうか。国語のテストで、「初めと終りを見ろ」なんて、言はれませんでしたか？このばあひも基本的に同様です。「古橋悌二の思ひ出」それがこの文章の重要な要素だと分かります。ですが、ただ思ひ出に留まる以上の力を、浅田氏は与へてゐる。それが、「古橋悌二の死」であり、その死をめぐる世界把握の自覚なのです。

私は、このやうな冒頭と結末が繋がる構造を、円環構

造と呼んでゐます。この構造は屢々、新聞などのコラム欄で多く見られ、極めて様式性の高い構造だと言へます。また、一貫した主張や論理の構成が分かりやすく、読者の腑に落ちる効果が期待できます。

しかし、ともすると、それこそ某新聞の天声なんたらのやうに、無味乾燥な、けれども高だけは括つてゐる、醜悪なものになりかねません。これは例へですが、「熊の出没が最近多い→どうやら木の実がとれず人家に食料を求めてゐるやうだ→ところで熊は熊でも自民党の熊野議員の話→例の献金疑惑で渦中の人となつた感のある氏だが、いやいや氏だけではない、多くの政治化が山から下りて『食料』を求めてゐる→たしかに熊の駆除も必要かもしれないが、かういつた政治家たちの駆除も必要ではないだらうか」なんて具合のものを、よく見かける。書いてゐる本人は得意さうだが、極めて下劣で作者の品性を疑ふダジャレに過ぎない。

むろん、浅田氏のこの文章は、その過ちを犯してゐない。それにしても、なぜこのやうなスタイルを浅田氏はとつてゐるのだらうか。色々と考へられるものの、話が逸れるので深くは書かないが、それは氏の文章のもう一つの特徴と関係してくるかもしれない。

もう一つの特徴とは、浅田氏自身が極めてクリアに意識されてゐるはずなのだが、その文が「物語的」な、或いは「モダン的」な、無駄な要素をできるだけ排除して簡潔なデザインを目指すというモダニズムの原理を、実践してゐる特徴である。

それは、先にも指摘したが、円環構造のような様式性の強い構造(まつたく、『構造と力』の作者らしい)を使ふといふことと離して考へることはできないだらう。実際、この強い様式性によつて、浅田氏の文章は、クールでありながら潤いのある、つややかな哀しみを湛へてゐるのだから。

「円環構造」を使ふことで、論理的で筋のとほつた、クールな印象を与へることができる

ただしダジャレは使ふな

この辺りが、この文章のまとめかもしれないが、注意してもらひたいのは、円環構造だから浅田氏のやうな文章が書けるかと言へば、さうではないといふことだ。そこには、無駄なデザイン(あくまでデザインのことだ。言葉を少なくして短文にすることではない)を排除する、きはめて強い合理性のもとに磨き上げられた文があることを忘れてはいけない。こればかりは、一朝一夕でできるものではないのだ。

ハードボイルドな構成?

最後は、いまだに根強い人気のヘミングウェイ(「雨のなかの猫」)です。

「雨のなかの猫」は、ヘミングウェイの初期の傑作短編です(特に女性は共感を抱くのではないでせうか。しかし、ヘミングウェイを好んで読む女の子といふのも中々想像しづらいものもあります)が、これはその冒頭です。

ヘミングウェイの魅力は、なんといつても比喩、ハードボイルドな台詞、描写、と相場が決まつてゐますが、今回は最後の描写ですね。

この文章の特徴は、もう言ふまでもなく「広場の向こうのカフェの入り口にウェイターが一人立つて、がらんとした広場を眺めている」といふ一文で、「がらんとした広場」を描写するために延々と広場やその周りの様子を描き出し、そこを一人のウェイターが立つて眺めてゐる、ウェイターがぽつんとそこにゐる、その感じをうまく書いてゐます。ただ、ほんたうのことを言へば、それまでの描写はあまり好きではありません。いささか、ヘミングウェイらしいシンプルさや切れ味に欠けてゐる気がするからです。しかし、この一文で、一気に精彩のある、まるで映画のカメラワークの意味を見出したかのやうな興奮を覚えます。

こんな文章もあります。

冬の最後の冷雨とともに、この都市のすべての悲しみが、突然やってきた。背の高い、白い建物の頂上は、歩く人の目にはもはやうつらなくなり、あるのはただ、街路のしめった黒さと、小さな店の閉じたドア、薬味売り、文房具店や新聞店、さんばさん——二級助産婦——それに、ヴェルレーヌが死んだホテルくらいのもの。そのホテルの最上階に私は一室を借りて、そこで仕事をしていた。

視点の移動がキマッてゐます。冷たい雨が降りしきり、歩く人々は寒くてみんな下を向いてゐる、そんな状況を、「白い建物の頂上は、歩く人の目にはもはやうつらなくな」つたと書く辺りは味はひ深いですね。ですが今回注目してほしいのは、まづ、ここで一旦視線が下に、「建物の頂上」から「街路」に下がることです。下にさがつた状態で、周りを描写する。そんななかに、ひとつのホテルがある。実は、そこの最上階に彼はゐるわけです。ここで、視線は下から上に、一気に引きあがります。本当に映画のやうです。

このやうに、視点の移動を意識して書くことによつて、読者にその場の状況や雰囲気を分かりやすく伝へることが出来ます。逆に、視点の移動が混乱したり統一性がなかつたりすると、それはむつかしくなるのです。この点、同人作家の皆さんはあまり意識をしてゐない人が多い。無駄に文字を連ねれば立派な描写ができるといふ考へは、早々に捨て去るべきだ。

描写には視点の移動を意識して書く。

何度も言ひますが、それだけで素晴らしいものになるわけではありませんが。

課題

さて、今まで著名な作家を例にしてみてきたわけですが、こんどは、同人作家、それもFolioの連載をなさつてゐる方の文章はどうでせうか。たとへば、茶石文緒さんの、「純粋無垢へ」『メッセージをどうぞ』第一回とか。

今まで見てきた知識をもとに、茶石さんの文章を意識的に読んでみませう。この答へ(むろん、今までの理論編を基にした「答へ」のこと)は書きません。自分で、どこがよいのか、を考へてみる。それが、課題、といふわけですね。

答へといふものではありませんが、私の感想は、同人作家の文章とは思へない(いささか洗練されてゐない点や、言ひまはしが気になる点があるものの)到達度を示してゐると思ひます。すこしだけ答へらしきものを言ふならば、グレン・グールドの演奏を、「様式に演奏を嵌め込むのではなく、様式そのものが生命を帯び、音楽そのものとなって響いている」と評する正確さ、あのモグラのやうに鍵盤に向かひ、モグラのやうに「他人との接触を徹底的に拒絶」して録音スタジオにこもつたグールドが、しかしそのなかに閉じ籠もることなく自由で瑞々しい音を響かせた、その逆説を、これ以上は考へられないレベルでまとめてみせた力量に、私は感服し、敬意さへ抱いてゐる。

むろん、他人への評価ばかりでは力はつきません。ですから、書くべきです。これから、意識し、書くこと。そして一応の自信がついたら、ここFolioや他の場所で発表するなり応募するなりしてもよいでせう。その作品がよいものであれば、眼力のある人は必ず見ているはずです。

理論編を終へて

第一回に書いたやうに、これで理論編は終はりです。今思へば、書き足りないことが多く、いささかもの足りない(特に第二回は酷いと反省してゐるのだが)と思ふものの、内容から文体へ、そして構成といふ当初から考へてゐた図式通りには行つたことは、一先づ安心してよいと思ふ。

次回からは、心置きなく他人の作品を論ふことが出来ると思ひます。お楽しみに。

引用文献
高橋源一郎 著『さようなら、ギャングたち』(講談社文芸文庫)
高橋源一郎 著『ジョン・レノン対火星人』(講談社文芸文庫)
浅田彰『Ronza』1996年1月号
浅田彰【これは戦争ではない】
アーネスト・ヘミングウェイ 著、高見浩 訳『われらの時代・男だけの世界——ヘミングウェイ全短編1』(新潮文庫)
アーネスト・ヘミングウェイ 著、福田陸太郎 訳『移動祝祭日』(同時代ライブラリー)
茶石文緒『メッセージをどうぞ』

メッセージをどうぞ

第9回

Please listen to a message.

茶石 文緒

Tint the Air

つい最近、あるコンサートで、1852 年につくられたピアノを聴く機会があった。エラールというフランスのメーカーによる楽器で、「ピアノフォルテ」と呼ばれる楽器の種族の最後にあたるモデル、だそうだ。

現代のピアノと大きく違うのは、駆体の内部で弦が平行に張られていること (現代のピアノの弦は交差状)、弦を打つハンマーにフェルトだけでなく革が使われていること、そして、ダンパーの効きが厳密ではなく、弦の残響が長く長く続くこと。

確かに現代のピアノとは、音色が全く違っていた。音の芯が妙にみっしりと重いのは、革の質感によるものか。そのくせ残響はさわさわとひそやかに、鍵盤から指を離した後も消えずにうねり続けている。精霊の存在を信じたくなる音だ、と思った。リアルな質感を持つ生身の音と、それに寄り添う半透明の残響。

その長い減衰に包まれながら、その頃、沈黙はどんな音層を持っていたのだろうと思った。全くの無音という意味の沈黙ではなく、つまり、その場の空気、あるがままの環境から音楽を差し引いた「音楽が鳴っていない状態」のこと。

1852 年。まだ自動車は走っていない。ダイムラーとベンツが、石油エンジンで走る車を相次いで発明するのは 1885 年のことだ。電話のベルは 1870 年代後半に初めて鳴り響く。蒸気機関で動くエレベーターはあったが、ロープが切れれば真っ逆さまに落下する危険な代物で、もっぱら貨物用として使われていた。暖房といえば暖炉が当たり前なので、当然ファンヒーターも、エアコンもない。冬になれば音楽の合間には、薪の爆ぜる音が聴こえていたかもしれない。

アメリカでは 1850 年、リーバイ・ストラウスが労働着として初めてのジーンズを売り出したけれど、ヨーロッパで、エラールのピアノを聴きに集まるひとたちが、そんなものを着るわけもない。まだココ・シャネルだってデビューしていないし、化学繊維も科学染料も発明されていない。衣装は全て天然の繊維だ。シルクタフタの衣擦れ、綿の厚み、麻のシャリ感、毛羽立って堅いウールの摩擦。コルセットに仕込んだ鯨骨の秘やかな軋み、革の靴底が鳴らす足音。人ひとりが歩くだけでも、今とは全く違う音を引き連れずにはいられない。

白い紙の白さに、いくつもの色合いがあるように。その頃、音楽を差し引いた沈黙にも、きっと今とは違う響きが満ちていたのに違いない。

それでは、現代は？

音楽のない部屋で、たった一人で耳を澄ませてみると、いろいろなものが意識に流れ込んでくるのがわかる。冷蔵庫のモーター音。エアコンの唸り。リモコンのスイッチを押した一瞬、キンと耳を刺す、音にならない電子信号。窓の外からは車のエンジン音、脅すようなクラクション、ウィンカー、タイヤとアスファルトの摩擦音。巨きなトラックが通るとき、音階のように、エアブレーキを抜くときの空気音が響く。

さらに遠くから重なるのは、列車がレールを抜ける音。不協和音を堂々と撒き散らす踏切のアラーム、警笛、自衛隊が演習する大砲の音。その音は遠い山肌で跳ね返り、そこからまた全てが近くへ戻ってくる。

もっと意識をオープンにしてみよう。やがて聞こえないはずの音、普段は空気に溶け込んで、音とも思っていないような音が、くっきりと際立って聞こえてくる。自動ドアのセンサーが発する、ピンと張りつめた糸のような響き (自分の身体がそれを遮るとき、いつも何かの領域を侵した気分になる)。重く透き通ったガラスがレールの上を滑る音。エレベーターの機械室でベアリングが動く重金属音、目的の階に着いたことを知らせる電子チャイム。PC の起動音、ハードディスクと冷却ファン、キーボードを打つリズム、クリック、クリック、ビープ、クリック。トレイが CD を読み込む音、回り始める時の秘密めいたすべらかなモーター音。目に見えない電波と揺らぎ、電波、そう、電波には、音がある。

何もかも、1852 年にはなかった音ばかり。それが幾重にも重なり合って、わたしの周囲を隙間なく包み込み、満たしている。いくらクラシックな音楽を大音量で流してみたとしても、空気そのもの、白い紙そのものの色を変えることはできないのだ。

身の回りに充ちている、聞こえないけれど確かに存在する、幾多の音。アイスランドからやってきた Mum の音楽は、その一つ一つを色づけるようにして、立体的に立ち上げていく。たとえば病室のモニタで見るような波状の線を、音にしたらこう聞こえるだろうと思えるうねり。それが徐々に幅を増しながら、少しずつハーモニーの形を取っていく。その音を追ううちに、くっきりと輪郭を持った映像が立ち上がる。内部にモーターを抱き込んだ機械、その表面に伝わる鈍い痺れの感覚を指先でたどるうちに、わたしたちが存在する世界は、音と空気の震えだけで構成されているように思えてくる。

はじめにあるのは、鉄と電気が支配する、青黒く冷えた世界。そこにやがて、オーガニックな埃が降り積もり、オブジェを形づくっていく。まるでゲームのコントローラを操るように、画素だけで建てられた古い建物に歩み行っていく感触。入り組んだ角を曲がるほどに、空気は生彩を帯びていく。弦楽器、ドラム、メロディとハーモニー。けれど、その底辺に流れるエレクトリックなうねりはいつまでも消えない。

そこに歌が重なる。舌足らずな少女の歌い声はまるで、遊び飽かれて捨てられた人形の嘆きのよう。くすんだビスクの頬に、もつれて汚れたナイロンの髪がこびりついている。埃の積もったドレスは紺のベルベット、木綿の白いひだ飾りが幾重にも付いている。触ると指に粘つくようなその衣裳からは、かすかに黴の匂いがする。

人形のくちびるから聞こえる密やかな歌は、あまりに幼く頼りない。それでもそこには、生身の少女には持ち得ない、官能と淫靡さが満ちている。こんな声音で囁いたこと、あるいは囁かれたことなんて一度もないはずなのに、心の奥の方にしまわれていた記憶が、ぴくりと、反応する。

「とてつもなく長い夜
胸元で彼をかき回す
静けさの中で — 彼を漕ぐ、彼を漕ぐ

とてつもなく荒涼とした朝
岩のところで彼は壊れる
そして泣きながら — 漕ぐ、漕ぐ」
(weeping rock, rock)

隙間なく空気を埋める機械音と電子音は、身体を取り巻く現実世界の音層。そしてそこに重なる、あまりにあどけなく、あやういほど煽情的な歌い声は、心の中にどろりと溜まっている、甘く腐った幻想の名残だ。音楽がそれを融け合わせる。普段は意識もしないような音色の亡霊に色と輪郭を与え、上澄みと澱を混ぜ合わせるように、エレクトリックとアナログのはざまを、現実と記憶の間を、ゆったりと、掻き回す。

19 世紀の人々に、この音楽を聴かせてみたいと思った。この完成されたアンバランス、磨きぬかれた歪さこそが、いまわたしたちが生きている世界のかたちなのです、そう耳元で打ち明けたら、彼の世の人たちはいったい、どんな顔をするだろう。

Mum Summer Make Good

1. Hu Hviss - A Ship
2. Weeping Rock, Rock
3. Nightly Cares
4. Ghosts You Draw on My Back
5. Stir
6. Sing Me Out the Window
7. Islands of the Childrens Children
8. Away
9. Oh, How the Boat Drifts
10. Small Deaths Are the Saddest
11. Will the Summer Make Good for All of Our Sins?
12. Abandoned Ship Bells

ビッグバンドマーチ

サイキ カツミ

「チンドン屋の人がいたの」

響が友人との飲みから帰ってくるなり玄関から呼ぶのが聞こえた。駅前の居酒屋で 10 年来の友人と久しぶりに会ったようだった。どうした、と訊くと、ほら、この前、チンドン屋さんが街の中にいたでしょ！と興奮気味に答えた。ああ、いたね、いたと、取りなすと居酒屋に偶然居たのよ。あのサックスの人。それもこの近所に住んでるのよと続ける。ああ、なんてことだ。とぼくは頭を掻くほかなかった。こっちは徹夜続きで頭が朦朧としてるのに、なんと楽しそうな話なんだと思った。

「今度ね、チンドン屋さんの人たちの演奏会あるのよ」

「いつ？」

響はイツイツドコドコでと楽しそうに話し始めた。面白そうだけど休みが取れるかなあと計算しているうちに、彼女はもう他の話に夢中になっていた。音は広がるのよ、だってね、ふるーいレゲエなんて、50 年代のリズムアンドブルースの曲をひっぱってきてるでしょ？スカだってイギリスが中心だし、サルサやボサノバだって、ニューヨークがメッカでしょ？

僕の脳裏には仕事柄ラジオの代わりに、今論議の的になってる P2P とかの技術を考えていた。

「いっそのこと音楽著作権を保護する代わりに、全部流通させちゃうといいのに。音楽が広まることに限って言えば、ネットワークに流してしまった方がお得なのにね」

プロモーションなら千台ぐらいのパソコンで、コピー制限と広告のついた mp3 を＜これはプロモーション＞だと断りながら一斉に流している様子を考えた。誰が一番はじめにやるかってことだろうな、誰かがやってしまったら、いや、それが何度でも聴けるいい音楽なら、もの凄い量の流通が始まるぞというのは何だかわくわくする想像だった。

「そんなことじゃなくて」と響は本格的に話したいらしくて、キッチンに腰かけた。

「すまん。それで？」

今夜の響は幾分お酒が入っているので、いささか饒舌だった。

「それでね。今度ライブがあるから来ないかって」

「ん？さっきのチンドン屋さんたちの演奏会？」

「ううん。違う違う。矢野さん (というらしい) はね、それとは違うバンドを作ってて、それはチンドン屋さんとは全然ちがってるんだって。それがすごいのよ」

僕は途中やめにした仕事の画面に降り戻った。暢気な仕事だとしても締め切りがある。

「ふーん。で？」

響はコーヒーを煎れるために湯を沸かし始めた。

「楽器を作るとこから始めるんだって」

「え？楽器？」

「うん。楽器。電子楽器とアナログのものを組み合わせてビッグバンドを組んでるのだそうよ」

僕はテクノあたりのドカドカしたものとギター辺りの組み合わせを考えて、案外良くある手の音楽かなと思ったりもしたが、響がいうには、それは違って、もっと原初てきなものだそうだ。

「というと？」

ガサガサと持って帰ったビニール袋を開けながら響は答えた。

「廃品やいらないものを色々アンプに繋げて爆音で演奏するんだって。親指ピアノとかにエフェクター繋いだり、ピアニカにマイクを仕込んだり、二〇人ぐらいでドラム缶を一斉に叩いたりして」

「おもしろそうじゃない」

僕はピアニカにエフェクターが繋がった音を想像してみた。反響をどう抑えるのか分からないが、もしかしてハモンドオルガンのような音に近いのか？ムーグシンセにちかいのか、とちょっと心引かれる音だった。聴いてみたい。

「どこでやるの？ライブハウスだと演奏者の方が観客より多くなったりしない？」

「公園。公園。上野でやるのよ」

「へええ」

僕は想像した。携帯アンプを担いだ先頭の親指ピアノ部隊。チューバとホルンの音をゴムホースから響かせてる人々。水道管のディジュリドゥ。先頭の人々が公園の大通りをずんずん行進してゆく。あまりの音にびっくりして鳩が一斉に飛び立つ。鳩は青い空に消えて行き、嵐のようなドラム缶の太鼓隊が通り過ぎる。スチールドラムってそもそも廃物利用の音だ。あの悲しくも気高い高音は、石油市場に犯されたハイチだかトリニダードの貧民街の音だ。誰かが転がったドラム缶をハンマーで叩いたのが始まり。背筋から脳に抜けて空の上まで抜けて行く音。ゴムホースのチューバに親指ピアノのミニマルな音が重なりループさせたエレピのメロディーがこだまするような音に、のら猫は驚き、キリンが首を傾げて、パンダが踊る。

よく公園側が許したね。でしょ？

ホースでチューバとか作るなんて素敵じゃない。うん。

「ね。おいしい音と、甘いものには、どうしても勝てないのよ」

響は白い箱から、ショートケーキとタルトを取り出して、皿に乗せた。

「コーヒーいる？」

うん。僕は答えて、誘惑に負けてキッチンに向かった。

△FanfareCiocarlia(ファンファーレ・チョカリアーナ) が主役の「炎のジプシーブラス」という映画の冒頭は湖に沈んだブラスをひきあげるシーンから始まる。ずっとその幻想的な冒頭のシーンの意味を考えていた。やがて辿り着いた僕なりの理解は、音楽の始まりは、そうした忘れ去られたものから始まるのだという示唆だったのかも知れないということだ。ファンファーレの新作は「007 のテーマ」から始まる。007 は子供の頃のヒーローだったし、そのアレンジがまた素晴らしいので、とても興奮したものだが、007 が聴かれる市場への接近と言う点において、複雑な感情が禁じ得ない。今後どう変わってゆくのかが興味あるところだ。

△余談になるが、先日、とても刺激的な本を読んだ。音楽の友社から出たばかりの「ブラスの快楽～世界の管楽器 CD ガイド～」だ。世界中の音楽を「ブラスミュージック」という観点だけで切り取った本だった。そこにあるのは、音楽にジャンルがあるのは致し方ないし、簡便な理解のためにはどうしても何かの基準は必要だ。だが、あるジャンルだけに拘泥するなんてもったいない。音楽はもっと豊かで広がりのあるものなのだという意志だと思う。

△著者の関口善人さんは「モーツアルトの管弦楽曲とフランク・ザッパとスイングガールズを同じような地平に並べて聴くことはできないか」という。聴く側においてそれぞれを水平に優劣なしに並べてみる。この本もそうした著書のひとつである。CD ガイドの体裁だが、ガイド以外の場所も、かなり力が入って音楽の歴史が分かるので是非是非、読まれると新たな発見があるだろうと思う。

△で、今回は、コンゴトロニクスの「KONONONo.1(コノノ・ナンバーワン)」というアルバム。

△コンゴの音楽家集団で、廃物などを利用した楽器をアンプリファイドして演奏しているアルバム。二五年のキャリアがあるのだそうだ。大音量で流される親指ピアノ、ミニマルな響きとアフリカンなリズムと声。あまりに生々しく猥雑で活力に満ちた音に一聴して驚いてください。

△一度このアルバムの存在を知って以降、ずっとバンドやりたくてやりたくて仕方がない。楽器を作るところから始まる楽団なんて素敵じゃないか。最高にクールだ。日本には居ないか？と探してみた。いた。

・廃品打楽器パフォーマンス
http://www.terra.dti.ne.jp/%7etomoyama/main_down.html
・民族楽器、手作りの楽器屋 JUNJUN
http://www.info-niigata.or.jp/%7ejunjun/
・音楽劇団てんてこ
http://homepage1.nifty.com/tenteko/
・カリンバがすき !(カリンバ製作関連も)
http://kalimba.hp.infoseek.co.jp/index.html
・手作り楽器のページ
http://www.net-work.ne.jp/%7ekoh/
・マエストロ足立の手作り楽器工場
http://pianocraftwork.web.infoseek.co.jp/gakki.htm

などなど、色々活動している人たちがいる。。

(でもほんとは、もっとエフェクターとかアンプとか使用した人たちを探してたのだけど。。。)

編集後記

■アンケート
なんか皆さん、答えが切実で聞いてるこっちが ……。ああー、パアッと out of したいですよね !(ぱ)
out of out of out of と繰り返して呟いてみたら、あらまあ、ほらいつの間にか out of。。。(サ)

■企画「旅に出よう～ EYE 世界一周旅行記～」
今回、写真展や出版化の準備でお忙しいところをメールでやりとりしていただき、インタビューにも答えてもらいました。本当にありがとうございました。一瞬にして心を掴まれ世界中に友達が出来たかのような気持ちになれる写真と言葉たち。Folio で紹介した部分は、旅のほんの導入です。ぜひサイトの方へもどうぞ。写真展開催や出版の情報など今後も注目です。(ぱ)
僕らが見ている世界は、きっと僕らが見ているだけの世界でしかない。まるで違った世界のことは、まるで知らない。だけど、笑顔は輝かしく、人はあたたかい。(サ)

■詩
「宿命の様に旅人を愛す」ニィナチカ
旅といえばどこかへ行くことばかり考えちゃうけれど。旅立たれた者の気持ちを詠った詩四編。(ぱ)
旅するものがそこにいるとすれば、残されたものがそこにいる。それはきっとコインの表と裏で、近ければ近いほど、遠く、それでも背中はくっついてる。。。(サ)

組曲「旅の夢」縫坂疎琅
素朴で温かく心においしい言葉たち。まるで、おなかが空いた時に胃に流し込んだスープのよう。目を閉じても目蓋に感じる光のよう。(ぱ)
言葉。言葉が紡がれる。歌が紡がれる。記憶が紡がれて、積み重なる。やがてそれは人生という旅になる。日々の中で堆積する言葉や記憶は、街角やラジオから流れてくるメロディーと共に、不意に、そう , 化石のように掘り出され、心の中に染みてくるものでもある。言葉はそういうものなのかも知れない。(サ)

■小説
※臨界点の青と / ハシモト
車窓から外を眺めながらとりとめもなく浮かぶ思い出。回想は旅につきものだ。若々しい息遣いと海の香りがが届いてくるような物語。(ぱ)
人は大きくなるために、数多くの衣服を脱ぎ捨て、また新しい制服を着る。衣装棚の歴史はその人の歴史でもある。制服を脱ぎ、新たな制服を着た時、ふっと胸を締め付けるのは、君がいた夏。海。あの空の青さ。もう二度とかえってこない、あの時間。(サ)

※誕生日 / 寒竹泉美
予定をギュウギュウと入れて。休日は新たな日常。そして、忙しいと思いながら休日を過ごすというのは、休日らしい過ごし方であるのかも知れない。休日は日常からの逸脱であり、そして日常の匂いに取り込まれて過ごし、また休日を懐かしがるのだ。(サ)

※ drifter/ 茶石文緒
まどろみの中漕ぎ出した生々しい世界。現実とは一体何だろうか。現実とは選ぶもの？彼女は自分の現実を選び出す。詩編のような世界を質量のある言葉で創造している。(ぱ)
消えてしまいたい。どこかへこの身ごと消えてしまいたい。夢想する寝台は川面に浮かぶ船だ。船は一つのピックアップトラックに辿り着き、そしてまたゆっくりと静かに流れて行く。幻想的な鮮やかな夢想。(サ)

※サン・マンドニの白い砂 / 岡沢秋
広がり脈々と続いていく時間を旅させてくれる物語。(ぱ)
熱い島の情景が浮かぶ。人々の暮らしは自然と世界に翻弄され、それでもなお息づいている。村の子供たちは大きく大人になり、島は変化してゆく。そしてある大きな壁の前にたたずみ、問うのだ。文明とは何か。壁は嘆きに満ちている。(サ)

※みんなのうた ?/ オカヤマ
当事者と傍観者の見る世界はこんなにも違う。小説を書く行為は当事者になる行為であり、それこそが書く醍醐味だなんて思ってみた。(ぱ)
赤が情熱なら、青は静謐。ならば緑は追憶の色だ。追憶とは記憶を追うと書く。記憶、それは人の繋がり。父と子とそして山間を走る自動車。生々しい記憶と悲しみはそこにある。(サ)

※過ぎゆく夏 / 村上妙
突発的に旅立つ人もいれば、計画を温めてようやく出発する人もいる。この物語の彼女の旅は ……。(ぱ)
残してきてしまった人生の宿題。机の中に仕舞ったまま、忘れてきた、忘れようとしたような宿題。宿題は嫌いだ。でも、残したままだと気になって仕方がないように、そこにあるのは、忘れ得ぬ青春。(サ)

※グランドフィナーレ / 歪
見つめあう恋人たちをこんなに嫌味なく素敵に書けるのは、彼ならではだと思うのです。(ぱ)
人間に両手があるのは、どうしてだか分かるかい？片方の手はぎゅっと握って苦しみに耐えて生きてゆくため、そしてもう片方の手は大事な人の手をぎゅっと握りしめるためにある。ぎゅっと握って一緒に歩いて行こう。そう、いつまでも。。。こんな夫婦は理想だ。(サ)

※データーベースラブリー / サイキカツミ
蓄積していく無数のデータ。わたしたちは過去のデータの模倣や劣化コピーに過ぎないのかもしれない。だが、全ての「進行中」は、熱く痛くいとおしい。(ぱ)

※ A Dreaming Traveler/ 岩井とおる
遠く離れて初めて分かること。それを見つめるのが旅なのだろう。(ぱ)
人と人との関係性は測りがたい。だが、時に手のひらに乗せて転がしてるように感じるのは、エゴか。そして愛なのか。喪失したもの。残ったもの。そしてこぼれ落ちたもの。。。(サ)

Folio vol.9 Out Of……

各作品の著作権はそれぞれの作者にあります。

PDF Design : Katsumi Saiki

※去る物語 / 朝倉海人
俗と高貴、退化と進化、いらないものと大切なもの、わたしたちの中に当たり前のように居座った価値観の芯が揺らぐような物語。(ぱ)
欲望は果てしなく、人はそれを追い求める。水を含んでゆく海綿のように、増え、増殖してゆくものは、人の願い。願うことで、欲望することで人は人となり、やがて破壊をおびき寄せる。人は破壊することで人となる。(サ)

■写真
ROMI さんの写真
幻想的で美しくそして実のところ肺腑をえぐるようにどこか爪をたてる。イメージは広がりキラキラと輝く。こんな目で世界を見てみたい。(サ)

PIYO さんの写真
日常の風景の中にそれは潜んでいる。ゆるやかでかつ心をあたたかく包むように、それらは立ち上がって、静かな帳を下ろす。過去の幻影なのか夢なのか。(サ)

カヲリ☆さんの写真
確信犯的に描かれる独特の世界。アクが強く独創的な写真は見るものの世界を変える。欺瞞的でなあなあなこの世界に対して、ざっくり切り下ろすナイフのように。(サ)

「THE ADVENTURES OF FLOWER CATS」YUKI
透明感のある風景写真と合成技術と想像力で素敵な世界が出来上がりました。彼女とのコラボは本当に楽しい。おまけ (?) の作品解説も必見です !(ぱ)
猫は自由だ。あらゆる束縛から自由に見える。あら、こんなところに。あら。こんなところにも。。。(サ)

■絵
PECO
夢の中から生まれてきたような、幻想的で可愛くそれでいて甘さだけに流されない絵を描く絵師。今回の少女の夢も街に住んでみたいと思わせてくれます。こんなすてきな絵を描ける PECO さんの目になってみたい。(サ)

デス
孤独に街をゆく少女。旅は孤独から始まり、孤独に終わる。よく歩く街でも、時に、まったく違った場所に自分は居るのかも知れないと思うことがあったりします。それは、本当に自分が知ってるはずの街なのか、そうでないのかと一瞬惑うその瞬間はきっと旅。(サ)

Key
今回の絵はたぶん Key さんの中でもかなり力が入ってるのではないかと思われます。すごい。Key さんの絵には物語がある。そしてどこかに冷たい悲しさのようなものが感じられるのは僕だけではないはずだ。すごい好き。(サ)

アニュウリズム
自己の中から OutOf したもう一つの自己。君は私で私は君で。でも君と私は全く別の生き物であり、感情であり身体である。子供のような色彩の幻影で生きているそれらは、夢なのか現実なのか。じっと引き込まれる。(サ)

■エッセイ
「ポツドール」という劇団の紹介。演じるって何だ？リアルって何だ？そんなことをすごく考えさせられたエッセイ。小説って何だろう、フィクションって何だろう、なんて自分のジャンルに置き換えてみたり。(ぱ)
人間の精神と状態を意図的に Out Of することを考えてゆくと演劇にたどり着きました。今回、いざまんさんが関わってらっしゃる「ポツドール」という団体を中心に、演劇のリアル性についてエッセイを書いていただきました。是非その劇をこの目で見たかったのですが、残念ながら、ちょうど公演が終わってしまったところで、願いはかなわずじまいでした。ですが「ポツドール」のサイトを見ても、その楽しさはご理解いただけるのではないかと思います。(サ)

編集人から

ぱそ子
日常から、自分の枠から逸脱したい、してもらいたい。そんな想いで設けたテーマでしたが、逆に「日常」に目を向けるきっかけになった気がしました。一人で書くだけの創作活動から out of して Folio に飛び込んだわたしは、多くの素敵な人や作品に出会い、普段できない様々なことを経験した。それって、まるで旅だ。参加された方々、訪れてくれた方々が、Folio で思い思いの旅をしてもらえたら編集者冥利。

徳保隆夫
今回も編集長がデザイン案を作成し、私がウェブ製作を担当しました。Vol.8 とよく似たレイアウトですが、CSS は 1 から書き起こしています。幅可変の指示があったので、今回も段組にはテーブルレイアウトを用いました。シンプルな処理を心がけたつもりですがイメージマップの多用には苦笑する人もいるかな？

サイキカツミ
Folio を企画し始めてから、ちょうど二周年。長かったようだけどあっという間の出来事でした。今回は小説もかなり良いものが集まり、また、写真、絵、もどれもすばらしい出来で、僕はうれしいです。皆さんも楽しんでいただければ幸いです。参加された方、協力してくださった方、そしてなにより読んでくださった方、ありがとうございます。

次回予告 :2 ～ 3 ヶ月に一回発行してきた Folio ですが、一回ほど休憩をいたします。とはいうものの、Folio 絡みで別の企画を考えておりますので、その間にご報告ができるようになればいいなと思っております。WEB 版は夏の終わりか秋頃に次回の発表を行いたいと思います。皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。　（編集長　サイキカツミ）

Folio *vol.9*

Out Of……